下田島遺跡

（一）大川　社会資本総合整備（防災・安全）（５か年）事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2023

群馬県太田土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

下田島遺跡

（一）大川　社会資本総合整備（防災・安全）（５か年）事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇二三

群馬県太田土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

下田島遺跡

(一)大川　社会資本総合整備(防災・安全)(５か年)事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2023

群馬県太田土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

下田島遺跡出土の縄文土器群
縄文時代中期後葉～後期前葉期を主体に出土している

下田島遺跡出土の縄文石器群
各器種が出土しているが、凹石・磨石の量が際立つ

序

大川は、大間々扇状地扇端部にある重殿湧水池を水源として南流し、太田市下田島町で石田川へと注ぐ一級河川です。古代以来、水田耕作のための農業用水として利用されてきた重要な河川で、鎌倉時代末には大川の水をめぐって新田一族間で相論が起きた記録も見えます。しかし、大川は人々に恵みを与える一方で、河積が狭く河道の線形が悪いため、台風等の大雨による浸水被害をたびたび起こしてきました。こうした浸水被害に対し、群馬県では「誰もが安全で安心できる暮らしづくり」を目指して、河川改修事業を進めています。その一環として、大川下流部の川幅を拡げるとともに、蛇行する河道の線形を直線に是正する改修工事が計画され、事業地内に所在する下田島遺跡の発掘調査が当事業団により実施されることとなりました。

今回の発掘調査では、旧大川と考えられる河道跡が確認され、埋没土中から多量の縄文土器と石器が見つかりました。時期は中期後葉～後期前葉期で、その数の多さや大形のものも多く含まれることから、洪水等によって上流から流されてきたものではなく、縄文人の廃棄行為によるものと考えることができました。本遺跡の北西側の台地上に西田島遺跡がありますが、ここに同時期の縄文時代集落が存在することが推測できます。今回の発掘調査によって、木崎台地の歴史に新たな事実を加えることができました。本書が、太田市域における歴史の解明に広く役立つことができれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施および本書の作成にあたり、多大なご支援とご協力を賜りました、群馬県太田土木事務所をはじめ群馬県、太田市教育委員会、地元住民の皆様、関係者の皆様に心より感謝の意を表し、序文といたします。

令和５年10月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　向田忠正

例　言

1．本書は、平成29年度社会資本総合整備(防災・安全社会資本総合整備交付金)事業(一)大川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施され、令和５年度(一)大川　社会資本総合整備(防災・安全)(５か年)事業に伴う埋蔵文化財整理事業として実施した、下田島遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．下田島遺跡は、群馬県太田市下田島町1059-1、1059-2、1079-1、1079-2、1082-1、1082-2、1083、1084番地に所在する。

3．事業主体　群馬県太田土木事務所

4．調査主体　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

5．発掘調査の期間・担当者等は次のとおりである。

履行期間　平成29年５月１日～平成29年８月31日　　調査期間　平成29年６月１日～平成29年６月30日

調査担当　黒田　晃(主任調査研究員)、飛田野正佳(専門調査役)

遺跡掘削工事請負　株式会社シン技術コンサル北関東支店

委託　遺構測量　技研コンサル株式会社

6．資料整理の期間・担当者等は次のとおりである。

履行期間　令和５年４月１日～令和５年10月31日　　整理期間　令和５年４月１日～令和５年８月31日

整理担当　橋本　淳(主任調査研究員・資料統括)

7．本書の編集・執筆担当者等は次のとおりである。

編集　橋本　淳

執筆　本文　橋本　淳

遺物観察表　石器:関口博幸(上席調査研究員・資料統括)　　縄文土器:橋本　淳

埴輪・土師器・須恵器:神谷佳明(専門調査役)　　中近世遺物:大西雅広(専門調査役)

鉄製品・銭貨:板垣泰之(専門員(主任))

デジタル編集　齊田智彦(主任調査研究員)

遺構写真撮影　各調査担当者

遺物写真撮影　埴輪・土師器・須恵器:都木直人(専門調査役)　前記以外:各遺物観察表執筆者

8．石材同定は、飯島静男氏(群馬県地質研究会会員)に依頼した。

9．出土遺物及び記録図・写真などの記録類は、すべて群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

10．発掘調査及び本書の作成にあたり、次の関係機関にご指導とご支援を賜った。記して感謝の意を表す次第である。

群馬県地域創生部文化財保護課　太田市教育委員会

凡　例

1．本報告書の挿図中で使用した座標値は、世界測地系（測地成果2011）を用い、方位は座標北を示す。また、等高線や遺構断面図に記した標高値は海抜標高を示す。

2．調査範囲には４ｍ×４ｍのグリッド網を設定した。設定方法は第１章第４節２のとおりである。

3．遺構図・遺物図の縮尺は、原則として次のとおりである。縮尺の異なるものは、それぞれにスケールを付すか、遺物番号に縮尺率を併記した。また、遺物写真は遺物図と同縮尺とした。

遺構図　旧河道：1/250　断面：1/50

遺物図　縄文土器：1/3・1/4　石器：1/1・1/3・1/4　埴輪、土師器、須恵器、陶磁器：1/3　鉄製品：1/2　銭貨：1/1

4．図中で使用したスクリーントーンは、次のとおりである。

遺物図　（縄文土器）漆塗彩　（埴輪）赤色塗彩　（陶器）灰釉

（石器）　磨り面　　敲き面

5．縄文土器断面図中の●印は、胎土に繊維を混入していることを示している。

6．遺物観察表中の（　）付きの数値は、縄文土器は推定値、土師器、鉄製品は残存値を示している。

7．本文中、略称で記載したテフラは次のとおりである。

ＢＰ（As-BPGroup）：浅間板鼻褐色軽石群（18,000～22,000年前）　ＡＴ：姶良丹沢火山灰（25,000年前）

ＦＰ（Hr-FP）：榛名二ツ岳伊香保テフラ（６世紀中葉）　As-B：浅間Ｂテフラ（1108年）

8．本書で使用した地形図・地勢図は、次のとおりである。

国土地理院1/200000地勢図「宇都宮」平成18年４月１日発行、国土地理院1/50000地形図「深谷」平成10年９月１日発行

国土地理院1/25000地形図「上野境」平成30年８月７日発行、太田市1/10000「太田市平面図５」平成17年３月発行

目　次

口絵
序
例言・凡例・目次
第１章　発掘調査と遺跡の概要
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　遺跡の位置と地形 …… 4
　第３節　周辺の遺跡 …… 6
　第４節　発掘調査の方法と経過 …… 19
　　１　発掘調査の方法 …… 19
　　２　調査グリッドの設定 …… 19
　　３　発掘調査の経過 …… 20
　　４　基本土層 …… 20
第２章　発見された遺構と遺物
　第１節　旧河道 …… 21
　第２節　遺構外出土遺物 …… 74
第３章　まとめ …… 75
付表
　１　石器集計表 …… 76
　２　遺物観察表 …… 79
写真図版
報告書抄録
奥付

挿図目次

第１図　石田川開域の整備計画図 …… 2
第２図　下田島遺跡の位置 …… 3
第３図　本発掘地点の位置 …… 4
第４図　遺跡周辺の地形区分 …… 5
第５図　明治17年陸軍迅速測図による遺跡周辺 …… 5
第６図　周辺の遺跡（旧石器～弥生時代） …… 15
第７図　周辺の遺跡（古墳時代） …… 16
第８図　周辺の遺跡（奈良・平安時代） …… 17
第９図　周辺の遺跡（中世） …… 18
第10図　グリッド設定図 …… 19
第11図　遺構全体図 …… 20
第12図　旧河道平面図 …… 21
第13図　旧河道・調査区西壁断面図 …… 22
第14図　グリッド別遺物出土数量 …… 23
第15図　旧河道出土遺物（１）（縄文土器１） …… 24
第16図　旧河道出土遺物（２）（縄文土器２） …… 25
第17図　旧河道出土遺物（３）（縄文土器３） …… 26
第18図　旧河道出土遺物（４）（縄文土器４） …… 27
第19図　旧河道出土遺物（５）（縄文土器５） …… 28
第20図　旧河道出土遺物（６）（縄文土器６） …… 29
第21図　旧河道出土遺物（７）（縄文土器７） …… 30
第22図　旧河道出土遺物（８）（縄文土器８） …… 31
第23図　旧河道出土遺物（９）（縄文土器９） …… 32
第24図　旧河道出土遺物（10）（縄文土器10） …… 33
第25図　旧河道出土遺物（11）（縄文土器11） …… 34
第26図　旧河道出土遺物（12）（縄文土器12） …… 35
第27図　旧河道出土遺物（13）（縄文土器13） …… 36
第28図　旧河道出土遺物（14）（縄文土器14） …… 37
第29図　旧河道出土遺物（15）（縄文土器15） …… 38
第30図　旧河道出土遺物（16）（縄文土器16） …… 39
第31図　旧河道出土遺物（17）（縄文土器17） …… 40
第32図　旧河道出土遺物（18）（縄文土器18） …… 41
第33図　旧河道出土遺物（19）（縄文土器19） …… 42
第34図　旧河道出土遺物（20）（縄文土器20） …… 43
第35図　旧河道出土遺物（21）（縄文土器21） …… 44
第36図　旧河道出土遺物（22）（縄文土器22） …… 45
第37図　旧河道出土遺物（23）（縄文土器23） …… 46
第38図　旧河道出土遺物（24）（縄文土器24） …… 47
第39図　旧河道出土遺物（25）（縄文土器25） …… 48
第40図　旧河道出土遺物（26）（縄文土器26） …… 49
第41図　旧河道出土遺物（27）（縄文土器27） …… 50
第42図　旧河道出土遺物（28）（縄文土器28） …… 51
第43図　旧河道出土遺物（29）（縄文土器29） …… 52
第44図　旧河道出土遺物（30）（縄文土器30） …… 53
第45図　旧河道出土遺物（31）（縄文土器31） …… 54
第46図　旧河道出土遺物（32）（縄文石器１） …… 55
第47図　旧河道出土遺物（33）（縄文石器２） …… 56
第48図　旧河道出土遺物（34）（縄文石器３） …… 57
第49図　旧河道出土遺物（35）（縄文石器４） …… 58
第50図　旧河道出土遺物（36）（縄文石器５） …… 59
第51図　旧河道出土遺物（37）（縄文石器６） …… 60
第52図　旧河道出土遺物（38）（縄文石器７） …… 61
第53図　旧河道出土遺物（39）（縄文石器８） …… 62
第54図　旧河道出土遺物（40）（縄文石器９） …… 63
第55図　旧河道出土遺物（41）（縄文石器10） …… 64
第56図　旧河道出土遺物（42）（縄文石器11） …… 65
第57図　旧河道出土遺物（43）（縄文石器12） …… 66
第58図　旧河道出土遺物（44）（縄文石器13） …… 67
第59図　旧河道出土遺物（45）（縄文石器14） …… 68
第60図　旧河道出土遺物（46）（縄文石器15） …… 69
第61図　旧河道出土遺物（47）（縄文石器16） …… 70
第62図　旧河道出土遺物（48）（埴輪） …… 71
第63図　旧河道出土遺物（49）（古墳時代以降遺物１） …… 72
第64図　旧河道出土遺物（50）（古墳時代以降遺物２） …… 73
第65図　遺構外出土遺物 …… 74

表 目 次

第１表　周辺の遺跡（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第２表　周辺の遺跡（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第３表　周辺の遺跡（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

写真目次

PL. 1　1．調査区全景（北から）
　　2．調査区全景（北東から）
PL. 2　1．旧河道全景（北東から）
　　2．旧河道北部（北西から）
　　3．旧河道北部（南から）
　　4．旧河道調査状況（北西から）
　　5．旧河道北端部確認状況（南から）
PL. 3　1．旧河道１ＧＦ３付近遺物出土状況（南から）
　　2．旧河道１ＧＥ３付近遺物出土状況（南から）
　　3．旧河道断面Ａ（南から）
　　4．旧河道断面Ｂ西端部（南から）
　　5．旧河道断面Ｃ（南東から）
　　6．旧河道断面Ｃ西半部（南から）
　　7．調査区西壁断面Ｄ（北東から）
PL. 4　旧河道出土遺物（１）
PL. 5　旧河道出土遺物（２）
PL. 6　旧河道出土遺物（３）
PL. 7　旧河道出土遺物（４）
PL. 8　旧河道出土遺物（５）
PL. 9　旧河道出土遺物（６）
PL. 10　旧河道出土遺物（７）
PL. 11　旧河道出土遺物（８）
PL. 12　旧河道出土遺物（９）
PL. 13　旧河道出土遺物（10）
PL. 14　旧河道出土遺物（11）
PL. 15　旧河道出土遺物（12）
PL. 16　旧河道出土遺物（13）
PL. 17　旧河道出土遺物（14）
PL. 18　旧河道出土遺物（15）
PL. 19　旧河道出土遺物（16）
PL. 20　旧河道出土遺物（17）
PL. 21　旧河道出土遺物（18）
PL. 22　旧河道出土遺物（19）
PL. 23　旧河道出土遺物（20）
PL. 24　旧河道出土遺物（21）
PL. 25　旧河道出土遺物（22）
PL. 26　旧河道出土遺物（23）
PL. 27　旧河道出土遺物（24）
PL. 28　旧河道出土遺物（25）
PL. 29　旧河道出土遺物（26）
PL. 30　旧河道出土遺物（27）
PL. 31　旧河道出土遺物（28）
PL. 32　旧河道出土遺物（29）
PL. 33　旧河道出土遺物（30）
　　遺構外出土遺物

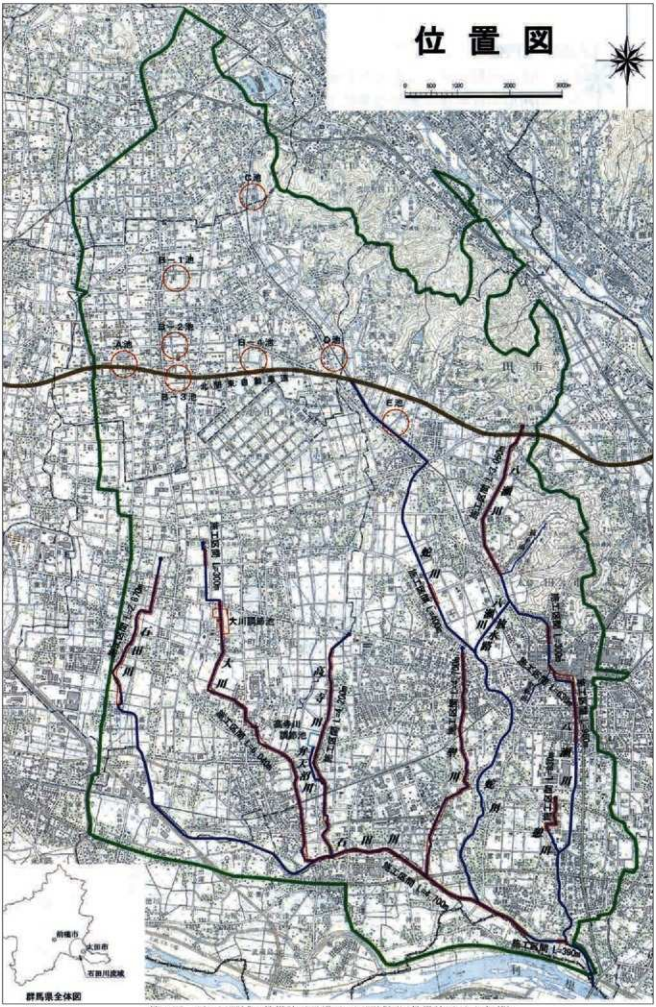
第１章　発掘調査と遺跡の概要

第１節　調査に至る経緯

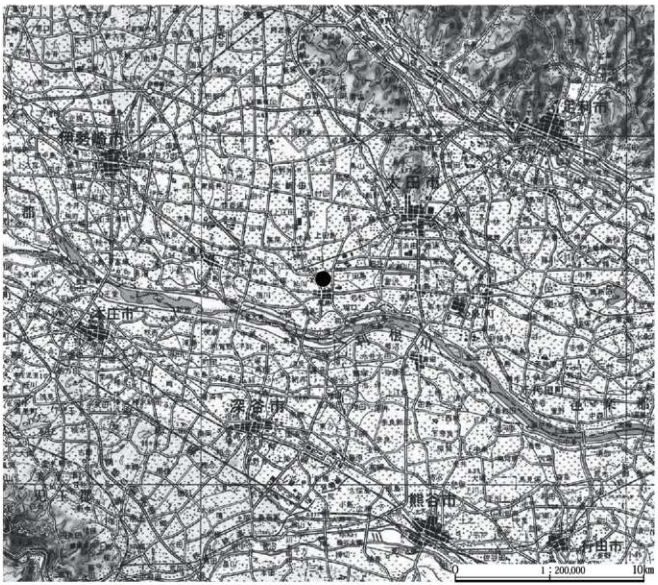
大川は、太田市新田市野井町に所在する大間々扇状地扇端部の湧水の一つである重殿湧水池を水源として南流し、木崎台地に突き当たると台地の東縁を回って下田島町で石田川に合流する。大川が合流する石田川は、重殿湧水池の西方にある矢太神湧水池を水源として南流し、尾島台地に突き当たると台地の北縁に沿って東流し、古戸町地先で利根川に注ぐ。この石田川には大川のほか、大川の下流で高寺川・聖川・蛇川・八瀬川が流入しており、流域全体を石田川圏域として位置づけられている（第１図）。石田川を含め、これらの支川はもともと湧水池を水源とした小河川であり、概して川幅が狭く、河道の線形が悪いという共通点がある。こうした状況や各支川から石田川に水が集まる構図から、石田川流域、各支川域で台風等の大雨による浸水被害が発生してきた。

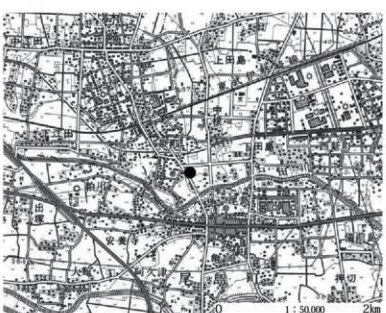
石田川圏域における治水事業は、昭和16（1941）年から石田川本川の河川改修に始まるが、昭和22（1947）年のカスリーン台風等により相次いで洪水被害に見舞われたことを契機に、昭和29（1954）年に計画変更が行われた。一方、石田川に流入する各支川の河川改修は、石田川本川の河川改修がある程度進捗した後に実施するものとして昭和37（1962）年から八瀬川、昭和45（1970）年から蛇川、平成元（1989）年から聖川の河川改修にそれぞれ着手している。大川については平成４（1992）年に着手し、河川改修とあわせて調節池を上流部である新田反町町地先で整備している。こうした治水施設の整備により大きな洪水被害は減少してきたが、依然として石田川本川の上流部及び大川をはじめとする各支川の未改修区間における溢水による浸水被害や、石田川本川中下流築堤区間における内水による浸水被害等が発生しており、石田川圏域のさらなる発展が見込まれるなか洪水被害軽減のために圏域全体を見据えた治水対策が必要として、平成13（2001）年に群馬県により『石田川圏域河川整備計画』（以下、圏域整備計画という）が策定された。この計画で大川は、「河積が著しく狭小の上、河道の線形が悪いため浸水被害が発生している。このため、河道の拡幅・線形の是正及び調節池の整備を実施する事により、概ね30年に１回程度発生すると予想される洪水を安全に流下させる。なお大川が合流する石田川中流部の河道の拡幅が完了するまでは中流部の現況の流下能力と同様な、概ね10年に１回程度発生すると予想される洪水を安全に流下させる断面で当面改修を進める。」とされた。『はばたけ群馬・県土整備プラン』2008－2017及び2013－2022では、４つの取り組むべきことの②安全「もっと、暮らしに安心・安全を」に、第15次群馬県総合計画『はばたけ群馬プランⅡ』平成28年度～平成31年度では、「基本目標Ⅱ 誰もが安全で安心できる暮らしづくり　政策６ 安全な暮らし実現　２ 災害に強い県土づくり」に位置づけられており、「災害の少ない「安全」な県土づくりを進めるとともに、災害時の被害を最小限にとどめるための備えを万全にし、県民の生活を守ります」として、圏域整備計画に基づき継続して事業が進められている。大川河川改修の最新の計画では、現況流下能力約10㎥/sを計画流下能力61㎥/sに、想定氾濫面積419.1haを０haに、想定氾濫区域内の浸水戸数870戸を０戸にすることとしている。

この計画に則り、東武線以南の下流工区で川幅を拡げるとともに、最下流部で西側に蛇行する河道の線形を直線に是正する改修工事が計画され、群馬県太田土木事務所（以下、県太田土木事務所という）から群馬県教育委員会文化財保護課（現群馬県地域創生部文化財保護課、以下、県文化財保護課という）に対し、事業地内での埋蔵文化財の有無について照会があった。県文化財保護課は、平成28（2016）年12月に試掘・確認調査を実施し、事業地内の一部で旧大川流路と考えられる砂層中に多量の縄文土器が包含されていることを確認した。これにより本調査を要するとの判断に至り、県太田土木事務所と県文化財保護課間の調整を経て、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を受託することが決定した。そして、平成29（2017）年５月１日付で県太田土木事務所と当事業団との間に発掘調査の委託契約が締結され、発掘調査を実施することとなった。



第１図　石田川圏域の整備計画図(『石田川圏域河川整備計画』より転載)





第２図　下田島遺跡の位置

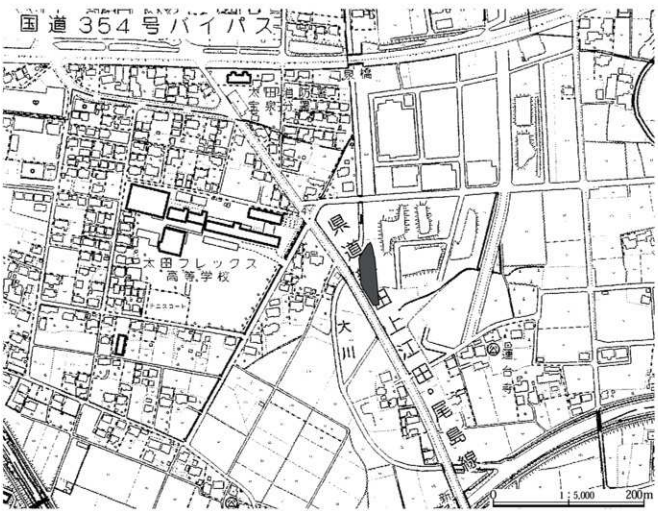
第２節　遺跡の位置と地形

下田島遺跡は、太田市南西部の下田島町地内に所在し、大間々扇状地藪塚面の南側に広がる扇端低地最南端に立地する。本来の下田島遺跡は、本発掘地点の東側に広がる藪塚面Ｂとされる微高地の範囲であるが、前述した県文化財保護課による試掘・確認調査により、遺跡範囲を拡げた形となった。

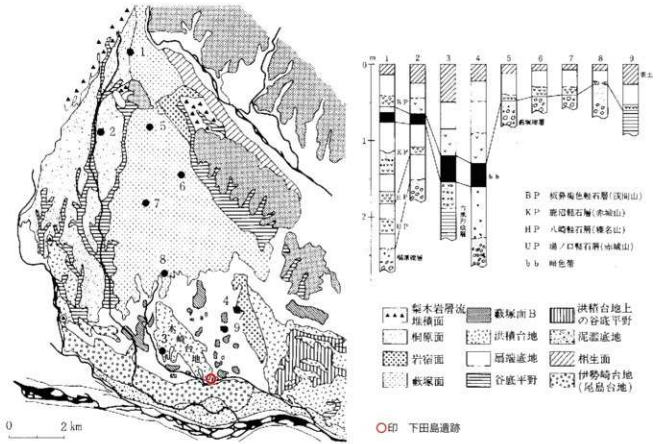
本発掘地点の西側は、木崎台地の南東端にあたる。木崎台地は、大間々扇状地に先行する古い洪積台地で、古渡良瀬川による大間々扇状地形成過程において浸食し残された地形とされている。赤城火山の泥流堆積物を基盤にしていると考えられており、中部ローム層最上部の暗色帯と上部ローム層が堆積している。また、東側には藪塚面Ｂと呼ばれる微高地が広がる。藪塚面Ｂは、扇端低地内に島状に点在する微高地で、古渡良瀬川の東遷後、上部ローム層の一部や二次堆積の上部ローム層が堆積した場所である（第４図）。本発掘地点は、このような西の木崎台地と東の微高地に挟まれた北東－南西方向の沖積低地で、この低地内を流下する大川の左岸になる。本発掘地点の標高は34m程で、東側の微高地との比高は１m、西側の木崎台地との比高は３m程を測る。

大川はもともと木崎台地の東縁に沿って弧を描くように流下していたが（第５図）、現在は木崎台地の東端部を貫くように南北に直線状に流下している。木崎台地を抜けると、緩やかに西側に弧を描きながら、最下流では東流して石田川へと合流する（第３図）。いつの時期に木崎台地を貫く流路になったのかは不明だが、昭和８年頃の地籍図ではすでに現流路の位置と変わらないことから、明治・大正年間の頃と推測される。また、いかなる理由で流路が変わったのかも定かではない。

本発掘地点は、大川が木崎台地を南北に貫く流路の延長線上で、県道新田上江田尾島線との間の位置にあたる。



第３図　本発掘地点の位置



第４図　遺跡周辺の地形区分(『太田市史』通史編　自然　図１－21,22を転載・一部改変)

第５図　明治17年陸軍迅速測図による遺跡周辺

第３節　周辺の遺跡

本節では、木崎台地を中心とした範囲の遺跡について時代ごとに概観することとする。第６～９図には、遺跡立地と地形との関係を明瞭にするため、沖積地にトーンを入れて示した。第４図の地形区分図を基に、昭和22(1947)・23(1948)年に米軍によって撮影された航空写真を参考にしたが、第４図で沖積地とされている範囲にも後の河川による浸食や地形改変によって、現水田下に隠れた微高地が複雑に存在することがよく分かる。

旧石器時代　旧石器時代の遺跡は、第６図の範囲では７遺跡が確認されており、木崎台地西縁から南縁部を中心とした分布を示す。うち、発掘調査でローム層中から遺物が確認されている遺跡は、花園遺跡(７)・中江田原遺跡(10)・中江田Ａ遺跡(15)の３遺跡のみであり、花園遺跡以外は単独出土となる。花園遺跡は、国道354号バイパス建設に伴う発掘調査において、西側に谷を望む木崎台地南端部で旧石器が確認されている。２面の文化層が調査され、礫群やナイフ形石器等の石器群が出土しているが、巻頭カラー写真以外は報告書での掲載がないため詳細は不明である。太田市教育委員会小宮俊久氏のご教示によれば、礫群はＢＰ層下、ナイフ形石器等の石器群はＡＴ層下出土とのことである。中江田原遺跡では、ＢＰを含むローム層中からナイフ形石器１点、住居埋土中からも１点出土している。また、杉の抜根作業中に大型の有樋尖頭器が採集されている。中江田Ａ遺跡では、町道南北116号線改修工事に伴う発掘調査で、ＢＰを含む硬質ローム層中から黒色安山岩製の縦長剥片１点、国道354号バイパス建設に伴う発掘調査で、同一層中より黒曜石製のスクレイパー１点が出土している。台遺跡(20)は、木崎台地西縁部がテラス状に張り出す位置にある。台遺跡ではローム層中からの出土は無かったが、住居埋土中等から尖頭器様のナイフ形石器やスクレイパー等の出土が見られる。中江田Ｂ遺跡(16)ではナイフ形石器やスクレイパー等が、東に隣接する中江田Ｃ遺跡(17)では土採りの際に礫器やスクレイパー等が採集されているが、出土層位は明確ではない。木崎台地以外では、尾島台地にある歌舞伎遺跡(71)で、黒曜石製の尖頭器１点が採集されている。

縄文時代　縄文時代の遺跡も、木崎台地縁辺部や沖積地内にある藪塚面Ｂと考えられる微高地上に立地する傾向が明瞭に看取される。

草創期　木崎台地縁辺部を主として７遺跡が確認されており、希少な草創期遺跡が分布する地域といえる。木崎台地南縁部の中江田原遺跡(10)、同台地北西端西側の北宿遺跡(23)で爪形文土器が出土している。中江田原遺跡は国道354号バイパス建設に伴う調査、北宿遺跡は江田館跡南に接する県道拡幅に伴い、西端部の調査区で出土している。尾島台地にある小角田前遺跡(66)では、上武道路建設に伴う調査で押圧縄文系土器４点、尖頭器・スクレイパー等の石器４点が、竪穴建物埋土中や表面採集により確認されている。ほか採集資料として、中江田Ｂ遺跡(16)で爪形文土器、花園遺跡(７)や大通寺東遺跡(33)で尖頭器、新堀前遺跡(44)でチャート製の有茎尖頭器が確認されている。

早期　早期も比較的多くの遺跡が確認でき、木崎台地南・西・東縁部や木崎台地周縁の微高地で遺物の出土が見られる。

草創期爪形文土器が出土した中江田原遺跡(10)で撚糸文系・田戸上層式・条痕文系が、同じく北宿遺跡(23)で撚糸文系・条痕文系の出土が見られる。木崎台地南縁部の花園遺跡(７)で撚糸文系・田戸下層式・条痕文系、八ツ縄遺跡(８)で条痕文系、中江田Ｂ遺跡(16)で撚糸文系・条痕文系、西縁部の台遺跡(20)で撚糸文系・押型文系、東縁部の長命寺裏遺跡(34)で撚糸文系・条痕文系、大豆柄遺跡(35)は資料が確認できないが、稲荷台式や条痕文系の報告がある。下田遺跡(36)は東縁に接する沖積地に立地し、撚糸文系・田戸下層式・条痕文系が出土している。藪塚面Ｂと考えられる微高地でも、木崎台地北西端の北側にある一丁田遺跡(51)で押型文系・鵜ヶ島台式、木崎台地南側の下江田本郷遺跡(74)で撚糸文系・田戸下層式・押型文系・条痕文系の早期各時期の土器が見られる。

前期　前期の遺跡は少ない。竪穴建物は木崎台地南縁部に立地する花園遺跡(７)で検出された諸磯ｂ式期の１棟のみである。台地縁辺部を通過する国道354号バイパス建設に伴う発掘調査で確認され、ほかに花積下層式・諸磯ｃ式の出土が見られる。遺物のみ出土する遺跡もわずかであり、木崎台地では南縁部の八ツ縄遺跡(８)で花積下層式・諸磯ａ式、中江田原遺跡(10)で前・後葉期、中

江田Ｂ遺跡(16)で前葉期、北西端東側の東田遺跡(26)で後葉期の出土が見られる程度である。ほか、早期が確認されている微高地の一丁田遺跡(51)で有尾式・諸磯ａ～ｃ式、下江田本郷遺跡(74)で前半期の土器が見られるのみである。

中期前葉～中葉　該期の竪穴建物の検出は皆無で、遺物の出土も断片的である。木崎台地南縁部の花園遺跡(７)で阿玉台式、八ツ縄遺跡(８)で勝坂式・阿玉台式、中江田本郷遺跡(12)で中葉期、同台地北西端西側の北宿遺跡(23)で勝坂式・阿玉台式、尾島台地の小角田前遺跡(66)で阿玉台式の出土がわずかに見られるにすぎない。

中期後葉～後期前半　当地域において最も遺跡数が多くなる時期であるが、木崎台地での竪穴建物の調査事例はそれほど多くはない。

まず木崎台地の遺跡で見ると、南縁部では中江田宿通遺跡(14)で称名寺Ⅱ式ないし堀之内１式の竪穴建物１棟、中江田Ａ遺跡(15)で後期前葉期と考えられる竪穴建物１棟が調査されているのみである。中江田Ａ遺跡の遺構外出土土器は堀之内１式が主体をなし、称名寺Ⅱ式からの系譜がたどれる良好な個体土器が出土している。粕川山之神遺跡(５)では、国道354号バイパス建設に伴う調査で、後期前葉期の土坑４基が検出されている。すべて台地西縁部にあり、称名寺Ⅱ式期１基の南方に堀之内２式期３基がまとまっており、地点の異なった分布を見せる。ほかは遺物のみの出土で、中江田本郷遺跡(12)では加曽利E3、E4式を主体に後期前葉期がわずか、中江田原遺跡(10)で中期後半期、八ツ縄遺跡(８)で加曽利E3式～称名寺Ⅰ式、花園遺跡(７)で加曽利E2式～称名寺Ⅱ式の出土が見られる程度である。台地南東端にあたる西田島遺跡(２)では、太田フレックス高校の南側で中期と判断される竪穴建物４棟が確認されているが、トレンチ調査による平面確認のため詳細は不明である。また、旧太田西女子高校(太田フレックス高校の前身)の教室増築に伴う調査では、土坑14基が調査されている。土坑出土土器の掲載がないため時期は不明だが、調査区出土の土器を見ると加曽利E2式～堀之内２式があり、該期の集落の存在を想定できよう。

木崎台地西縁部では、台遺跡(20)で竪穴建物の検出がある。台遺跡はほ場整備に伴う道路及び水路部分が調査対象となり、トレンチ状の調査区５本の調査であった。竪穴建物６棟、土坑20基以上を検出との報告があるが、竪穴建物１棟のみの掲載であるため詳細は不明である。唯一掲載された竪穴建物を見ると、加曽利E2式期と判断されるため、中期後葉期の集落と考えられよう。また、加曽利B1式が掲載されているほか、後期前葉期が出土しているとの報告がある。ほか、明神遺跡(19)で加曽利Ｅ式、能得寺南遺跡(22)で中期後葉～後期初頭期、野中遺跡(21)で中期土器採集の報告がある。

木崎台地北縁部では、北宿遺跡(23)で中期後葉期の竪穴建物７棟、土坑等が調査されている。竪穴建物の時期は加曽利E3式期が主体をなし、加曽利E4式期の土坑も見られる。北西端部にあたる北宿遺跡を除いて、北縁部では今のところ縄文時代の遺跡は確認されていないようである。

木崎台地東縁部では、長命寺裏遺跡(34)で堀之内１式、大豆柄遺跡(35)で中・後期土器の報告がある。下田遺跡(36)は台地東縁を流れていた旧河道の調査で、中期後葉期を主体として加曽利E2式～堀之内２式が大量に出土している。土器のなかには漆塗り土器も見られる。旧河道では杭列２か所が確認されているほか、片口付鳥帽子形漆器や把手付漆器などの漆器・編籠・石斧柄・櫂状木器などの木製品、クルミ・トチの堅果類が出土しており、縄文時代の生活を復元するうえで貴重な成果があがっている。旧河道出土であるが、西側の台地上に該期の集落があり、そこから廃棄された遺物群と捉えることができよう。

木崎台地周縁の微高地にも、多くの遺跡が存在する。木発掘地点の東側にある微高地北西縁部の下田島遺跡(１)の調査で、後期の土坑を検出との記載があるが、報告書が確認できないため詳細は不明である。木崎台地北西端の北側の微高地には、一丁田遺跡(51)と観音前遺跡(50)が立地する。一丁田遺跡では、中期後葉期の竪穴建物19棟、土坑75基、埋設土器17基、集石４基等が検出されている。時期は加曽利E2・E3式期を主体とし、加曽利E4式期と考えられる敷石住居も１棟確認されている。一丁田遺跡の東側に隣接する観音前遺跡(50)は、一丁田遺跡と同時に実施された調査で、１号住居址体土器として称名寺Ⅱ式の個体土器が掲載されている。遺構配置図に１号住居は見られないが、該期の住居があったということであろう。また、加曽利E3ないしE4式と考えられ

る埋設土器や、加曽利E4式や称名寺式を出土する土坑が調査されており、西側の一丁田遺跡より新しい時期まで継続している様相が見られる。住宅団地建設に伴う南部の調査では、中期後葉～後期初頭期の竪穴建物５棟、土坑73基等が調査されている。竪穴建物は加曽利E3式～称名寺Ⅰ式期にわたり、２基の埋甕を伴う称名寺Ⅰ式期の柄鏡形竪穴建物も検出されている。報告書に掲載されている土坑を見ると、称名寺式期が主体をなしているように見える。五領遺跡(52)は、一丁田遺跡(51)と谷を挟んだ西側の微高地東縁部にあり、町道拡幅工事の際に中期後葉～後期初頭期の土器が多量に出土している。下田中八幡遺跡(55)でも後期前葉期を主体とする遺物が出土、堀之内１式の良好な資料がある。上江田西田遺跡(56)は範囲が広いが、石田川がくの字状に折れる地点の左岸で、後期前葉期の敷石住居と考えられる遺構２棟が調査されている。源六堰遺跡(58)でも後期前葉期を主体に中期後葉期も出土している。

木崎台地南西側の微高地では、三ツ木皿沼遺跡(61)で称名寺Ⅱ式期の竪穴建物１棟のほか、称名寺Ⅱ式や堀之内１式期の土坑が検出されている。小角田前遺跡(66)でも上武道路建設に伴う調査で、称名寺Ⅱ式ないし堀之内１式期と考えられる竪穴建物１棟、土坑が調査されている。ほか、歌舞伎遺跡(71)で称名寺式期の土坑が、鼠塚遺跡(69)で加曽利E2式期の埋設土器１基、堀之内１式期の土坑１基が調査されている。

後期後半～晩期　該期の遺跡はほぼ皆無であり、現状で確認できるのは小角田前遺跡(66)で工字文を施す晩期後葉土器１点が出土しているのみである。

その他　延享割遺跡(37)は散布地との報告があるが、国道354号バイパス建設に伴う発掘調査では、縄文時代の遺構・遺物は確認されていない。

弥生時代　弥生時代の遺跡は少なく、確認されるのも中期からである。中期の竪穴建物は、尾島台地にある長楽寺遺跡(80)で調査された２棟が唯一の例である。ほか、同台地に立地する阿久津宮内遺跡(96)の北端部で、中期の土器約500点が出土している。壺・甕・鉢などのセットが確認でき、周囲に集落の存在を想定させる。後期は、木崎台地南東端西側にある粕川山之神遺跡(５)と同台地西縁部にある台遺跡(20)の２遺跡で、それぞれ２棟の竪穴建物が調査されている。台遺跡では、１棟から赤井戸式の完形の壺と甕、もう１棟からは樽式の甕が出土している。粕川山之神遺跡は国道354号バイパス建設に伴う調査で、台地西縁部に竪穴建物が展開することが確認されている。ほか、木崎台地北西端東側にある東田遺跡(26)で樽式期の土坑１基が検出されている以外は、遺物のみの出土がわずかに見られる程度である。花園遺跡(７)で中期後葉栗林式・後期樽式の土器片がわずかに出土しているほか、中江田Ａ遺跡(15)で樽式の土器片が採集されている。

古墳時代　古墳時代に至って地域開発が積極的に進められ、低位の微高地にも集落が拡大する傾向が明瞭に看取される(第７図)。木崎台地縁辺部や藪塚面Ｂとされる木崎台地周縁の微高地に数多くの遺跡が分布し、遺跡数が増大する。以下、時期毎に概要を記すが、尾島工業団地周辺の遺跡は一つのまとまりを持った大規模な遺跡群と考えられるため、後段で別に述べる。

前期　前期の竪穴建物が検出されているのは、木崎台地南縁部で花園遺跡(７)、同台地西縁部の台遺跡(20)、同台地北西端の北宿遺跡(23)、同台地東縁部の一町田・堀之内遺跡(31)、木崎台地南東端東側の微高地にある下田島遺跡(１)、同台地西側の微高地にある前六供遺跡(53)・源六堰遺跡(58)・下田中中道遺跡(60)、尾島台地の長楽寺遺跡(80)が挙げられる程度だが、弥生時代に比べれば遺跡数は格段に増えているといえるだろう。木崎台地では、調査が及んでいないだけかもしれないが、南縁部・西縁部・北西端・東縁部で１遺跡ずつの検出となっており、ある程度の間隔を空けて集落が展開していた可能性を考えることができる。

花園遺跡(７)は、国道354号バイパス建設に伴う調査で、前期～平安時代の竪穴建物66棟が調査され、前期は10棟ほどが確認されている。台遺跡(20)でも前期～平安時代の竪穴建物145棟が調査されている。北宿遺跡(23)は台地北縁部において竪穴建物７棟が調査されている。中後期の竪穴建物は検出されておらず、前期に限定された集落のようだ。一町田・堀之内遺跡(31)では前期～後期の集落が調査され、竪穴建物40棟あまりが確認されているが、報告書が確認できなかったり、平面確認のみのため詳細は不明である。源六堰遺跡(58)では竪穴建物２

棟が調査されており、石田川を挟んだ北側にある上江田西田遺跡(56)でも、前期の土器が多く出土している。また、下田中八幡遺跡(55)や木崎台地北東側の微高地にある雁子遺跡(42)でも、該期の遺物が採集されている。長楽寺遺跡(80)では31棟の竪穴建物調査の報告があるが、報告書は確認できない。ほか、尾島台地の大舘馬場遺跡(95)で４世紀代の竪穴建物１棟の可能性の報告があるが、掘り込みやや浅、柱穴が確認されていない。

中期　前期から継続する遺跡のほかに、中期の竪穴建物が検出されているのは、木崎台地南東端東側の延享割遺跡(37)・長福寺遺跡(38)、木崎台地西縁部の龍得寺南遺跡(22)、木崎台地北西端東側の東田遺跡(26)、木崎台地北縁部の林遺跡(29)、木崎台地北西端北側の微高地にある一丁田遺跡(51)・観音前遺跡(50)、木崎台地北東側の微高地にある要害遺跡(45)、尾島台地の粕川新堀下遺跡(101)が挙げられる。

延享割遺跡(37)は、国道354号バイパス建設に伴う調査で、５世紀代の竪穴建物25棟が密集した状態で調査されている。前期と後期が検出されず、約１世紀の短い期間のみ存続した集落として独特の様相を見せる。東に隣接する長福寺遺跡(38)でも５世紀代の竪穴建物１棟が検出されており、延享割遺跡の集落域とは離れるが何らかの関連があるものと考えられよう。龍得寺南遺跡(22)では竪穴建物３棟が調査された記載があるが、報告書が確認できないため詳細は不明である。東田遺跡(26)では竪穴建物８棟のほか、平面確認のみで古墳時代とされている竪穴建物が６棟確認されている。林遺跡(29)では竪穴建物１棟が調査され、林遺跡と東田遺跡の間にある登戸遺跡(28)でも、県道側溝工事等で５～６世紀代の土師器が採集されている。一丁田遺跡(51)では竪穴建物４棟、観音前遺跡(50)で中期以前と考えられる竪穴建物１棟が調査されている。尾島台地の粕川新堀下遺跡(101)では、５世紀後半～６世紀前半の竪穴建物36棟が調査されている。そのほか、東田遺跡の南隣にある庚申塚遺跡(27)で、５世紀代の土師器が畑から採集されており、町道改良工事の際には、土器焼成土坑の可能性がある落ち込みが確認されている。御門遺跡(76)でも、耕作作業中に中期の甕１個体が採集されている。下田遺跡(36)では水路が調査され、堰が２か所で確認されているほか、鞍・鐙・梯子・建築材など多量の木製品が出土している。

後期　６世紀代になると竪穴建物の検出数は急増する。木崎台地南縁部に遺跡が集中する傾向が見られ、粕川山之神遺跡(５)・花園遺跡(７)・八ツ縄遺跡(８)・中江田原遺跡(10)・中江田本郷遺跡(12)で集落が確認されている。

粕川山之神遺跡(５)では、国道354号バイパス建設に伴う調査およびバイパス以南の民間開発に伴う調査で、６～７世紀代の竪穴建物70棟が調査されており、台地南縁部に後期に限定された集落が広がることが分かる。花園遺跡(７)でも国道354号バイパス建設に伴う調査で30棟ほどが調査されているほか、木崎中学校校庭内で20棟以上の竪穴建物が調査されている。また、台地縁辺部で溜井２基が確認されている。国道354号バイパス建設に伴う調査では、八ツ縄遺跡(８)で後期～平安時代の竪穴建物47棟、中江田本郷遺跡(12)で同じく後期～平安時代の竪穴建物55棟、中江田原遺跡(10)でも後期～平安時代の竪穴建物86棟が調査されている。中江田遺跡群の集落は、６世紀後半が初現との報告がある。寒沢遺跡(９)では、畑の耕作作業中に７世紀代の甕・鉢・甑のセットが採集されている。下耕地遺跡(30)は台地中央部に所在し、樹枝状に開析された谷の東側にある。土採りの際に後期の土器群が採集されている。木崎台地南縁部では、東は粕川山之神遺跡(５)から西は中江田本郷遺跡(12)にかけて、また谷に沿って台地中央部まで広域に後期集落が展開していたようである。

木崎台地北縁部では、大通寺後遺跡(32)で竪穴建物11棟が調査されている。遺跡南西角の調査では、一辺10mに及ぶ竪穴建物を含め４棟が検出されており、中期以前のようにも見えるが、平面確認のみのため詳細は不明である。

木崎台地西側の微高地では、上江田西田遺跡(56)で東京電力の鉄塔建設工事に伴い、竪穴建物19棟が調査されており、濃密な分布が見られた。前六供遺跡(53)でも後期の竪穴建物の検出があるほか、三ツ木皿沼遺跡(61)で６世紀代の竪穴建物13棟、木崎台地北東側の微高地にある振矢遺跡(48)で竪穴建物４棟、尾島台地北縁部にある宝積院遺跡(82)で竪穴建物16棟が調査されている。

そのほか、下田島遺跡の北方にある石之塔(39)、杉ノ内(40)、松木ヶ谷戸遺跡(41)で細別時期は不明だが、古墳時代の土器片が採集されており、木崎台地の北東側や

東側の微高地上にも集落が展開してきた様相が看取される。

尾島工業団地周辺の遺跡群　尾島工業団地は木崎台地南西側の微高地・沖積地内にあり、小丸田下遺跡(65)・小丸田前遺跡(66)・水久保遺跡(67)・水久保Ⅱ遺跡(68)・鼠塚遺跡(69)・世良田土屋分遺跡(70)・歌舞伎遺跡(71)が分布する。第7図のとおり大部分に沖積地の表示をせざるを得なかったが、尾島工業団地造成や上武道路建設に伴う発掘調査では、現水田下に微高地が複雑に存在し、古墳時代から平安時代に至る1,500棟にも及ぶ竪穴建物が確認され、該期の大規模集落であることが判明した。時期が判別されているものは、3世紀後半3棟、4世紀代43棟、5世紀代118棟、6世紀代544棟、7世紀代166棟である。前期から集落が展開し、6世紀代に急激に拡大することが分かる。遺跡別にみると、4世紀代は歌舞伎遺跡が主体であり、5世紀後半から水久保遺跡が増え始め、6世紀代になって小丸田前遺跡へと拡大していく様子が看取される。各遺跡の中心に、鼠塚遺跡が立地する中洲状の微高地があり、6世紀代の円墳1基、6世紀後半の前方後円墳1基が調査されている。低地を隔てた南側でも、5世紀後半の円墳1基が確認されている。前方後円墳は墳丘長44mで周堀がめぐるが、前方部中央で土橋状に途切れている。6世紀代の円墳は、この古墳の東に隣り合うように築造されており、意図的な配置であることがうかがえる。旧早川を挟んで鼠塚遺跡2古墳の西側にある水久保遺跡で、堀と自然地形を利用した豪族居館跡が検出されている。南側の谷、北東側の旧早川、北西側の湿地、台地を分断するように西辺に張出部を持つ溝を掘り、北部では湿地に向けてくの字状に屈曲させている。南東部にも溝を掘って区画し、五角形状の平面形態となる。規模は南辺(谷)約105m、南東辺(溝)約60m、北東辺(旧早川)約110m、北西辺(湿地)約90m、西辺(溝)約70mを測る。時期は5世紀後半～6世紀初頭と考えられている。居館の内部構造は、溝の時期と一致する掘立柱建物や祭祀遺構は検出されず、竪穴建物が中心となる。

尾島工業団地の南東側に位置する尾島第二工業団地造成に伴い発掘調査された世良田諏訪下遺跡(72)では、6世紀代を主体に竪穴建物5棟が検出されている。竪穴建物は調査区北西隅部に分布し、ここから微高地の北東縁に沿って南東方向に72基の古墳が帯状に分布することが特筆される。世良田諏訪下遺跡の大部分は、墓域として位置づけることができるだろう。年代が分かる古墳は5世紀後半～6世紀後半で、円筒埴輪が樹立されない古墳からは7世紀代の存在も想定されている。帆立貝式古墳が5世紀後半と6世紀前半で2基づつ存在する。『上毛古墳綜覧』(群馬県1938)では200尺の前方後円墳の記載があるが、発掘調査ではその痕跡は確認されていない。世良田諏訪下遺跡の南に隣接する下原古墳群(73)では、23基の古墳が確認されており、世良田諏訪下遺跡から連なる古墳群と捉えられよう。

古墳　前方後円墳は前述した鼠塚遺跡(69)で確認されたものを除き、神明塚古墳(103)・船頭塚古墳(104)・兵庫塚古墳(105)・世良田村37号古墳(106)・世良田村36号古墳(107)・二ツ塚古墳(108)・世良田村4号古墳(109)・文殊山古墳(110)の8基が知られているようだ。神明塚古墳が木崎台地東縁部、文殊山古墳が尾島台地に築かれた以外は、すべて木崎台地西側から南側にかけての沖積地内の微高地に築かれている。

神明塚古墳は、サッポロビール工場建設に伴って発掘調査が実施され、6世紀末～7世紀初頭の墳丘長37m程の前方後円墳であった可能性が指摘されている。兵庫塚古墳は上田中微高地東縁部に築かれ、7世紀初頭の50m程の前方後円墳と推定されている。大正初期の発掘調査により横穴式石室が確認されており、銅鏡や管玉・ビーズ玉・切子玉・金環等、豊富な遺物が出土している。兵庫塚古墳の北方600m程に前方後円墳の船頭塚古墳があった記録がある。世良田村37号古墳は90m程、世良田村36号古墳は72m程の前方後円墳とされる。世良田村37号が明治41年、同36号が昭和7年に発掘調査され、埴輪や大刀・金環等が出土した記録がある。二ツ塚古墳は後期の墳丘長50m程の前方後円墳とされ、明治44年に金環・管玉・鉄鏃・埴輪等が出土している。下原古墳群にある世良田村4号古墳は45m程の前方後円墳、文殊山古墳は『上毛古墳綜覧』で50.4m程の前方後円墳と記録されている。

そのほか、前六供遺跡(53)で墳丘長42mと推定される前期の前方後方墳1基が調査された以外は、概ね後期の小円墳が木崎台地縁辺部や、前方後円墳がある微高地に分布する様子が見られる。木崎台地は、北西端と南東端

に集中する傾向が見られ、特に南東端の西田島遺跡（２）では古墳時代の集落が展開しないことから、墓域としての土地利用がなされたことが考えられる。また、下田島遺跡（１）本発掘地点東側の微高地にも多く認められるが、木崎台地北東側の微高地には分布が見られないようである。最後に、特筆すべき古墳として亀岡軽浜遺跡（102）を挙げておく。亀岡軽浜遺跡では、ＦＰ泥流に埋没した墳丘長12mの円墳１基が調査されている。竪穴系の主体部が２カ所で確認されており、中央の第１主体部で２体の人骨が、周溝内の第２主体部で１体の人骨が検出されている。分析では、第１主体部の被葬者は30歳代前半の男性と約10歳の男児で２人は親子であること、第２主体部の被葬者は約10歳の女児で、第１主体部の被葬者と何らかの親族関係があること、３人とも渡来系ではなく在来系であるという貴重な成果が得られている。

生産域　上武道路建設に伴う安養寺森西遺跡（94）・大館馬場遺跡（95）・阿久津宮内遺跡（96）の一連の調査で、ＦＰ泥流に埋没した畑が800m以上にわたって検出され、大規模な生産域であったことが確認されている。

奈良・平安時代　古墳時代後期に急拡大した集落は縮小傾向にあり、木崎台地南縁部や木崎台地西側及び南西側の微高地を主に集落が展開する様相が看取される。

前述した尾島工業団地周辺の遺跡群（65 ～ 71）では、８世紀代206棟、９世紀代159棟、10世紀代38棟、11世紀代８棟と、規模を縮小しながら11世紀代まで集落が継続する。世良田諏訪下遺跡（72）の北西隅部で、古墳時代の竪穴建物や古墳を壊して造営された９世紀末～ 10世紀初頭の館跡が検出されている。西部が調査区外のため全容は不明だが、東辺の堀128m・南辺の堀75mが確認されており、平行四辺形状を呈すようで、調査された範囲だけで8,630㎡の規模となる。南側に三角形状の張り出しを持ち、さらに内部を区画して２×５間の南北棟の掘立柱建物が配されている。館跡の東側には、館と同時期の９世紀末～ 10世紀前半の竪穴建物が検出され、一時期のムラの様相を見せる。また低地部では、９世紀後半と考えられる洪水層に埋没した水田や畑が検出されている。

国道354号バイパス建設に伴う調査では、中江田宿通遺跡（14）で８～ 10世紀代の竪穴建物14棟が調査されている。古墳時代の集落は確認されておらず、奈良時代になって新たに展開した集落といえるだろう。中江田本郷遺跡（12）・中江田原遺跡（10）・八ツ縄遺跡（８）は、古墳時代から継続して集落が営まれている。なお、中江田本郷遺跡では瓦や瓦塔片が採集されており、小規模寺院が存在する可能性が指摘されている。長福寺遺跡（38）で９世紀代の竪穴建物３棟が調査されている。６世紀以降、集落は営まれなかったが、９世紀に入り小規模な集落が営まれたようだ。西に隣接する延享割遺跡（37）には同時期の竪穴建物は検出されず、遺跡西端部で11世紀代と考えられる小竪穴１棟が確認されているにすぎない。台遺跡（20）も古墳時代から集落が継続するようだ。前六供遺跡（53）でも奈良・平安時代の集落が調査されており、特筆すべき遺物として、曲物蓋を転用した木簡が挙げられる。井戸から出土したもので、貞観９（867）年の年紀を有し、該期の地方行政の実態を示す貴重な資料である。上江田西田遺跡（56）、谷津遺跡（57）で平安時代の竪穴建物が、下田中中道遺跡（60）で９世紀後半～ 10世紀代の竪穴建物が調査されている。源六堰遺跡（58）内、田中神社南東方では方100m程の範囲に瓦が集中して散布しており、源六堰廃寺として小規模寺院の存在が推定されている。三ツ木皿沼遺跡（61）の低地で８世紀後半の竪穴建物３棟、その上層で洪水層に埋没した畑、さらに上層で９世紀後半～ 11世紀後半の集落が検出されている。この畑は、東に隣接する下田中中道遺跡（60）、小角田遺跡群（63）にも広がっていることが確認されている。小角田遺跡群では、この畑の上層で浅間Ｂテフラに埋没した水田が検出されている。安養寺森西遺跡（94）では畑がＦＰ泥流で埋没した後、奈良時代を中心とした集落が展開する。うち１棟の竪穴建物から奈良三彩小壺が出土しており、特筆される。安養寺森ノ内遺跡（92）で８世紀後半２棟、９世紀後半10棟、阿久津宮内遺跡（96）では10世紀代の竪穴建物２棟が確認されている。柏川新堀下遺跡（101）では、弘仁９（818）年の地震に伴う泥流と考えられる洪水層に埋没した畑、洪水層上面で９世紀代の竪穴建物６棟が調査されている。

中世　中世については、城館や屋敷跡を中心にまとめる。当地域は、平安時代末の保元２（1157）年に新田義重により立荘された新田荘の南西部に位置する。そのた

第１表　周辺の遺跡（１）

凡例　●竪穴建物　○遺物　▲墳・水田　■寺　▼城館・屋敷

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	文献
1	下田島		○		●	○	○	○	『市内遺跡XIX』『同20』『同21』『太田市内遺跡13』2003・2004・2005・2018太田市教委、本書
2	西田島		●		○				『西田島遺跡発掘調査報告書』『西田島遺跡Ⅱ』1987・1991群馬県教委、『西田島遺跡』2005群理文、『太田市内遺跡13』2018太田市教委
3	下田島城							▼	『西田島遺跡Ⅱ』1991群馬県教委、『西田島遺跡』2005群理文
4	なた山		○		○				『群馬県遺跡台帳Ⅰ（東毛編）』1972群馬県教委
5	鉢川山之神		○	●	●			▼	『鉢川山之神遺跡』『同Ⅱ』『鉢川山之神遺跡』『同Ⅲ』1993・1995・1997・1998尾島町教委
6	中通				○				『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『新田町の遺跡』1998新田町教委
7	花園	○	●	○	●	●	●		『木崎中学校校庭遺跡』1960、『中江田遺跡群花園遺跡発掘調査報告書』1996新田町教委
8	八ツ縄		○		●	●	●		『中江田八ツ縄遺跡』1995群理文、『八ツ縄遺跡』1999新田町教委
9	寒沢				○				『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『新田町の遺跡』1998新田町教委
10	中江田原	○	○		●	●	●		『中江田（原）消防詰所遺跡発掘調査報告書』1978、『中江田遺跡』1985、『中江田遺跡群』1997新田町教委
11	中江田原館							▼	『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『新田町の遺跡』1998新田町教委
12	中江田本郷		○		●	●■	●		『中江田遺跡』1985、『中江田遺跡群』1997新田町教委
13	中江田本郷館							▼	『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『新田町の遺跡』1998新田町教委
14	中江田宿通		●			●	●		『中江田遺跡』1985、『中江田遺跡群』1997新田町教委
15	中江田Ａ	○	●	○					『中江田遺跡』1985、『中江田遺跡群』1997新田町教委
16	中江田Ｂ	○	○						『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『新田町の遺跡』1998新田町教委
17	中江田Ｃ	○			○				『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『新田町の遺跡』1998新田町教委
18	赤仏				○	○	○		『新田町の遺跡』1998新田町教委
19	明神		○						『新田町の遺跡』1998新田町教委
20	台	○	●	●	●	●	●	▼	『台遺跡』1988新田町教委
21	野中		○		○				『新田町の遺跡』1998新田町教委
22	龍得寺南		○		●				『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『新田町の遺跡』1998新田町教委
23	北宿		●	○	●				『北宿・観音前遺跡』1993、『北宿遺跡』2000新田町教委、『史跡新田荘遺跡』2018太田市教委
24	江田館							▼	『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『史跡新田荘遺跡』2018太田市教委
25	上江田城館							▼	『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『史跡新田荘遺跡』2018太田市教委
26	東田		○	○	●			▼	『東田遺跡』1987新田町教委
27	庚申塚				○				『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『新田町の遺跡』1998新田町教委
28	登戸				○				『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『新田町の遺跡』1998新田町教委
29	林				●				『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『新田町の遺跡』1998新田町教委
30	下耕地				○				『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『新田町の遺跡』1998新田町教委
31	一町田・堀之内				●			▼	『新田町内遺跡Ⅱ』2000新田町教委、『太田市内遺跡11』2016太田市教委
32	大通寺後				●				『大通寺後遺跡発掘調査報告書』1971、『新田町内遺跡Ⅲ』2001新田町教委
33	大通寺東		○						『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『新田町の遺跡』1998新田町教委
34	長命寺裏		○		○		○		『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『新田町の遺跡』1998新田町教委
35	大豆柄		○		○				『新田町の遺跡』1998新田町教委
36	下田		○		○				『下田遺跡』1994新田町教委
37	延享別		○		●		●		『延享別遺跡発掘調査報告書』1996太田市教委
38	長福寺				●		●	▼	『長福寺遺跡発掘調査概報』1992、『長福寺遺跡第3次発掘調査報告書』2005太田市教委
39	石之塔				○				
40	杉ノ内				○				
41	松木ヶ谷戸				○				
42	雁子				○				『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『新田町の遺跡』1998新田町教委
43	相田				○	○	○		『新田町の遺跡』1998新田町教委
44	新堀前		○						『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『新田町の遺跡』1998新田町教委
45	要害				●				『反町館跡』2005新田町教委
46	反町館							▼	『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『反町館跡』2005新田町教委
47	反町城館							▼	『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『反町館跡』2005新田町教委
48	振矢				●				『松ノ木・梅ノ木・振矢遺跡』1999新田町教委
49	東油田				○				『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『新田町の遺跡』1998新田町教委
50	観音前		●		●				『北宿・観音前遺跡』『大根南遺跡群』1993、『北宿遺跡』2000新田町教委

第２表　周辺の遺跡（２）

凡例　●竪穴建物　○遺物　▲墳・水田　■寺　▼城館・屋敷

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	文献
51	一丁田		●		●				『大根南遺跡群』1993新田町教委
52	五箇		○				○		『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『新田町の遺跡』1998新田町教委
53	前六供				●	●	●	○	『前六供遺跡・後谷遺跡・西田遺跡』2000、『前六供遺跡Ⅱ』2003新田町教委、『前六供遺跡』2013群理文
54	長慶寺周辺館							▼■	『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『前六供遺跡Ⅱ』2003新田町教委、『前六供遺跡』2013群理文
55	下田中八幡		○		○				『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『新田町の遺跡』1998新田町教委
56	上江田西田		●		●		●		『西田・谷津・中道・上新田・今井遺跡』1984東京電力、『前六供遺跡・後谷遺跡・西田遺跡』2000新田町教委、『上江田西田遺跡・源六堰遺跡』2010群理文
57	谷津		○		●		●		『西田・谷津・中道・上新田・今井遺跡』1984東京電力
58	源六堰		○		●	○■			『西田・谷津・中道・上新田・今井遺跡』1984東京電力、『上江田西田遺跡・源六堰遺跡』2010群理文
59	下面輪東		○				○		『新田町の遺跡』1998新田町教委
60	中道		○		●		●▲		『西田・谷津・中道・上新田・今井遺跡』1984東京電力、『下田中中道遺跡・下田中川久保遺跡』1995群理文
61	三ツ木皿沼		●		●	●	●▲		『三ツ木皿沼遺跡』2000群理文
62	三ツ木・住林寺				○	○	○		
63	小向田遺跡群						○▲		『小向田遺跡群』1997尾島町教委
64	小向田古墳群				○				『尾島町誌　通史編　上巻』1993尾島町教委
65	小向田下		○		●	●	●		『小向田下遺跡』1988尾島町教委、『尾島工業団地遺跡』2009太田市教委
66	小向田前		●		●	●	●		『小向田前遺跡』1985群理文、『小向田前Ⅰ・Ⅱ遺跡』1995尾島町教委、『尾島工業団地遺跡』2009太田市教委
67	永久保		○		●	●	●		『尾島工業団地遺跡』2009太田市教委
68	永久保Ⅱ				●		●		『尾島工業団地遺跡』2009太田市教委
69	鼠塚		○		○		●		『尾島工業団地遺跡』2009太田市教委
70	世良田上屋分				●	●	●		『世良田上屋分遺跡』1996尾島町教委
71	歌舞伎	○	○		●	●	●▲		『歌舞伎遺跡』1982群理文、『尾島工業団地遺跡』2009太田市教委
72	世良田諏訪下		○		●		●▲	○	『世良田諏訪下遺跡』1998尾島町教委
73	下原古墳群				○		▲		『世良田地区（ほ場整備）発掘調査報告書』2017太田市教委
74	下江田本郷		○		○				『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『新田町の遺跡』1998新田町教委
75	五反田		○		○				『新田町の遺跡』1998新田町教委
76	御門				○				『新田町誌　第二巻　資料編（上）』1987、『新田町の遺跡』1998新田町教委
77	粕川本郷				○	○			
78	世良田環濠集落							▼	『尾島町誌　通史編　上巻』1993尾島町教委、『世良田環濠集落遺跡（１）』『同（２）』2015、『同（３）』2022群理文、『世良田地区（ほ場整備）発掘調査報告書』2017太田市教委
79	世良田新町							■	
80	長楽寺			●	●			■	『長楽寺遺跡』1978・1984・1992尾島町教委
81	東照宮南							▼	
82	宝積院				●				『尾島町誌　通史編　上巻』1993尾島町教委
83	世良田今井城							▼	『世良田地区（ほ場整備）発掘調査報告書』2017太田市教委
84	世良田下町				○			○	
85	精進場					○	○		
86	徳川館							▼	『群馬県古城塁址の研究　上巻』
87	世良田若宮				○				
88	世良田諏訪東				○	○			
89	出塚大日南				○		○		『出塚大日南遺跡・粕川黒川遺跡・世良田下江田前遺跡』1992尾島町教委
90	大館館							▼	『群馬県の中世城館跡』1988群馬県教委
91	大館御蔵				○				
92	安養寺森ノ内			○	○	●	●	▼	『群馬県の中世城館跡』1988群馬県教委、『安養寺森西遺跡・大館馬場遺跡・阿久津宮内遺跡』1995群理文、『安養寺館跡』2004尾島町教委
93	安養寺森南				○			▼	『安養寺館跡』2004尾島町教委
94	安養寺森西				○▲	●	●	▼	『安養寺森西遺跡・大館馬場遺跡・阿久津宮内遺跡』1995群理文
95	大館馬場				○▲			○	『安養寺森西遺跡・大館馬場遺跡・阿久津宮内遺跡』1995群理文
96	阿久津宮内			○	○▲		●	○	『安養寺森西遺跡・大館馬場遺跡・阿久津宮内遺跡』1995群理文
97	安養寺居立		○		○				
98	安養寺西居立							○	
99	安養寺北原							▼	
100	安養寺東居立							○	

第３表　周辺の遺跡（３）

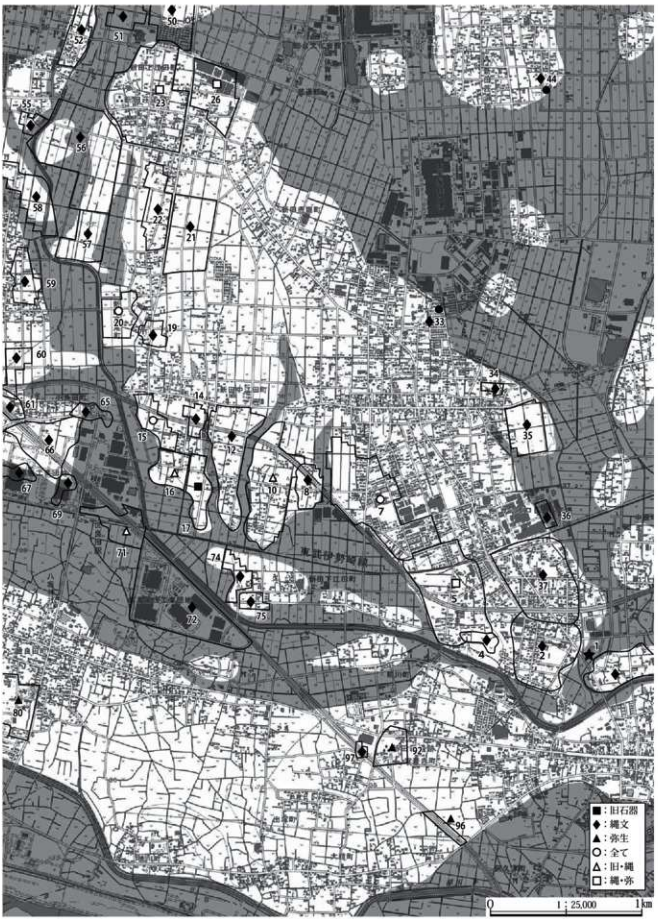
凡例　●竪穴建物　○遺物　▲畑・水田　■寺　▼城館・屋敷

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	文献
101	柏川新堀下				●		●▲		『柏川新堀下遺跡』2000尾島町教委
102	亀岡軽浜				○		○		『亀岡軽浜遺跡』2005尾島町教委
103	神明塚古墳（木崎町７号）								『神明塚古墳』2018太田市教委
104	船頭塚古墳（細打村10号）								『新田町の遺跡』1998新田町教委
105	兵庫塚古墳（細打村15号）								『新田町誌 第二巻 資料編（上）』1987、『新田町の遺跡』1998新田町教委
106	世良田村37号古墳								『尾島町誌 通史編 上巻』1993尾島町教委
107	世良田村36号古墳								『尾島町誌 通史編 上巻』1993尾島町教委
108	二ツ塚古墳（木崎町５号）								『新田町の遺跡』1998新田町教委
109	世良田村４号古墳								『尾島町誌 通史編 上巻』1993尾島町教委
110	文殊山古墳（世良田村25号）								『尾島町誌 通史編 上巻』1993尾島町教委

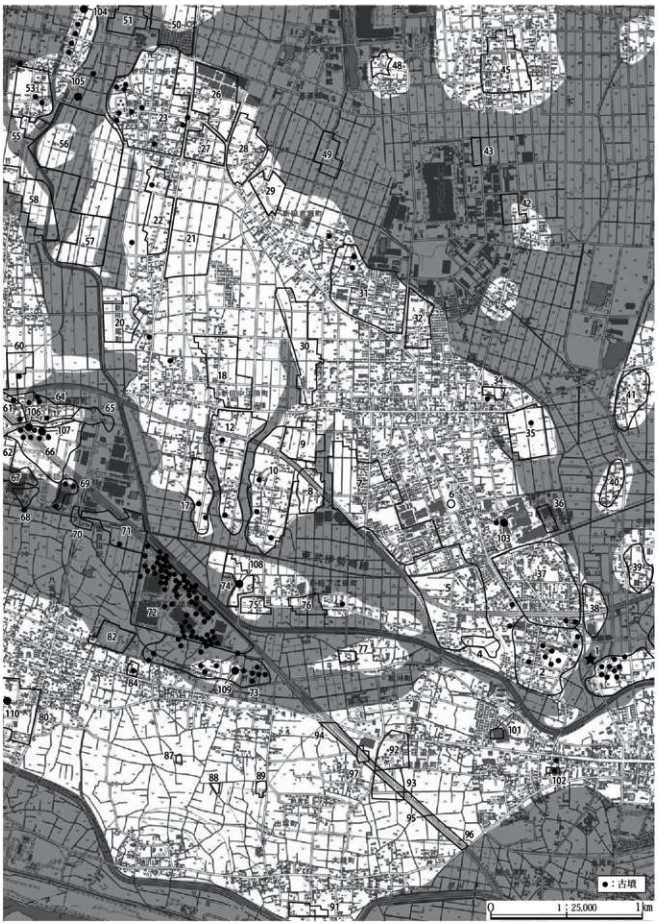
め、新田一族に関連する遺跡が各所に存在する。

立荘初期の郷の一つである世良田地区には、世良田環濠集落(78)がある。西・南を早川、北・東を堀で画した方約１kmの中世環濠集落である。第９図の範囲外になるが、早川に面した西縁部に新田本宗家の館跡と伝えられる新田館があり、中央部には義重の子で徳川家の祖・義季を開基として、承久３(1221)年に創建された長楽寺(80)がある。世良田諏訪下遺跡(72)では、鎌倉時代末の溝が検出されている。早川から世良田環濠集落を通り、石田川へと至る運河的な用途が推定されており、溝内から笹塔婆439点・板草履・木皿等が出土している。安養寺森ノ内遺跡(92)は、鎌倉幕府を倒した新田義貞の居館跡とされる安養寺館で、周囲の安養寺森南遺跡(93)・安養寺森西遺跡(94)・安養寺北原遺跡(99)とともに堀が検出されている。安養寺森西遺跡(94)・大館馬場遺跡(95)・阿久津宮内遺跡(96)では、火葬土坑や墓壙が検出されている。ほか、尾島台地に徳川館(86)・大舘館(90)がある。木崎台地北西端には江田館(24)、木崎台地北東側の微高地に反町館(46)がある。ともに戦国期に城郭化し、上江田城館跡(25)、反町城館跡(47)となる。保存もよく、往時の面影をよく残している。上田中地区には、方140mの規模を持つ長慶寺周辺館(54)があり、新田一族の田中五郎義清あるいは田中時明の館跡と伝承されている。出土した板碑から創建は14世紀初頭と考えられている。中江田地区で原館(11)、木郷館(13)があり、木郷館は江田行義の館跡との伝承がある。柏川山之神遺跡（５）では、中世館と考えられる溝が検出され、80～100m程の方形区画が想定されている。台遊跡(20)でも東西方向の堀２条が検出され、屋敷跡と推定されている。両堀の外寸で39.4mの規模を持つ。ほかに井戸や地下式土坑等が検出されている。東田遺跡(26)では、台地北縁部で東・西・南を溝で画した屋敷が全面調査されている。東西42m・南北38mの不整四角形を呈す。南辺西寄りに土橋状の出入口があり、内部に掘立柱建物、井戸等がある。時期は15世紀前半を中心とした100年程と考えられている。長福寺遺跡(38)では、北東角を隅切りした方形区画溝が検出されており、東西57mを測る。下田島城（３）は、寛文３(1663)年に岩松秀純が将軍徳川家綱より拝領し、岩松氏が江戸期を通じて居住したが、その創建は中世と考えられている。そのほか、一町田・堀之内遺跡(31)で中近世の館堀と考えられる溝が調査されているが、報告書が確認できないため詳細は不明である。

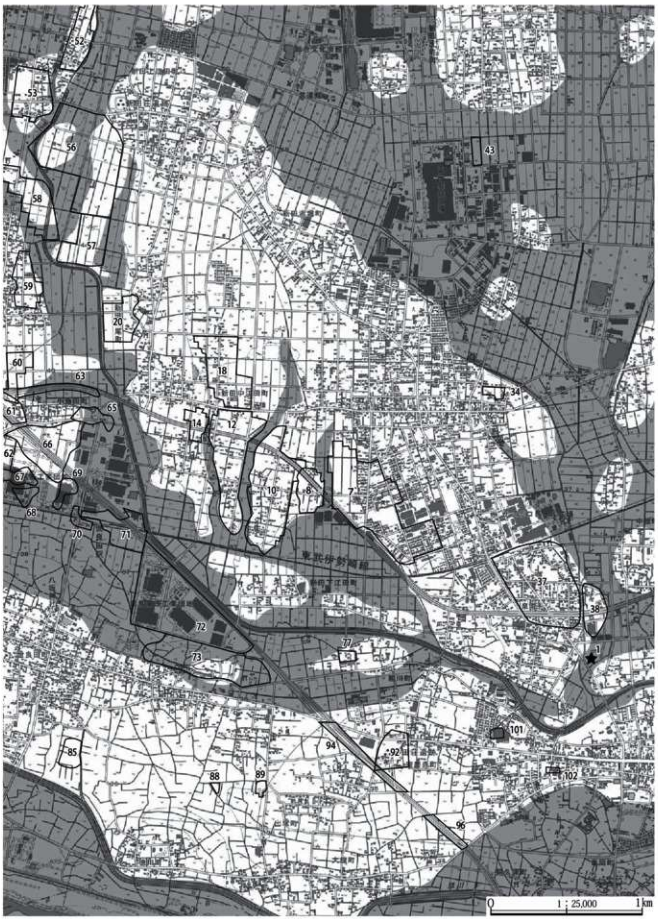
最後に、遺跡ではないが大川をめぐると考えられる用水相論の文書が残っているので紹介しておきたい。鎌倉時代末期の元亨２(1322)年、田島郷へ引水する用水について、大館氏と岩松氏の間で相論が起きている。田島郷は岩松氏の所領である。岩松政経方の主張は、田島郷の灌漑用水は大館氏の所領である一井（市野井）の沼水（湧水池）から来るものを使用していたが、それを大館宗氏方が打ち塞いでしまったので、今後のために幕府に御下知を下してほしいというものであった。大館宗氏は事実無根だと反論したが、幕府はもとのとおりに引き通すようにと命じている。この大館氏の所領である一井（市野井）の沼水は重殿湧水池であり、ここから田島郷に引水する用水は現大川と考えてよいであろう。大川自体も、700年前の歴史の舞台に登場しているのである。



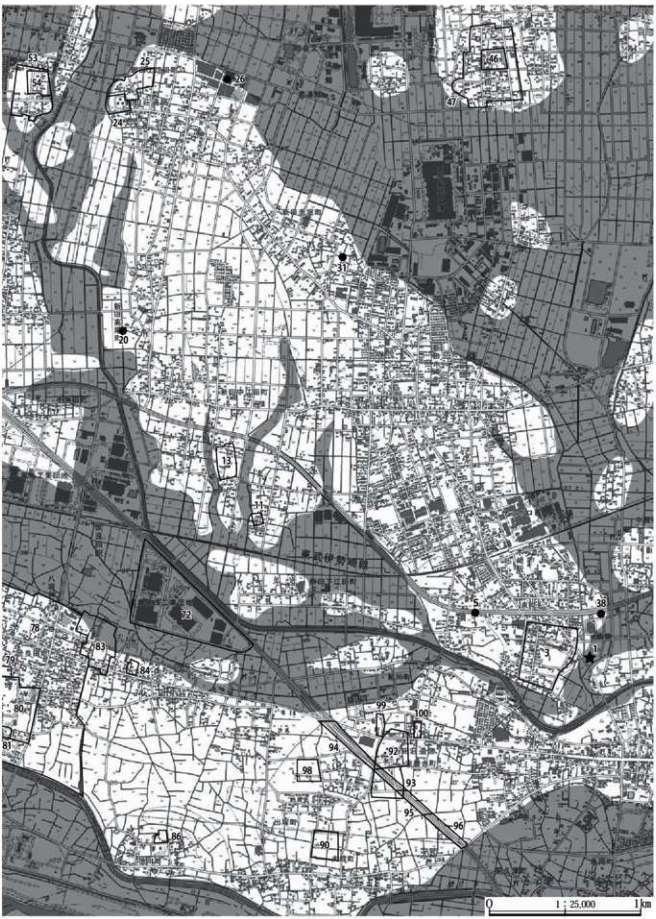
第６図　周辺の遺跡（旧石器～弥生時代）



第７図　周辺の遺跡（古墳時代）



第８図　周辺の遺跡（奈良・平安時代）


53
25
26
24
46
47
31
20
13
72
5
38
3
1
78
83
84
79
80
81
99
100
94
92
98
93
95
96
86
90
0
1：25,000
1km

第９図　周辺の遺跡（中世）

第４節　発掘調査の方法と経過

１　発掘調査の方法

発掘調査は、記録保存調査の方針に基づき、以下のとおりとした。

①表土の掘削には重機(バックホー)を用いた。除去後、ジョレン・移植ごて等を用いて人力による遺構確認作業、遺構調査へと進めた。

②表土を除去後、旧河道内に堆積する遺物包含層を確認し、次項により設定したグリッド毎に掘り下げを行った。

③遺物包含層から出土した遺物は、グリッド毎に一括して取り上げた。

④遺物包含層下の土層を確認するため、部分的にサブトレンチを設定して断割り調査を行った。

⑤旧河道外の地区は、重機(バックホー)による深掘りを行い、遺構および遺物包含層が存在しないことを確認した。

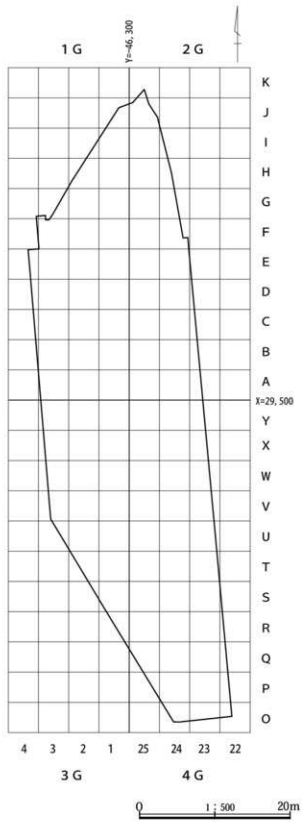
⑥遺構測量は外部委託とし、調査担当者の指示の下、トータルステーションによるデジタル遺構図を作成した。縮尺は遺構平面図を1/200、土層断面図を1/20として記録した。

⑦記録写真は、デジタルカメラ(Canon EOS Kiss Digital N)による撮影を行った。

⑧調査面が周囲より低いため、大雨時には調査区内が冠水すること、また深掘りの際に底面から湧水があることから、水中ポンプを貸貸借して随時排水しながら調査を進めた。

２　調査グリッドの設定

旧河道内の遺物包含層調査を実施するにあたり、本遺跡独自の調査グリッドを設定した。まず国家座標に基づき、調査区内のほぼ中心を通るＸ＝29,500、Ｙ＝-46,300ラインを基準にして調査区内を分割、北西区を１Ｇ、北東区を２Ｇ、南西区を３Ｇ、南東区を４Ｇとして４つの100m四方の大グリッドを設定する。さらに大グリッド内を４m四方に細分するという方法で、南東角を基点として北にＡ～Ｙのアルファベット、西に１～25の数字を付し、アルファベットと数字を組み合わせた小グリッドを設定した(第10図)。各グリッドの呼称は、大グリッド→小グリッドとし、例えば２ＧＨ25となる。



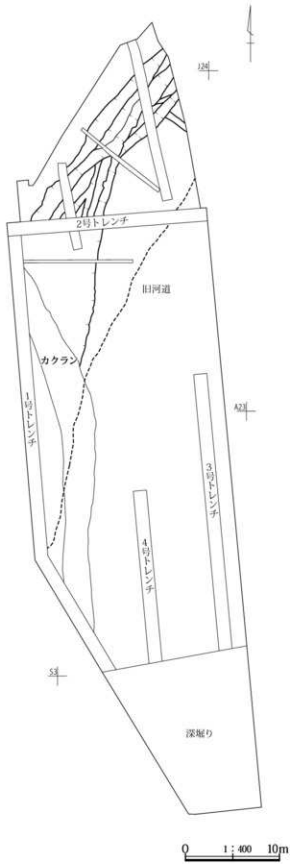
第10図　グリッド設定図

3　発掘調査の経過

平成29年６月１日から表土掘削を開始。県文化財保護課の試掘・確認調査で報告されていた縄文土器を包含する旧河道の範囲を確認するため、西壁際に１号トレンチ、北壁際に２号トレンチを設定して深掘りを行った。２号トレンチにおいて多量の縄文土器が出土するとともに、遺物包含層がさらに北側へと続くことが確実視されたため、６月７日、県文化財保護課課職員立会いのもと、範囲確認調査を行い、調査範囲を拡張する方針が示された。６月12日、県文化財保護課と県太田土木事務所による書面協議が行われ、調査範囲を北側へと拡張することが決定された。２号トレンチ以北の不整三角形部分が追加調査となった部分である。調査区北部での遺物包含層の範囲確認と並行し、調査区南部での遺構および遺物包含層の確認を進めた。６月８日に南端部Ｓライン以南の深掘りを行い、遺構・遺物包含層なしと判断されたため排土置き場とし、さらに６月９日、３号および４号トレンチを設定して深掘りを行い、遺構・遺物包含層ともに確認できなかったため、調査区北東部から南西部に走向する旧河道の調査に集中することとした。６月中旬以降の作業は、主に遺物包含層（旧河道埋没土）の調査となった。遺物包含層の調査は、１項に記述したとおりグリッド毎に行い、作業員が移植ごてを用いて掘り下げを行い、グリッド毎に遺物の取り上げを行った。調査面積に比して遺物量は多く、遺物収納箱80箱を数えた。包含する全ての遺物の取り上げを終了し、６月23日に調査区の全景写真を撮影、測量等の各種記録をとり、埋め戻しを行って６月30日に全調査を終了した。

4　基本土層

基本土層として提示できる土層堆積は認められない。概ね表土直下で、沖積層である砂・シルト層が厚く堆積する。浅間Ｂテフラが部分的に認められたが（第13図断面Ｄ）、面的な広がりは確認できていない。浅間Ｂテフラ直下は黒泥層となり、水田土壌は確認されなかった。黒泥層は１ｍ程の厚さで堆積しており、その下層で岩塚礫層と考えられる砂礫層に達する。遺物包含層となったのは旧河道内の砂層と、旧河道内に溝状に埋没していた黒褐色土・暗褐色土層である。



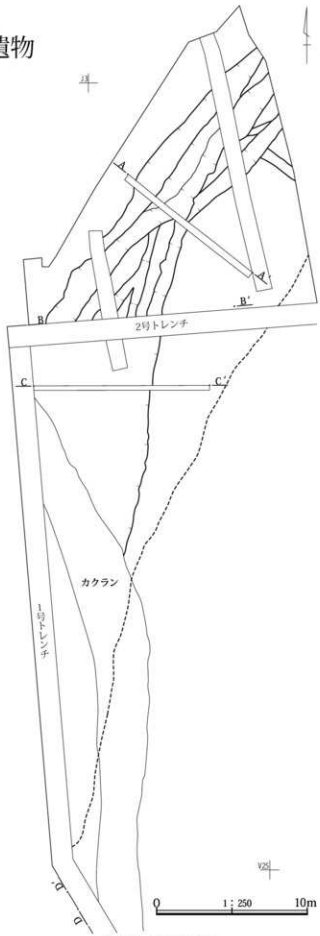
第11図　遺構全体図

第２章　発見された遺構と遺物

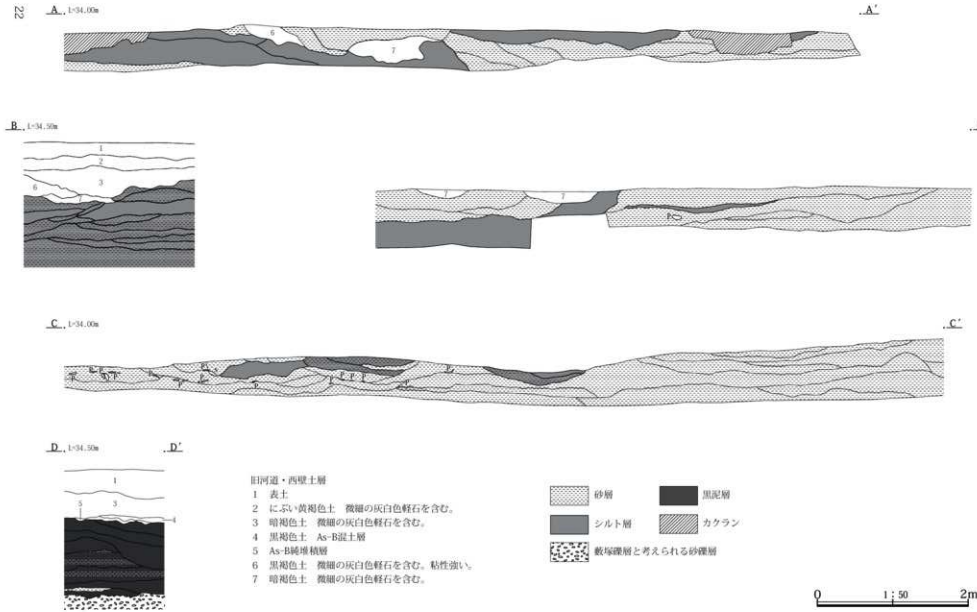
第１節　旧河道

旧河道は、調査区の北東から南西方向に緩やかに弧を描きながら流下する。東縁を破線で示した部分であるが、壁面までの断割り調査を行っていないため、河道内外の状況の違いを知ることはできない。調査写真を見ると、土質の乾き具合によって境界が分かる程度であり、幅は12m程を測る。遺物が出土しているのは、旧河道内の西側部分である。旧河道の最終段階の流路と考えられよう。この最終段階の流路は、２号トレンチを境に北側と南側で様相が異なっている。北側は幾筋もの細い溝状の落ち込みが確認され、その落ち込みの埋没土である黒褐色土（第13図６層）・暗褐色土（同図７層）中から多くの遺物が出土した。南側はこの黒褐色土・暗褐色土の堆積が認められず、砂層中から多量の遺物が出土している。第13図断面Ｃを見ると、確認面から40cm程の深さまで遺物が集中していることが分かる。

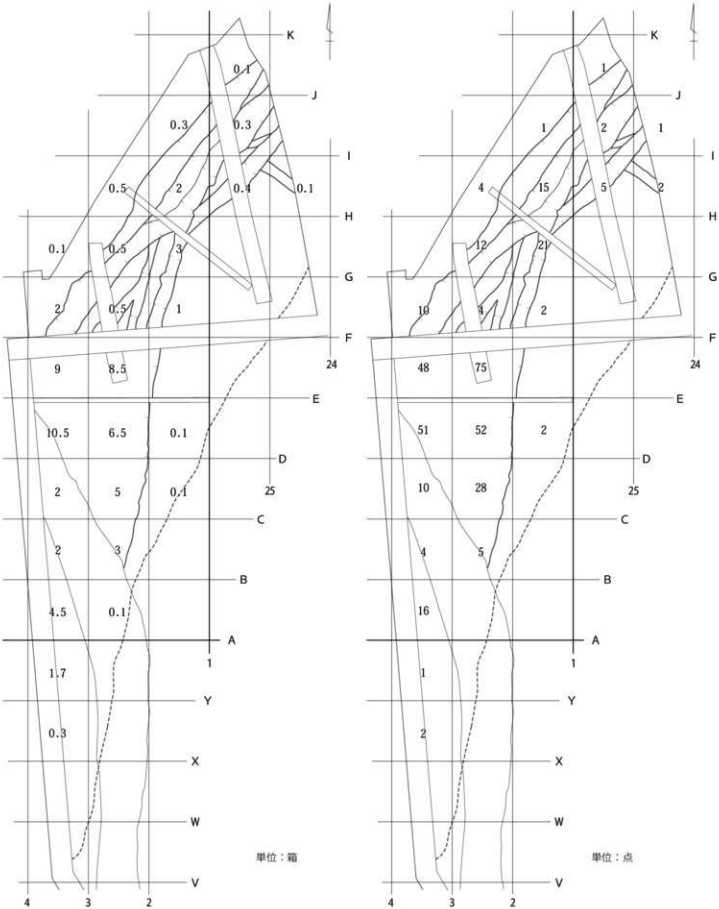
出土遺物の大部分は縄文時代の土器と石器であり、これにわずかの埴輪や古墳時代～近世の遺物が加わる。数量でいえば、縄文土器が遺物収納箱66箱、縄文石器が396点、埴輪を含めた古墳時代～近世遺物が遺物収納箱１箱程度である。縄文土器および石器の出土状況は、第14図に示したとおりである。縄文土器は中期後葉～後期前葉期が主体であり、加曽利E2式～堀之内２式が大部分を占め、これにごくわずかな前期・中期中葉・晩期土器を含む。出土した底部の数量を見ると、径の1/2以上が残存するものが166点、1/2以下が435点あり、かなりの個体が包含されていたことが推測される。土製品類は土製円盤１点が確認されたのみで、それ以外は特無であった。石器の内訳は、石鏃11点、打製石斧28点、磨製石斧３点、石核３点、二次加工ある剥片14点、剥片171点、凹石60点、磨石44点、敲石12点、石皿13点、多孔石14点、台石４点、砥石３点、軽石製品１点、石棒２点、垂飾り１点、礫・礫片12点となり、凹石・磨石の多さが際立つ。石器の詳細は、付表に掲載したので参照いただきたい。



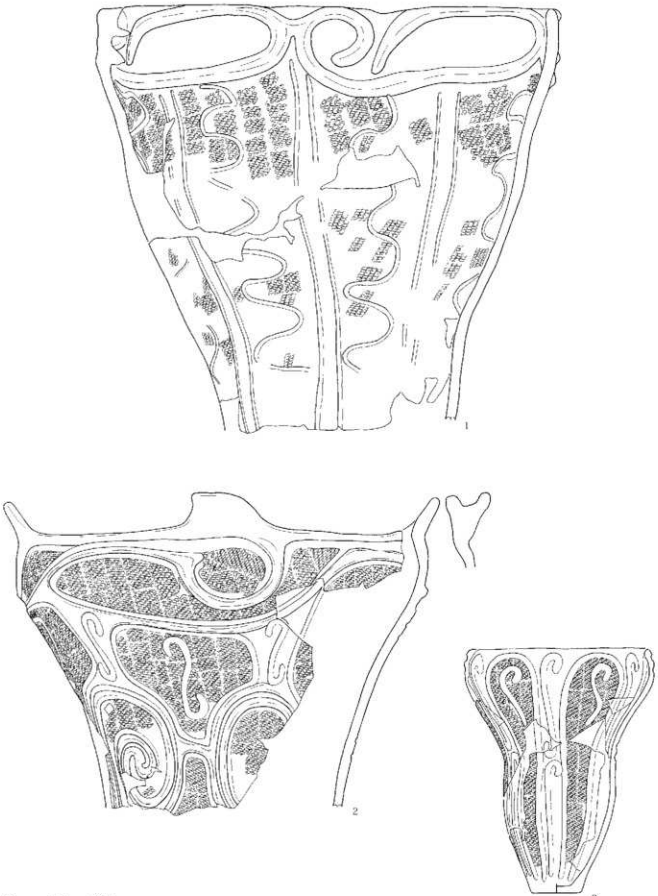
第12図　旧河道平面図



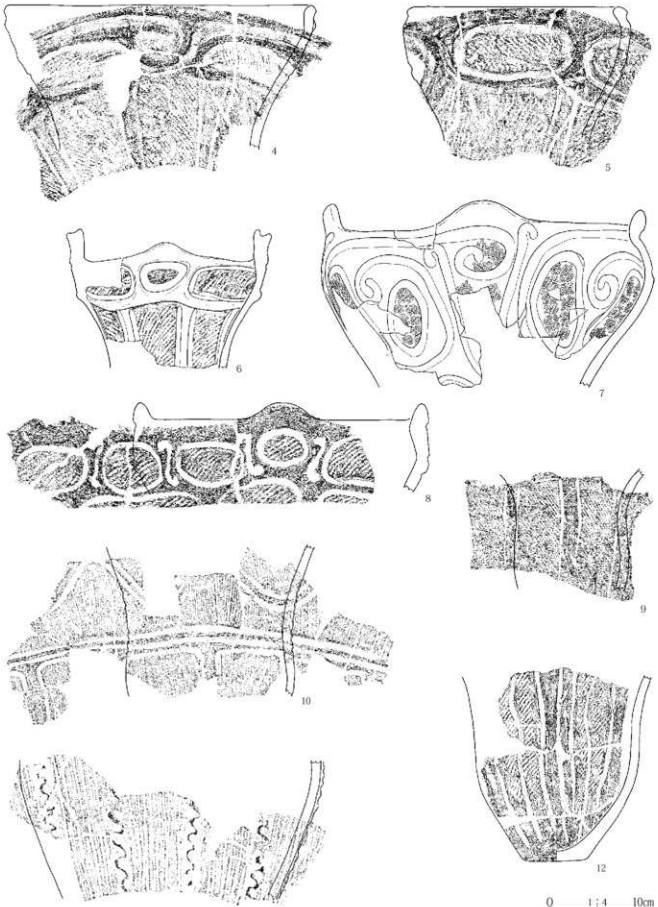
第13図　旧河道・調査区西壁断面図



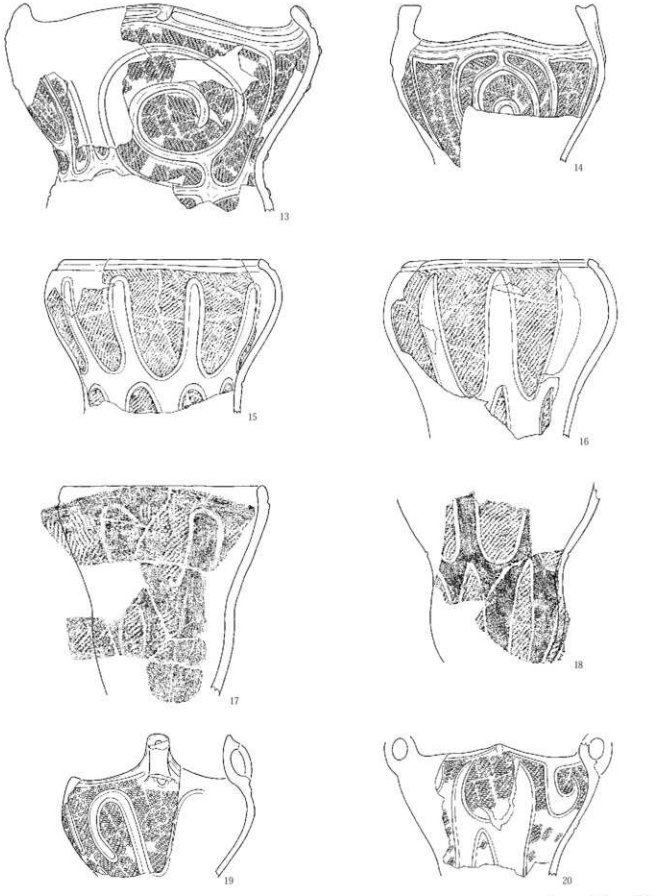
第14図　グリッド別遺物出土数量(左：縄文土器　右：縄文石器)



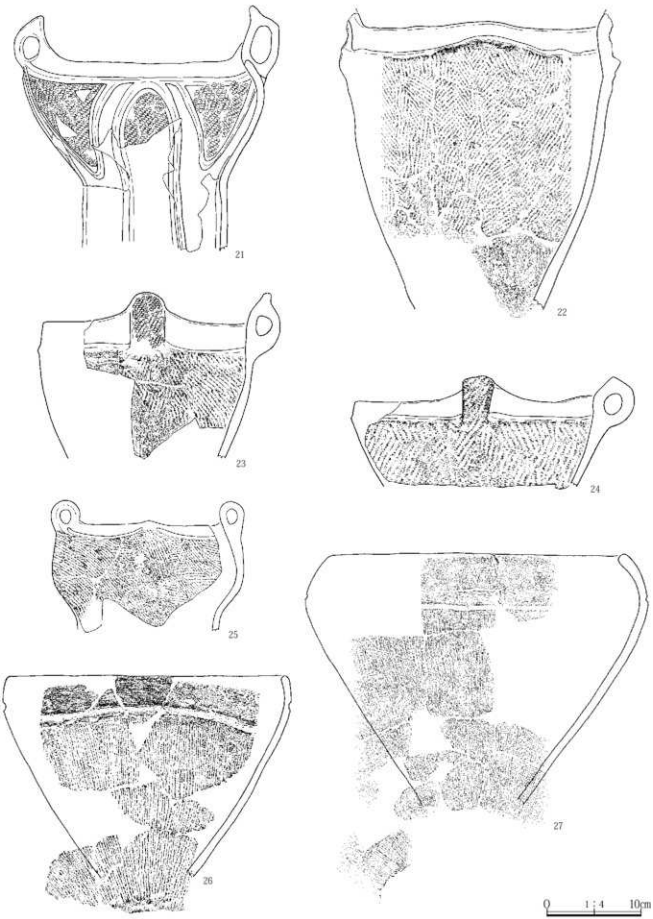
第15図　旧河道出土遺物（１）（縄文土器１）



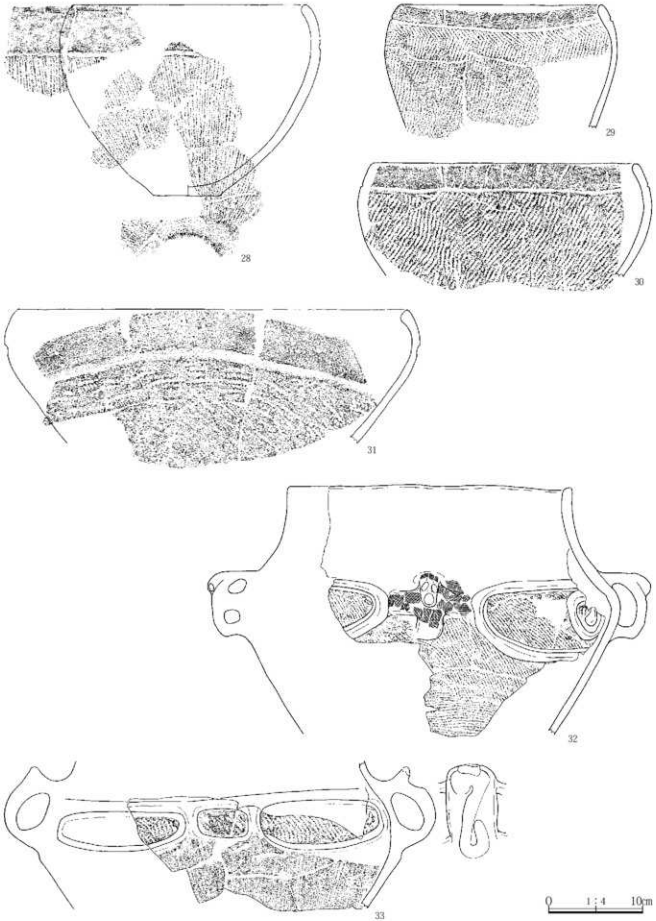
第16図　旧河道出土遺物(2)(縄文土器2)



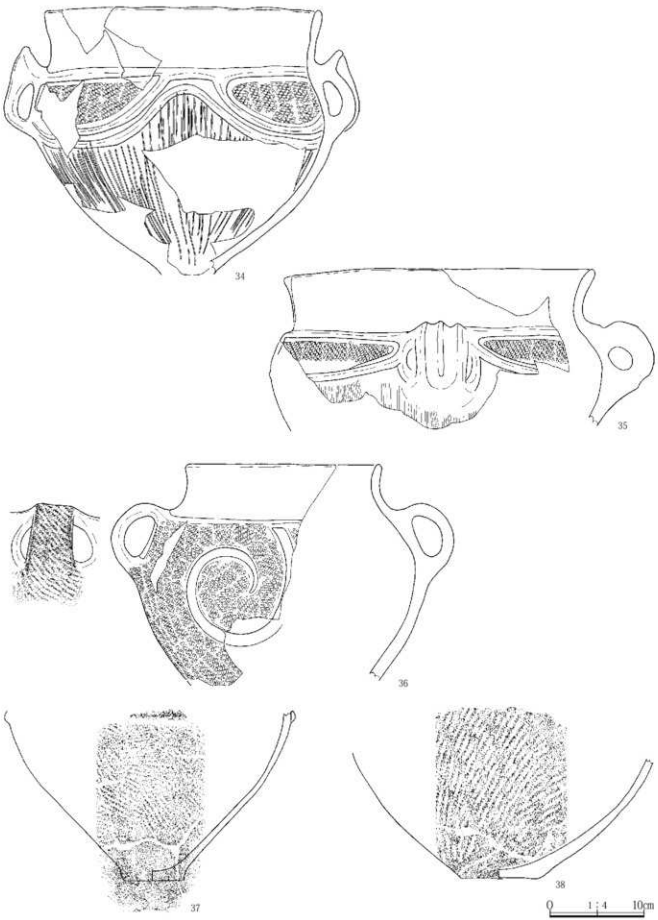
第17図　旧河道出土遺物（３）（縄文土器３）



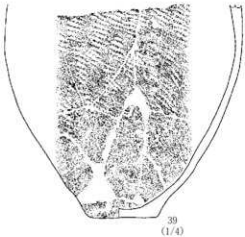
第18図　旧河道出土遺物（４）（縄文土器４）

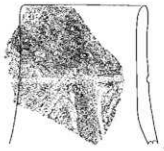


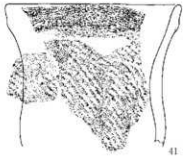
第19図　旧河道出土遺物（５）（縄文土器５）



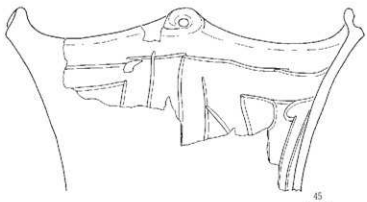
第20図　旧河道出土遺物（６）（縄文土器６）


39
(1/4)

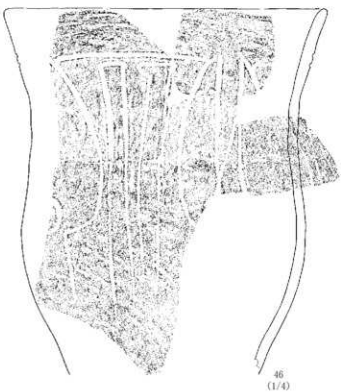

40


41

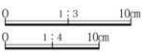
42


45
(1/4)

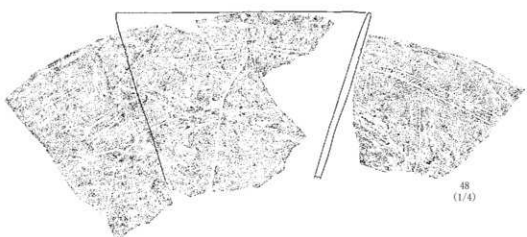
43

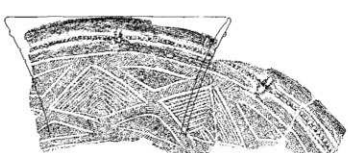

46
(1/4)

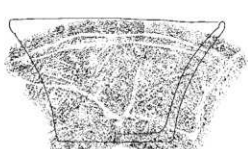
44



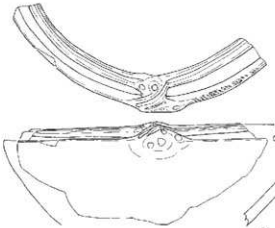
第21図　旧河道出土遺物（７）（縄文土器７）

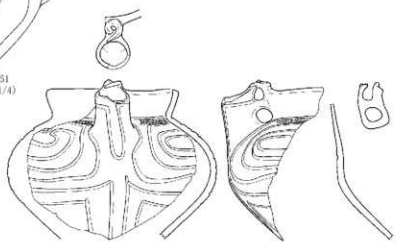


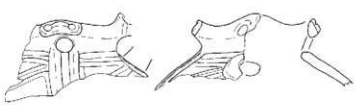


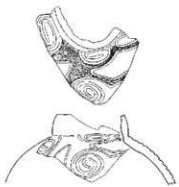


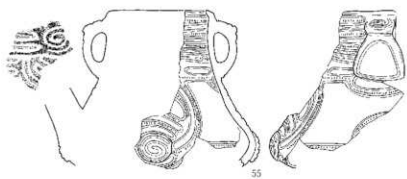
第22図　旧河道出土遺物（8）（縄文土器8）

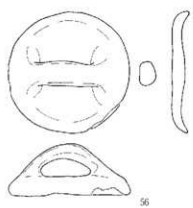

51
(1/4)


52
(1/4)


53

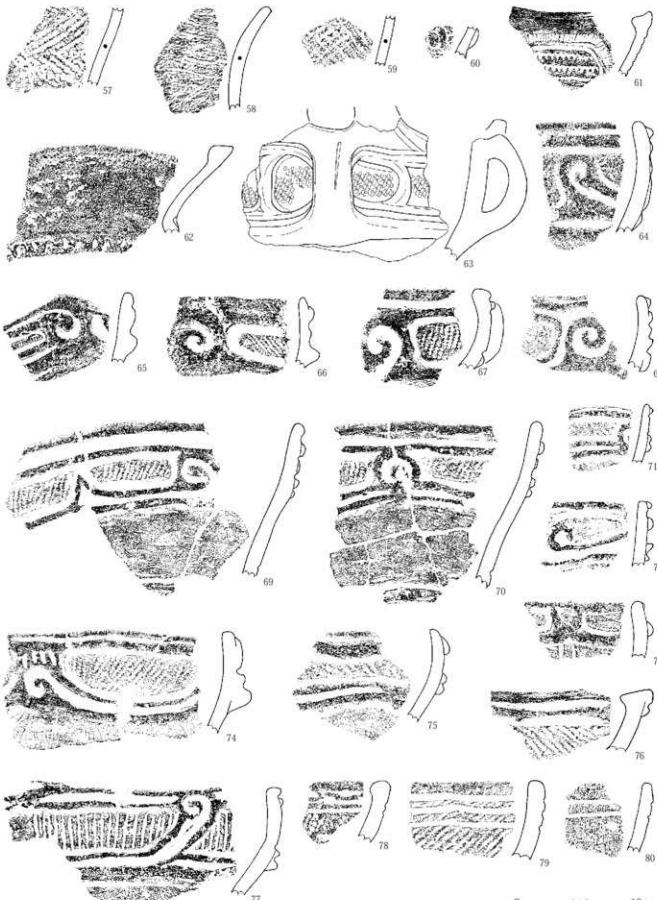

54


55

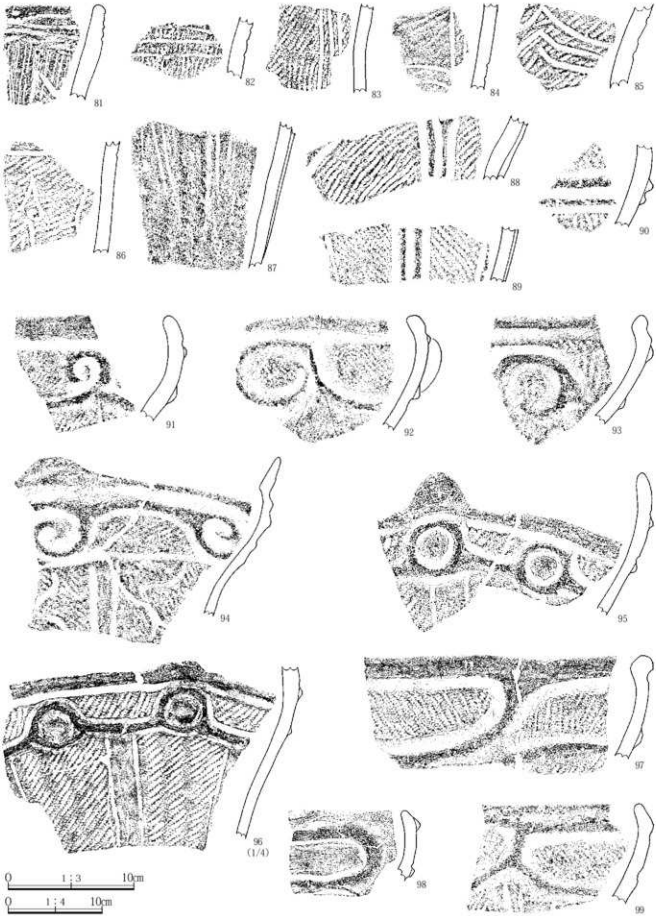

56

0　1:3　10cm
0　1:4　10cm

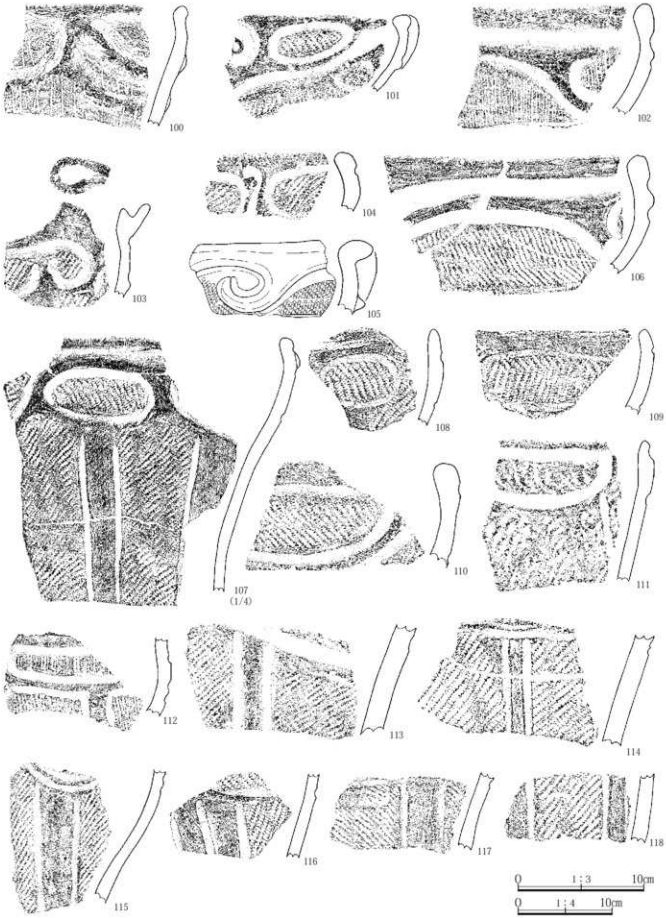
第23図　旧河道出土遺物（９）（縄文土器９）



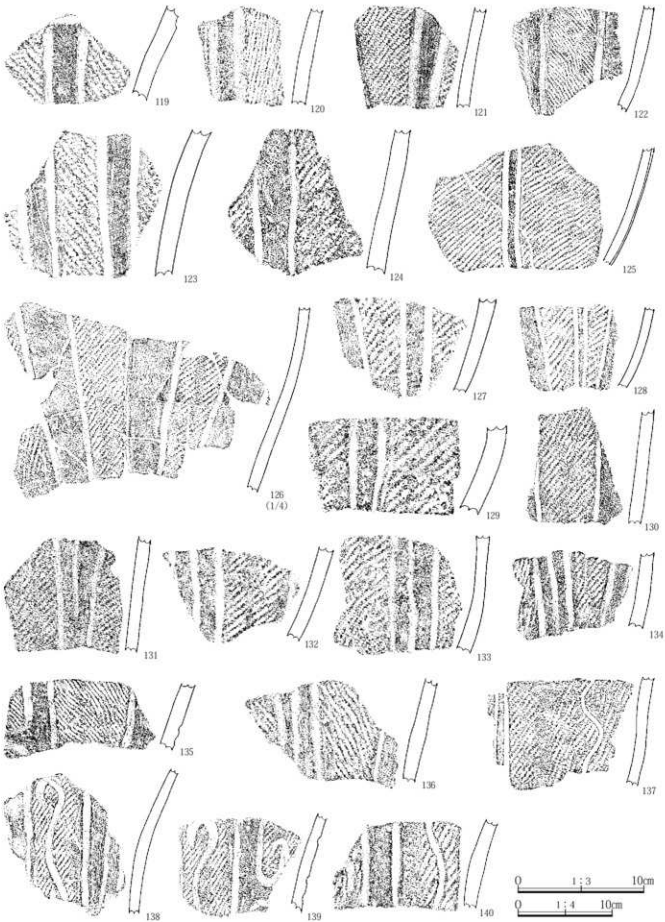
第24図　旧河道出土遺物(10)（縄文土器10）



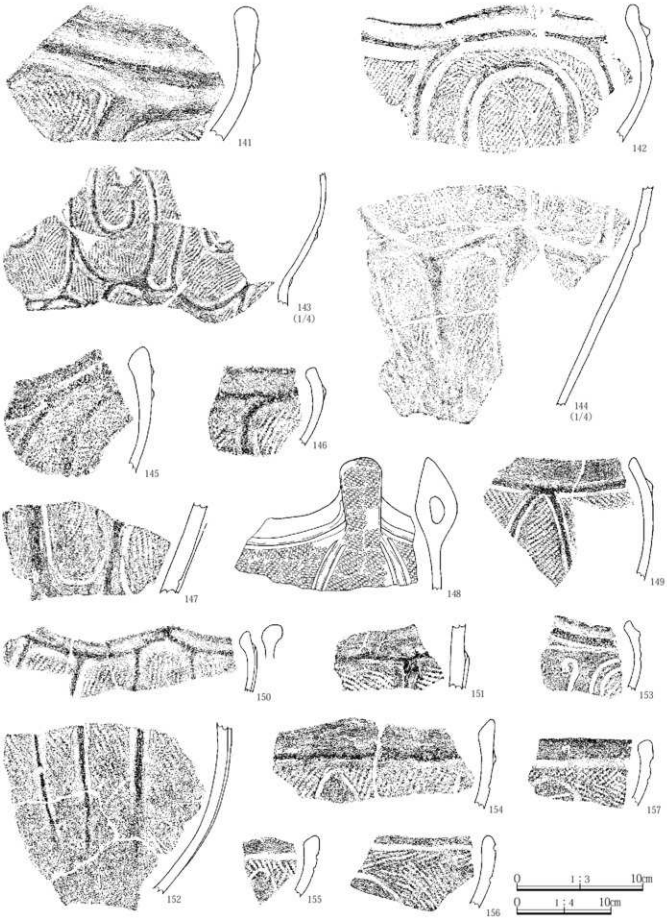
第25図　旧河道出土遺物(11)（縄文土器11）



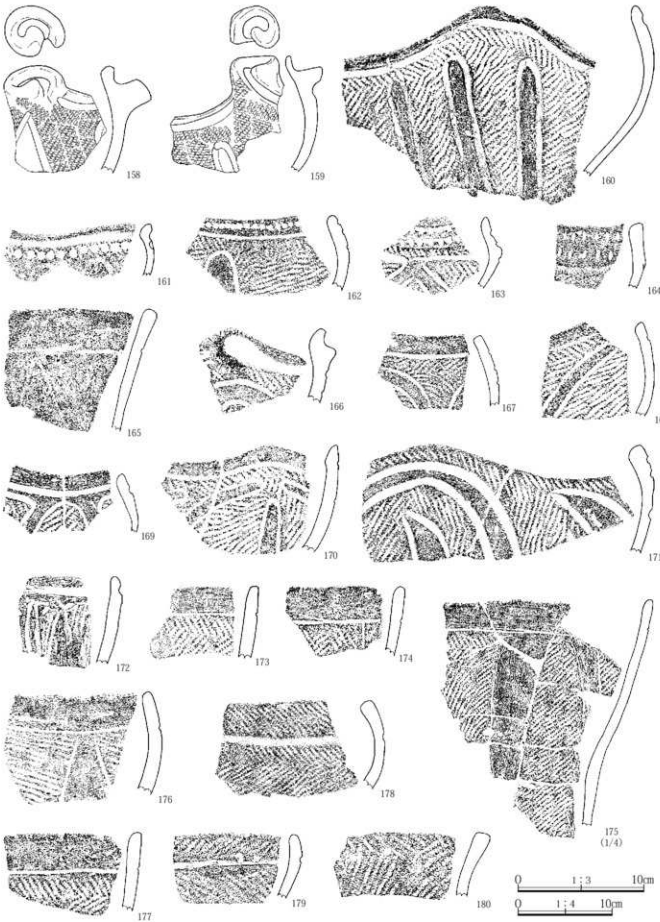
第26図　旧河道出土遺物(12)（縄文土器12）



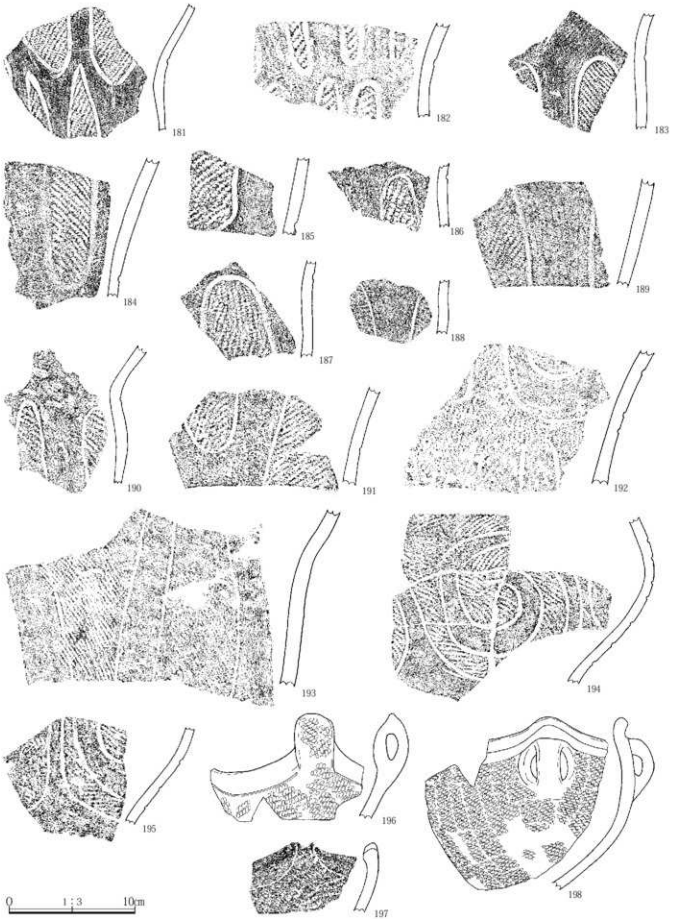
第27図　旧河道出土遺物(13)（縄文土器13）



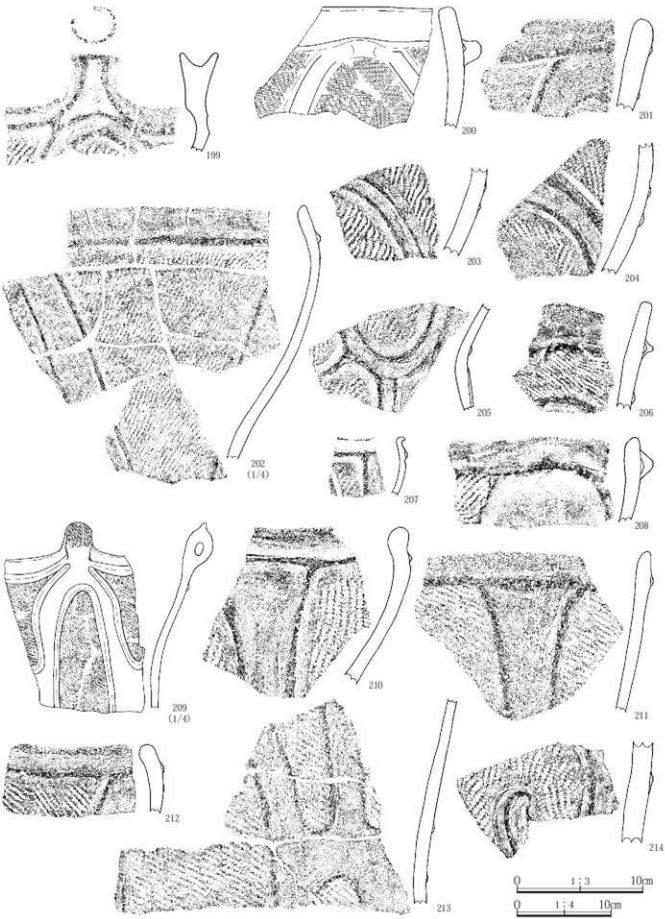
第28図　旧河道出土遺物(14)（縄文土器14）



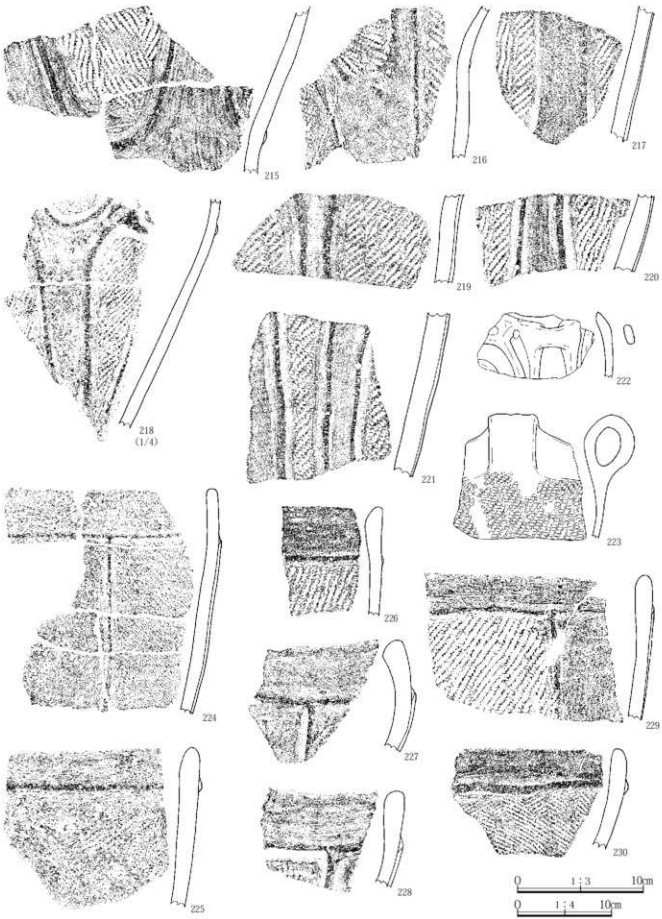
第29図　旧河道出土遺物(15)（縄文土器15）



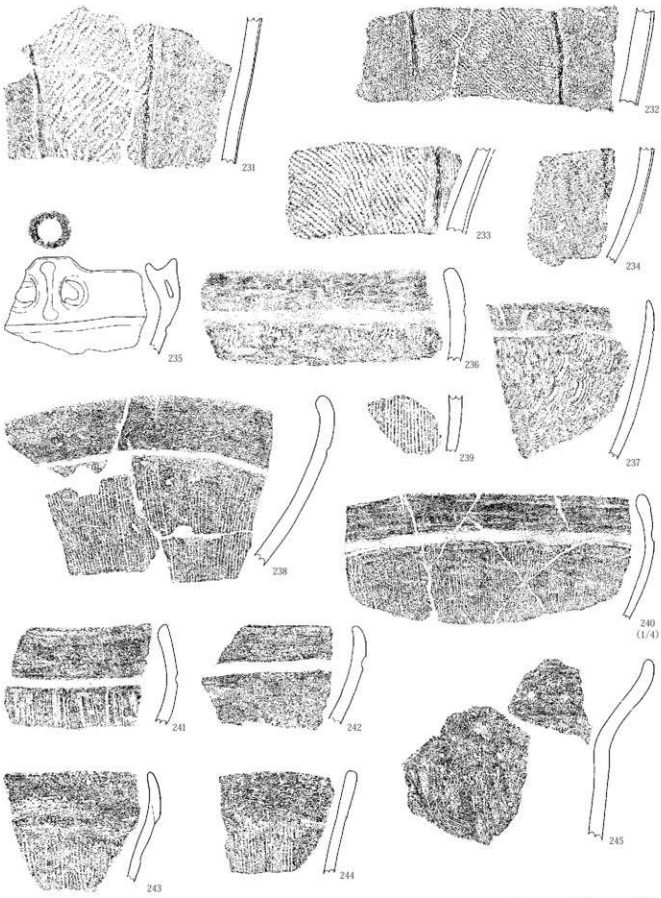
第30図　旧河道出土遺物(16)（縄文土器16）



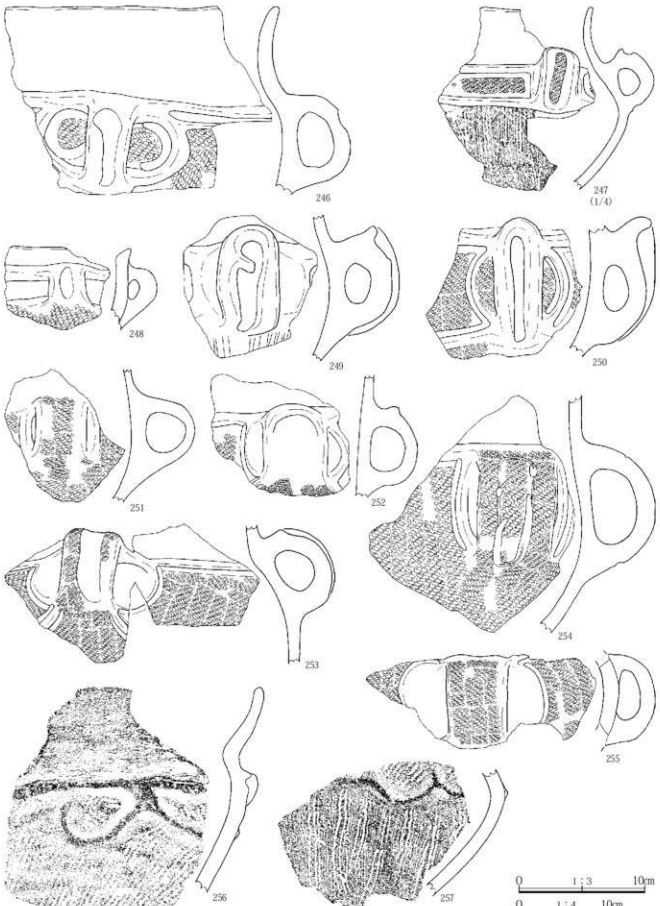
第31図　旧河道出土遺物(17)（縄文土器17）



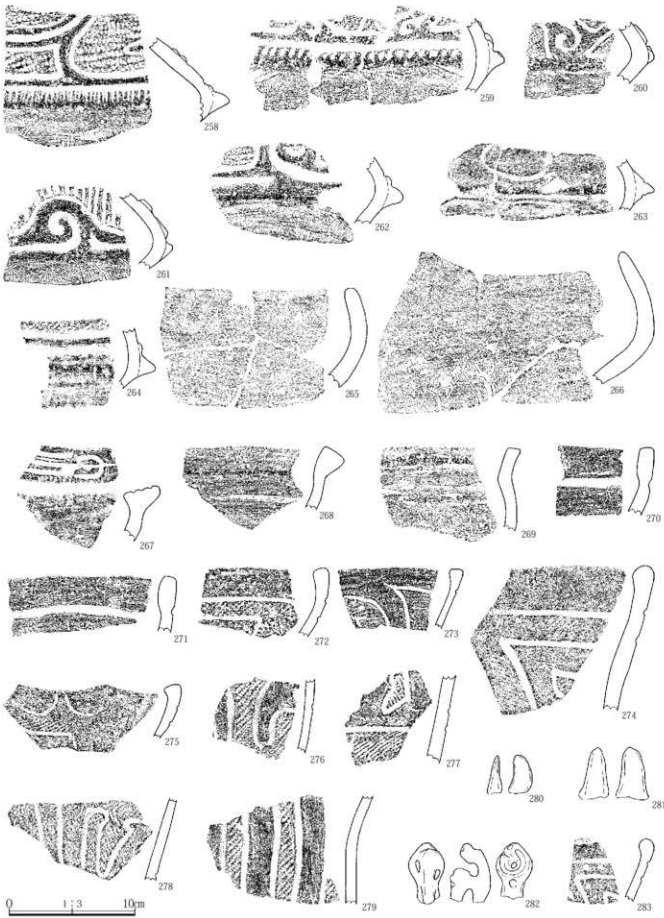
第32図　旧河道出土遺物(18)（縄文土器18）



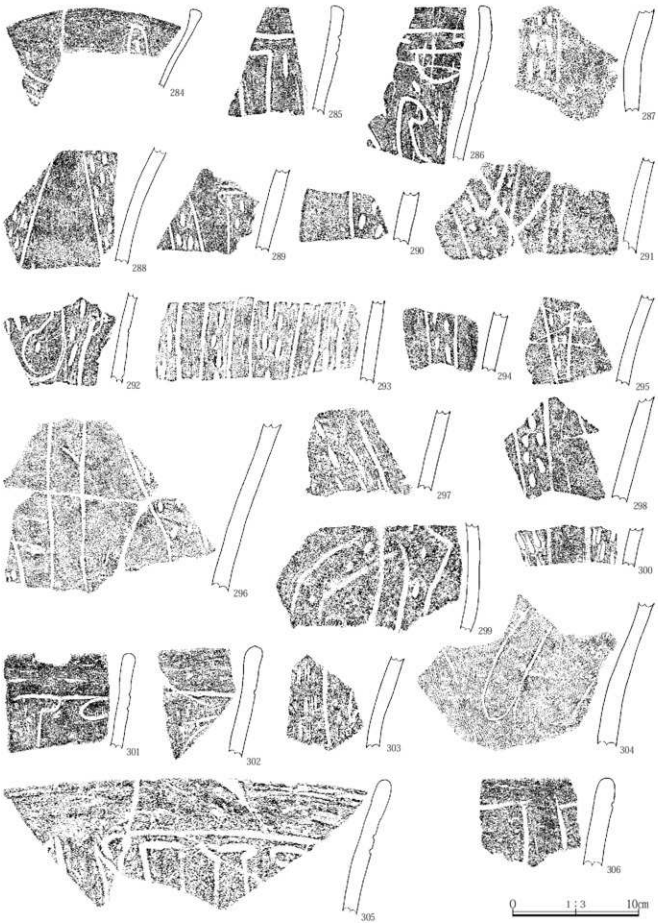
第33図　旧河道出土遺物(19)（縄文土器19）



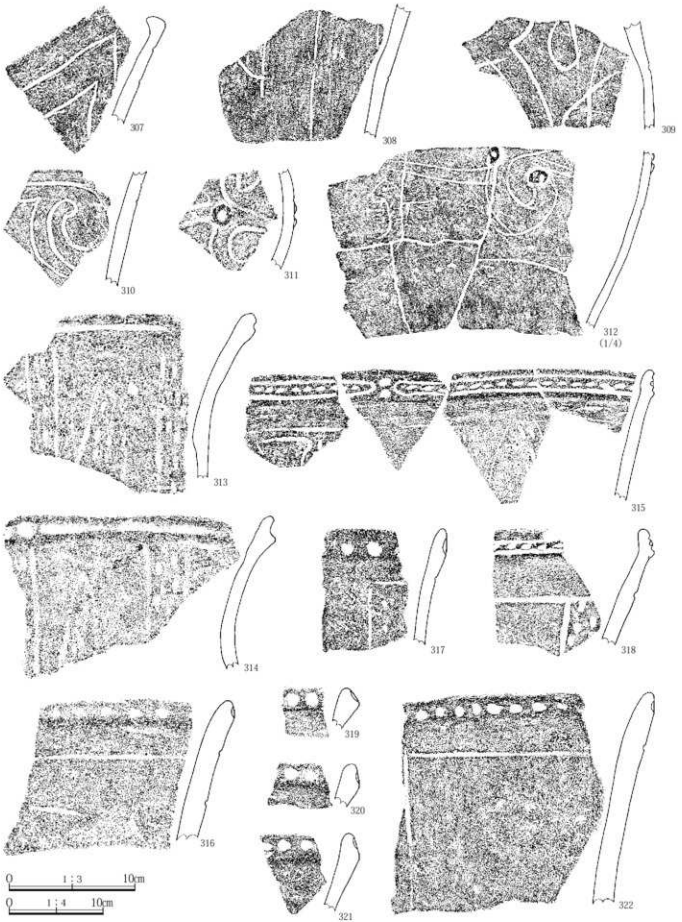
第34図　旧河道出土遺物(20)（縄文土器20）



第35図　旧河道出土遺物(21)（縄文土器21）

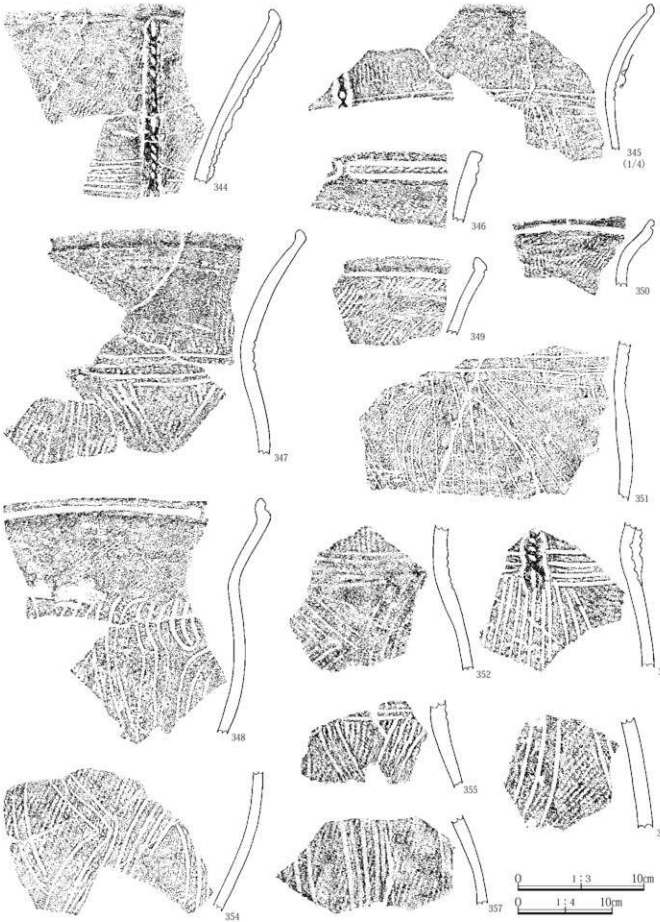


第36図　旧河道出土遺物(22)（縄文土器22）

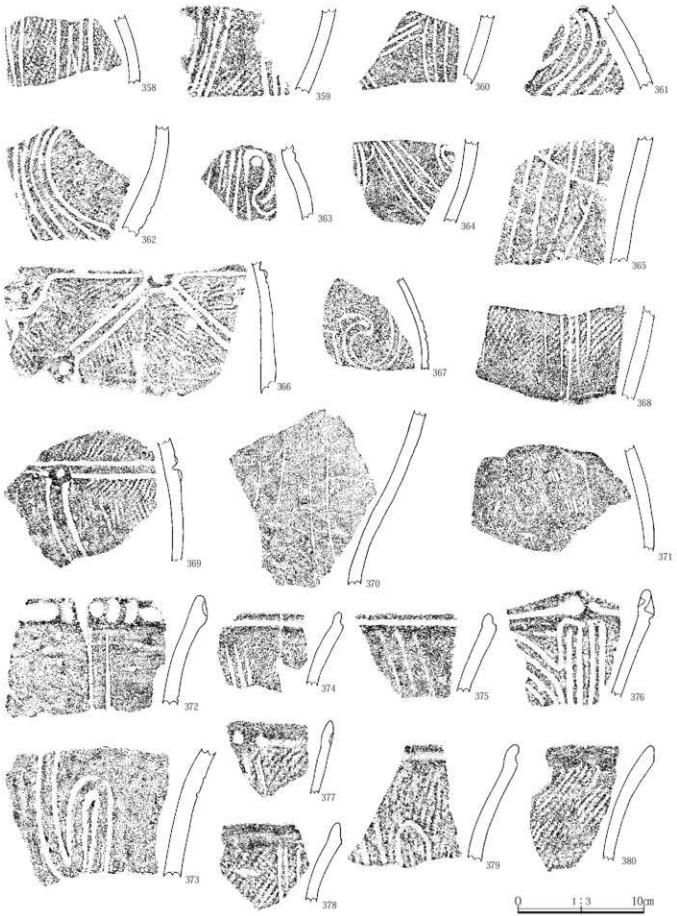


第37図　旧河道出土遺物(23)（縄文土器23）

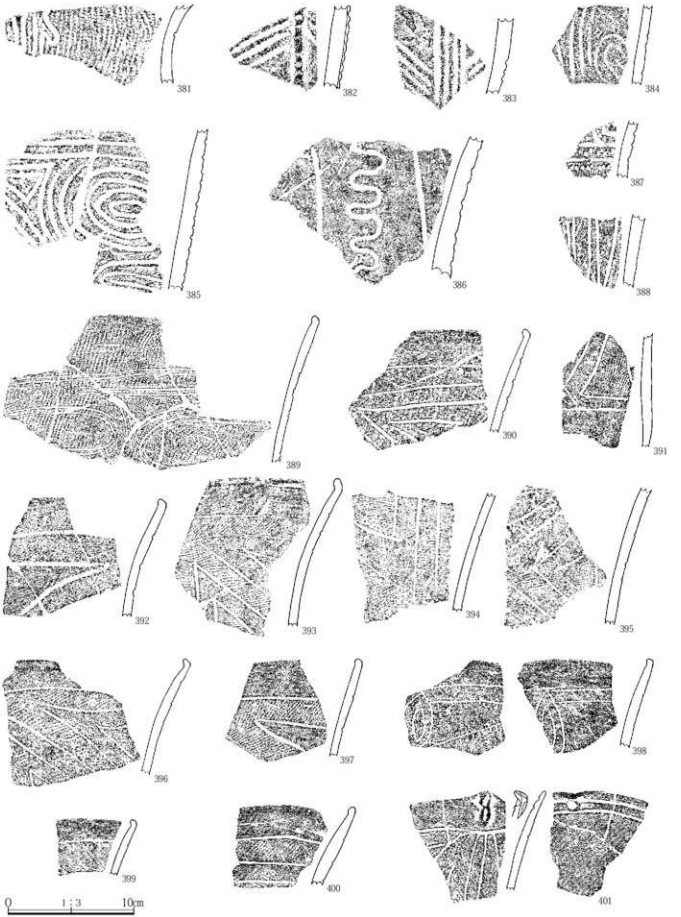
第38図　旧河道出土遺物(24)（縄文土器24）



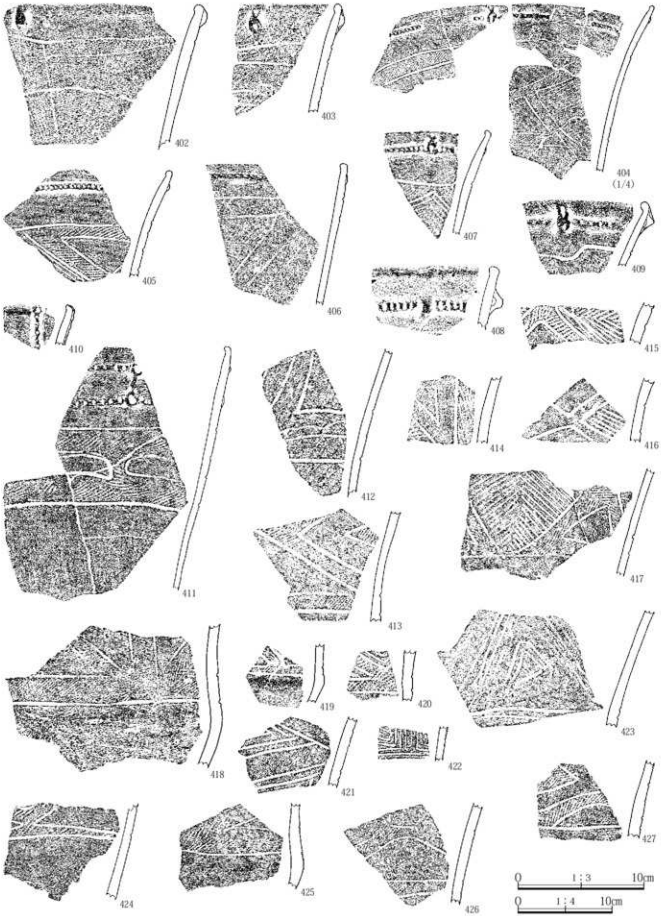
第39図　旧河道出土遺物(25)（縄文土器25）



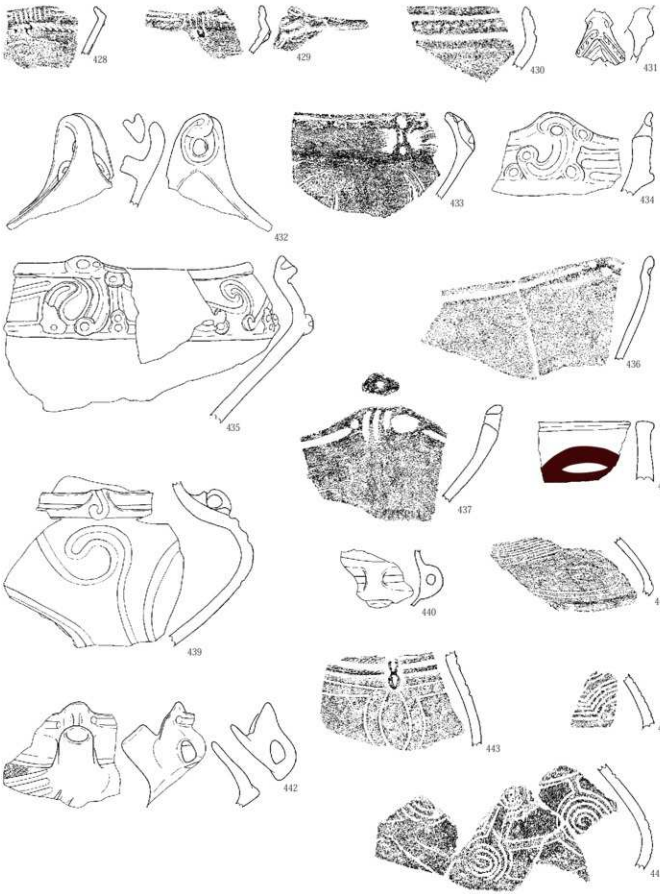
第40図　旧河道出土遺物(26)（縄文土器26）



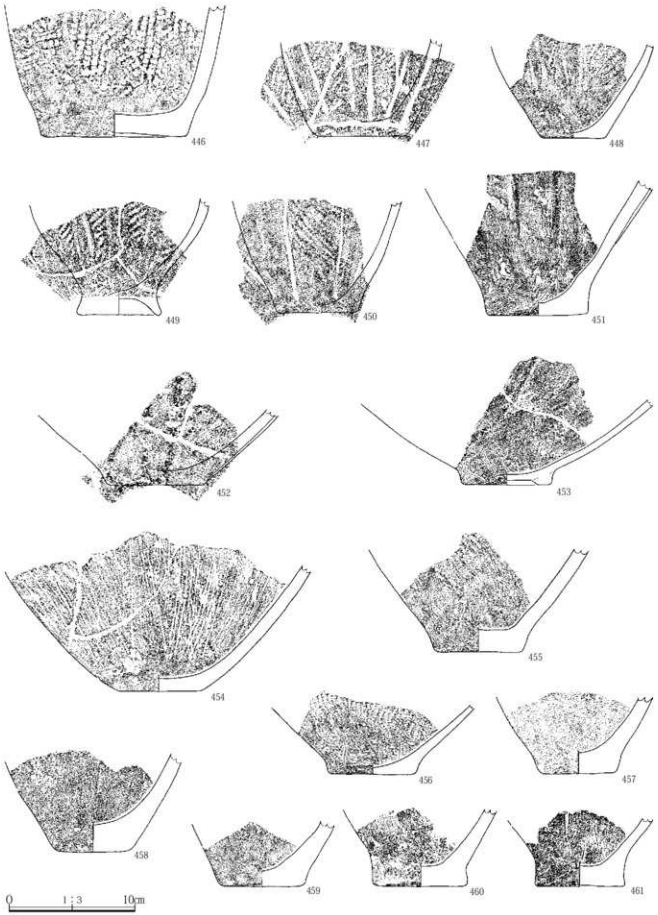
第41図　旧河道出土遺物(27)（縄文土器27）



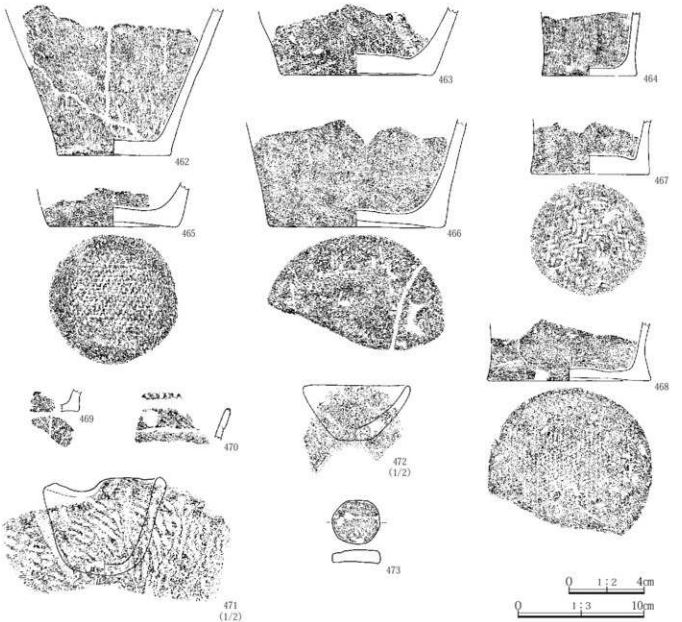
第42図　旧河道出土遺物(28)（縄文土器28）



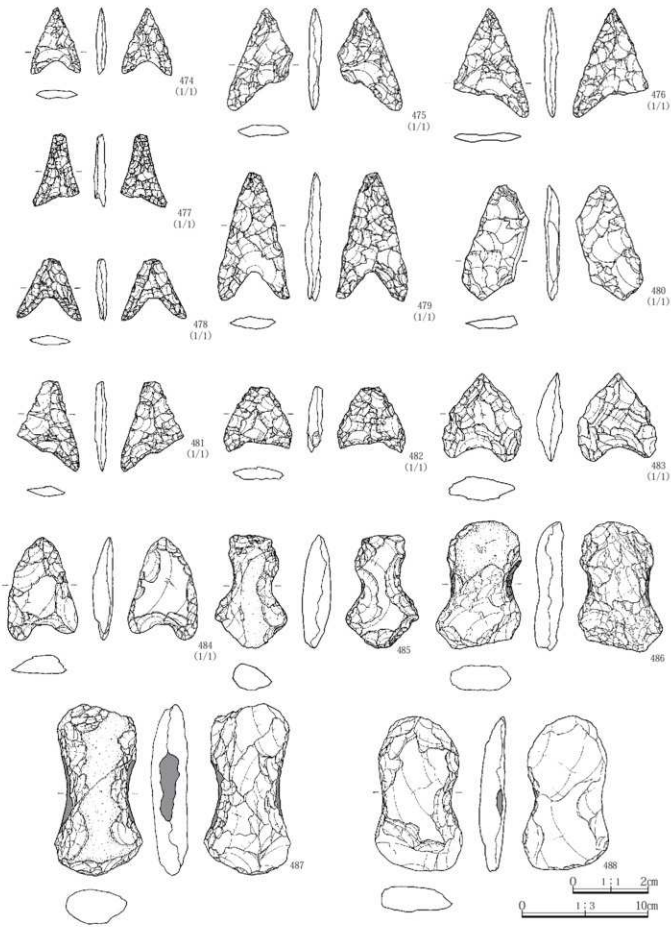
第43図　旧河道出土遺物(29)（縄文土器29）



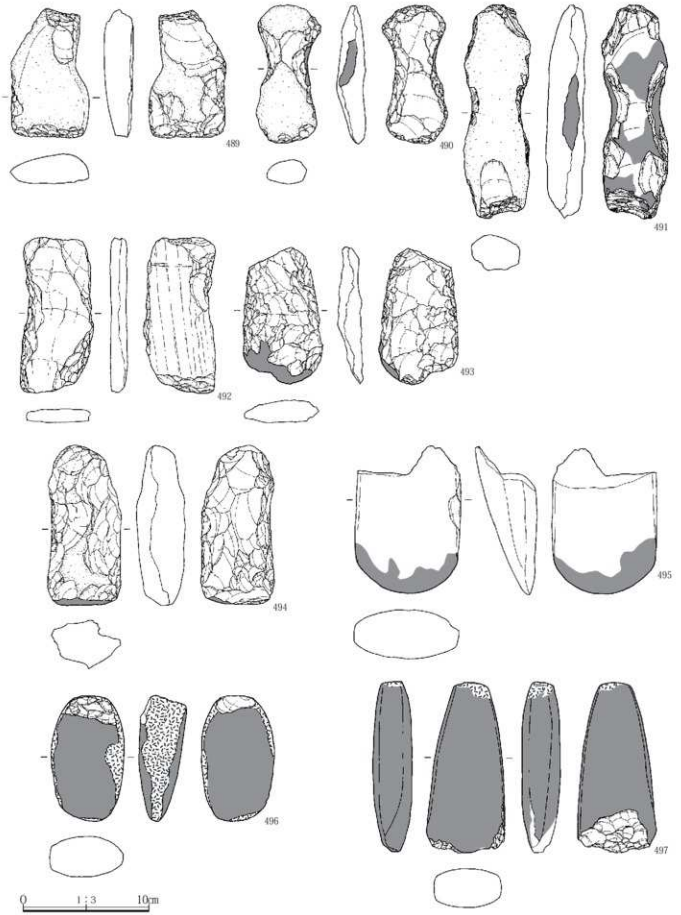
第44図　旧河道出土遺物(30)（縄文土器30）



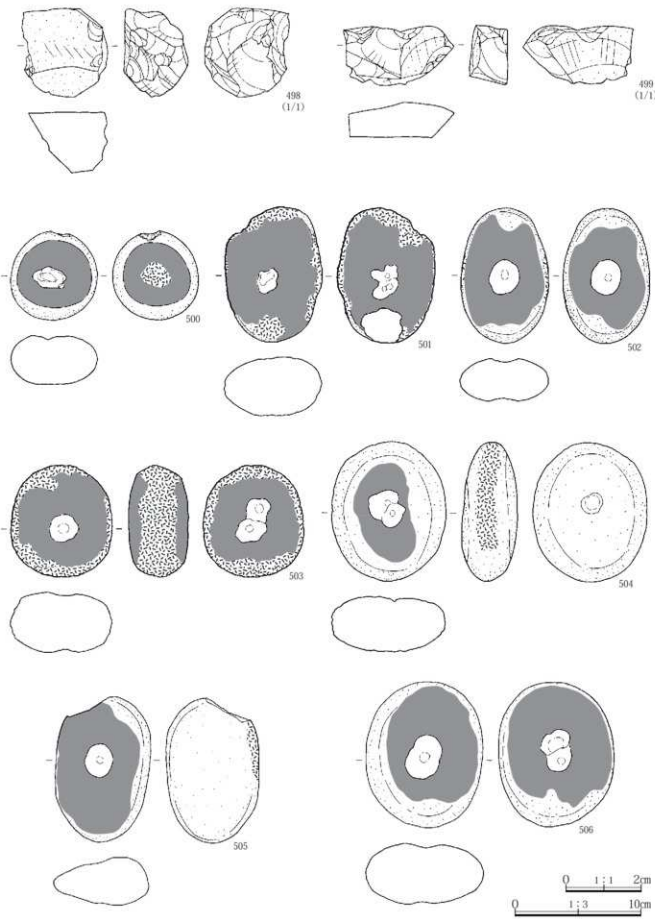
第45図　旧河道出土遺物(31)（縄文土器31）



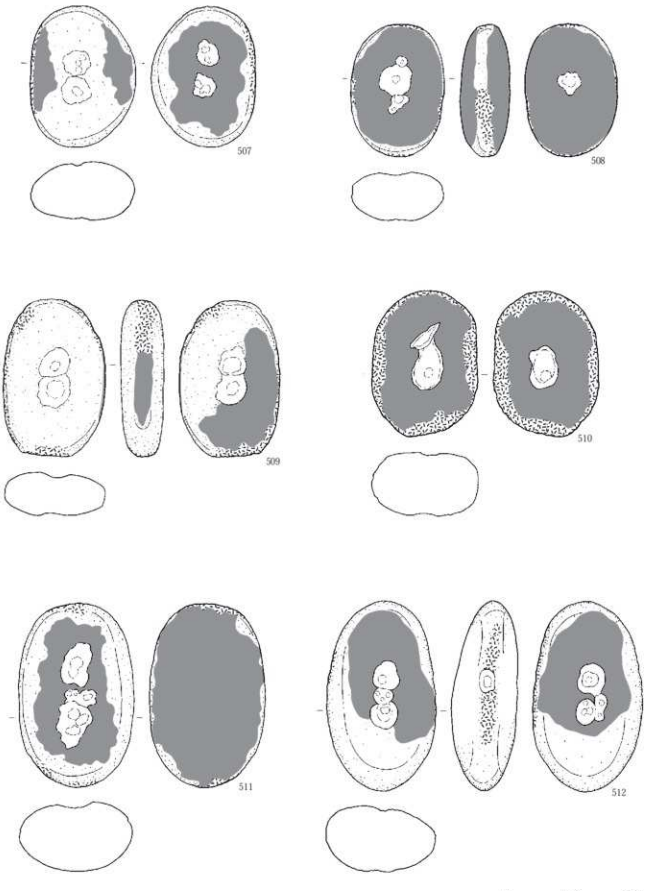
第46図　旧河道出土遺物(32)（縄文石器１）



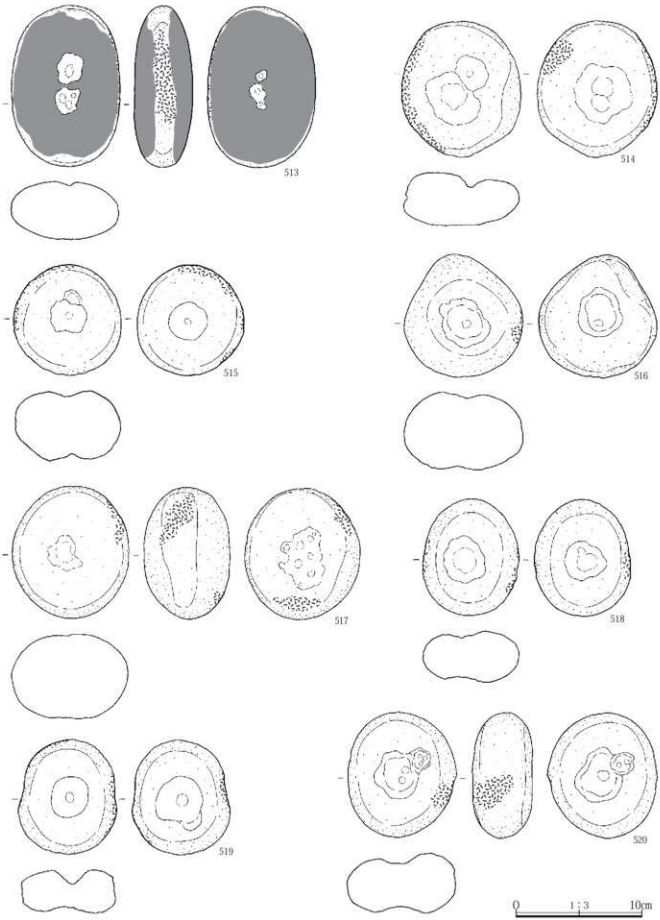
第47図　旧河道出土遺物(33)（縄文石器２）



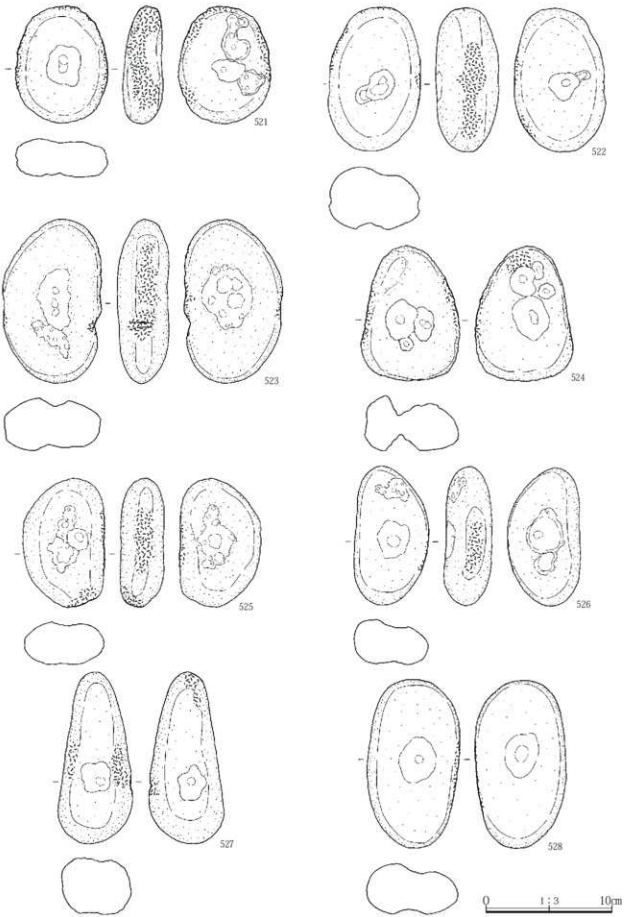
第48図　旧河道出土遺物(34)（縄文石器３）



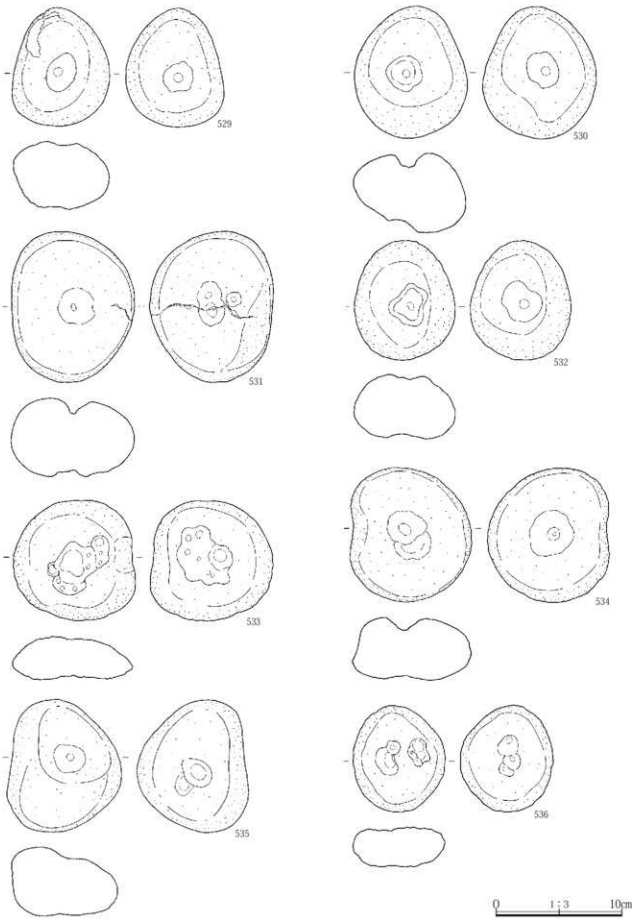
第49図　旧河道出土遺物(35)（縄文石器４）



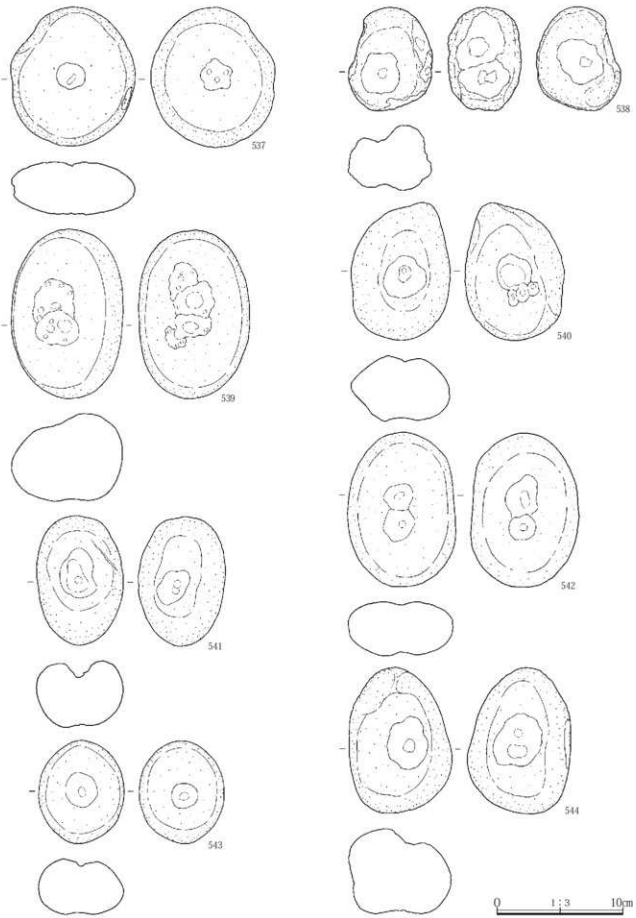
第50図　旧河道出土遺物(36)（縄文石器５）



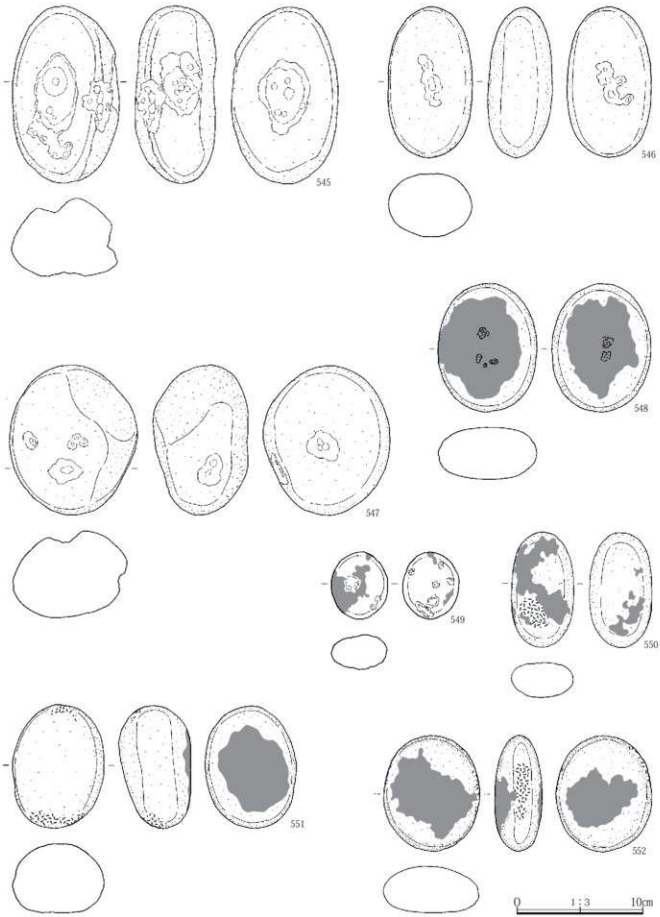
第51図　旧河道出土遺物(37)（縄文石器６）



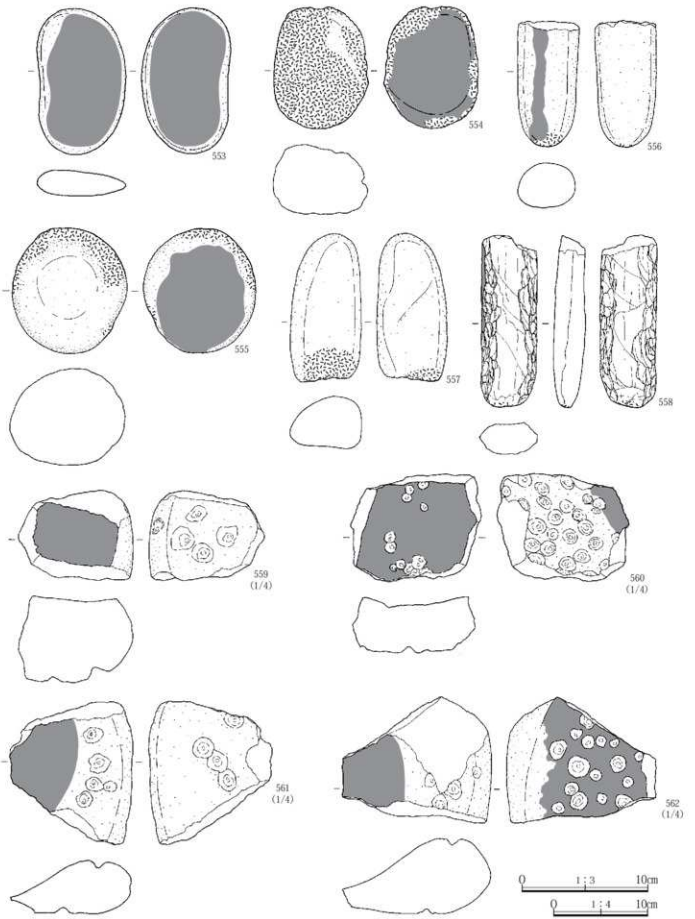
第52図　旧河道出土遺物(38)（縄文石器７）



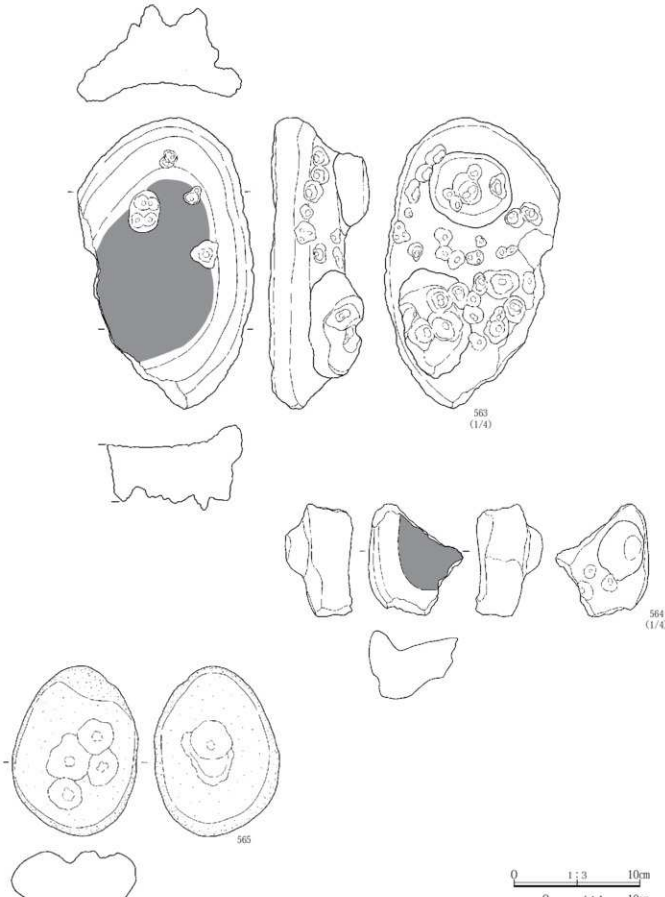
第53図　旧河道出土遺物(39)（縄文石器８）



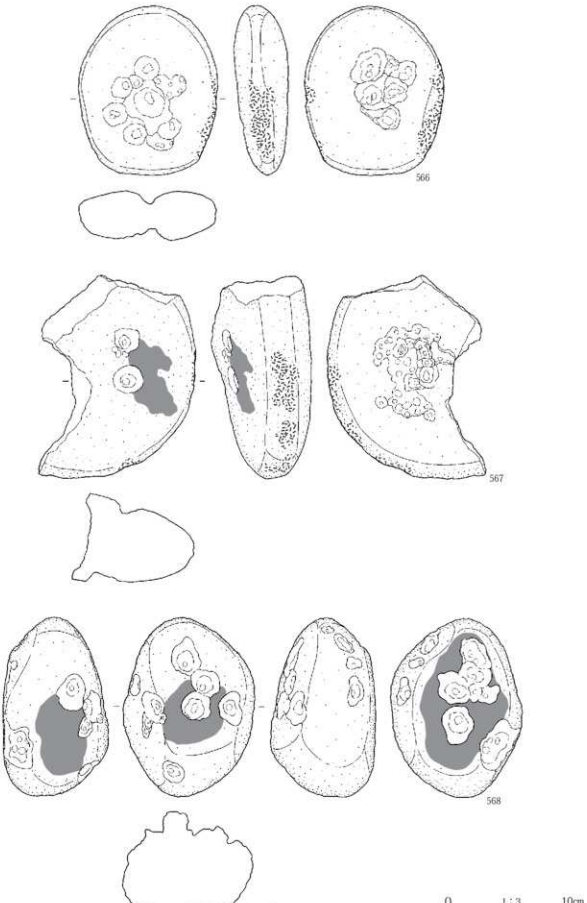
第54図　旧河道出土遺物(40)（縄文石器9）



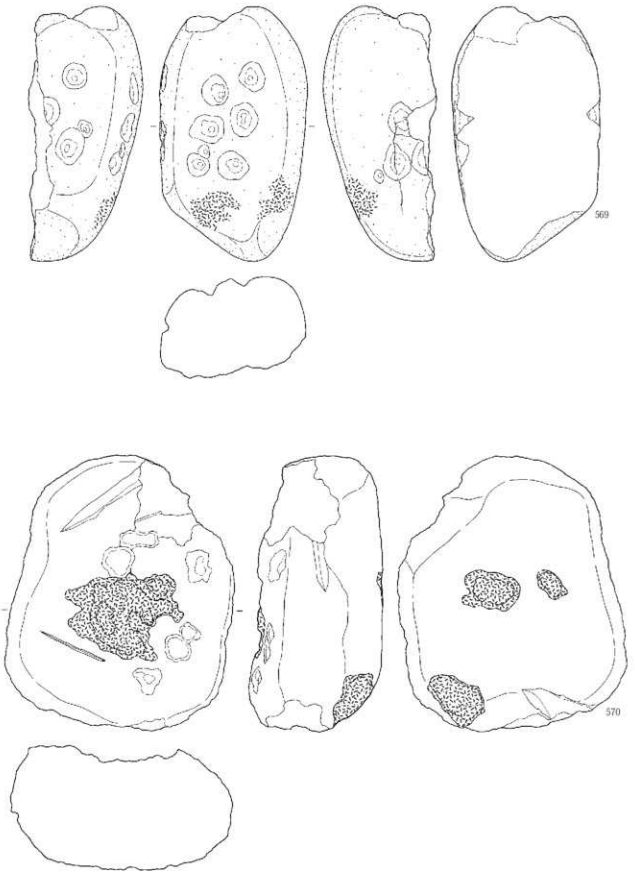
第55図　旧河道出土遺物(41)（縄文石器10）



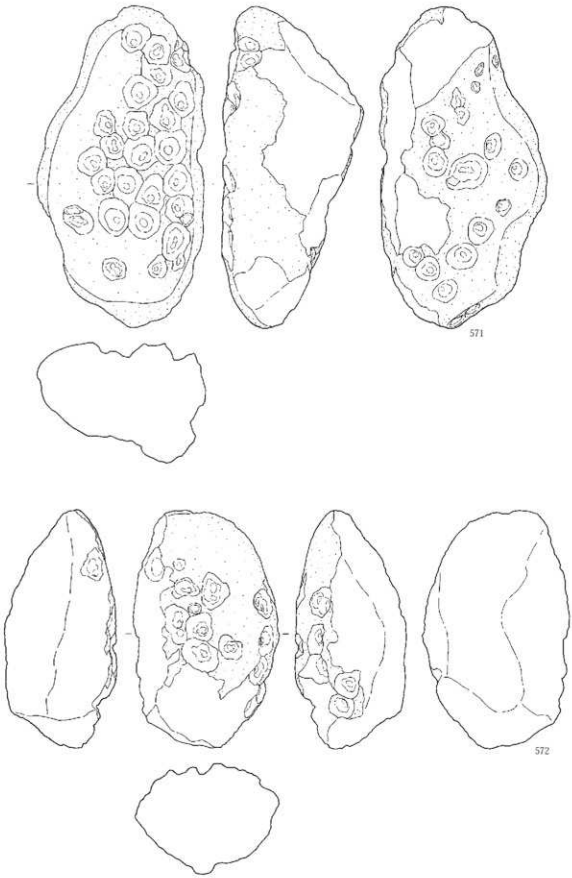
第56図　旧河道出土遺物(42)（縄文石器11）



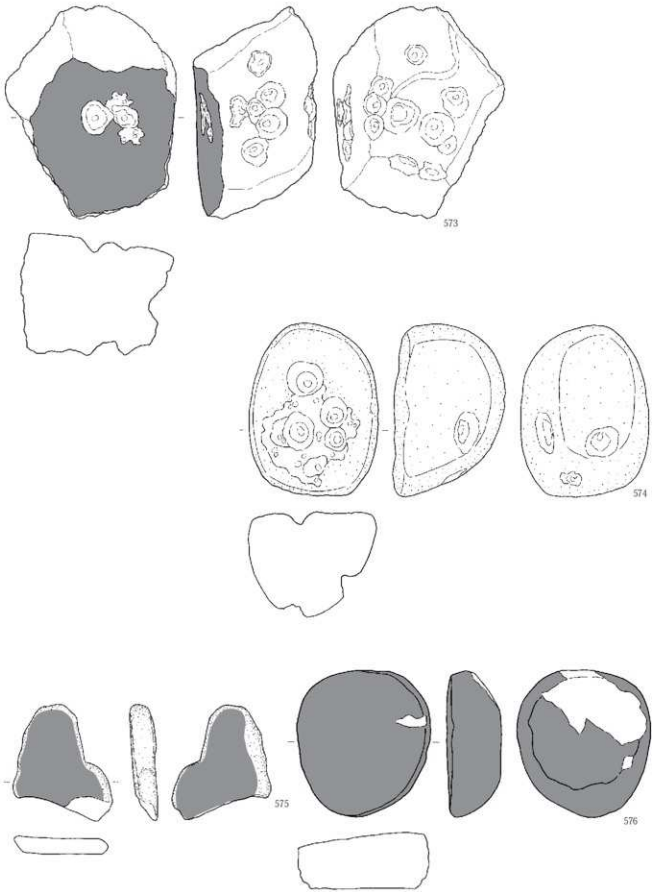
第57図　旧河道出土遺物(43)（縄文石器12）



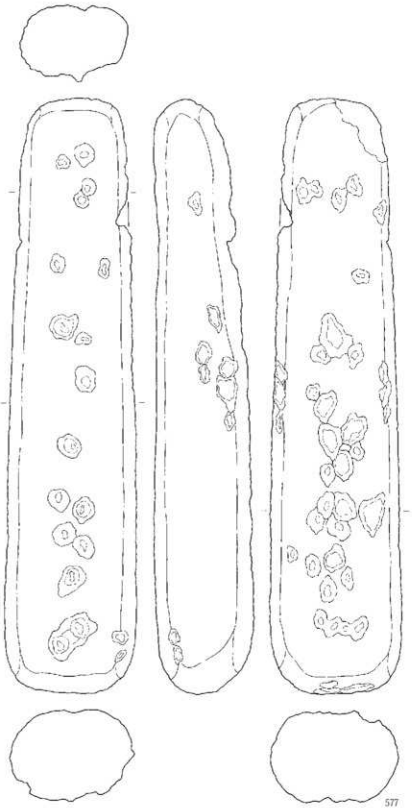
第58図　旧河道出土遺物(44)（縄文石器13）

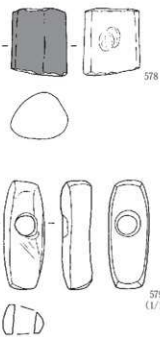


第59図　旧河道出土遺物(45)（縄文石器14）



第60図　旧河道出土遺物(46)（縄文石器15）

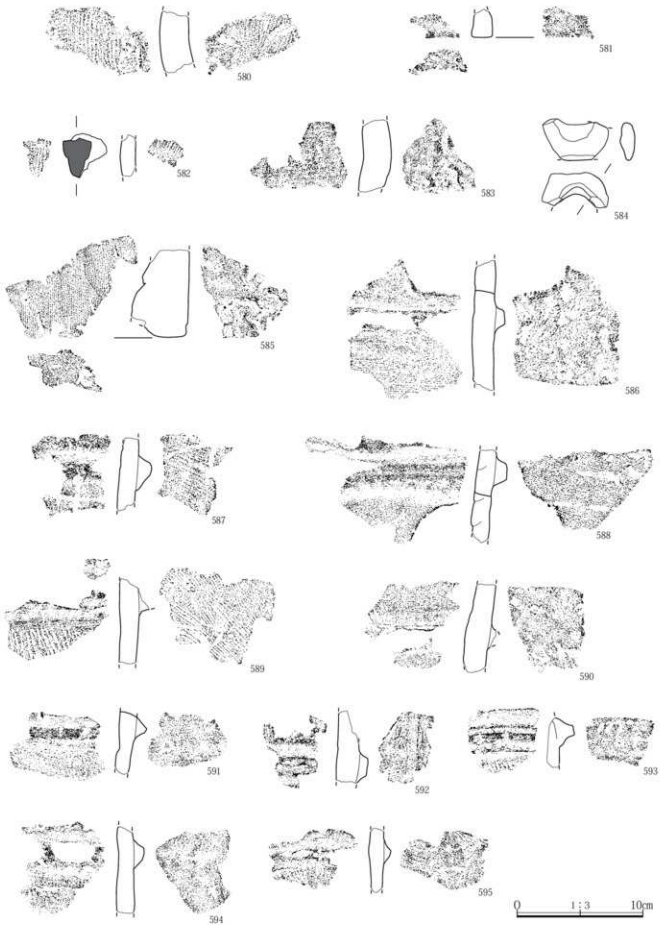




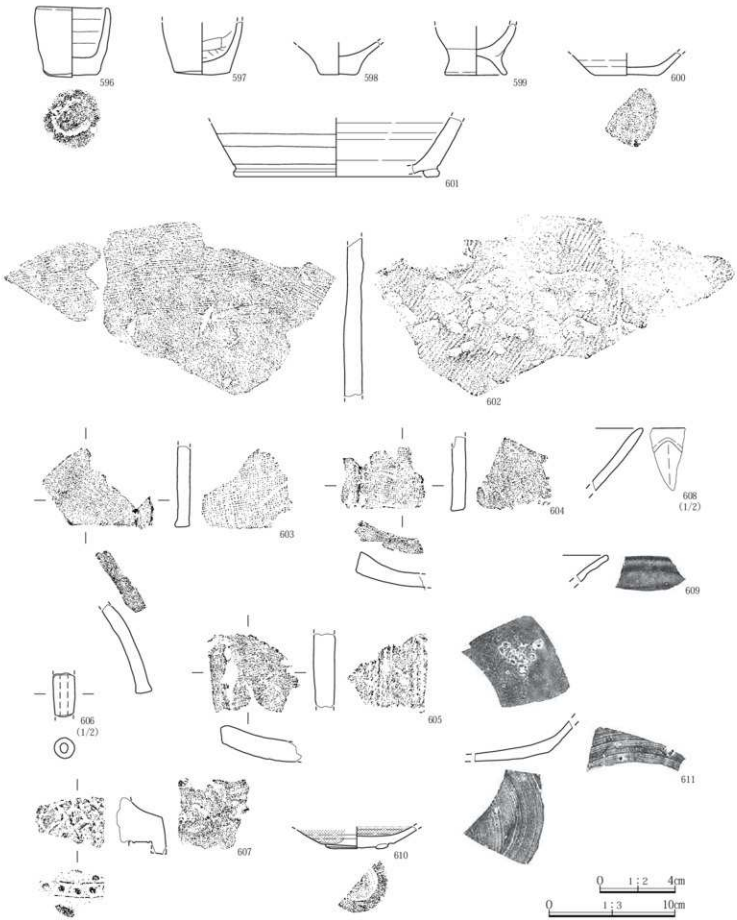
0　1:1　2m

0　1:4　10m

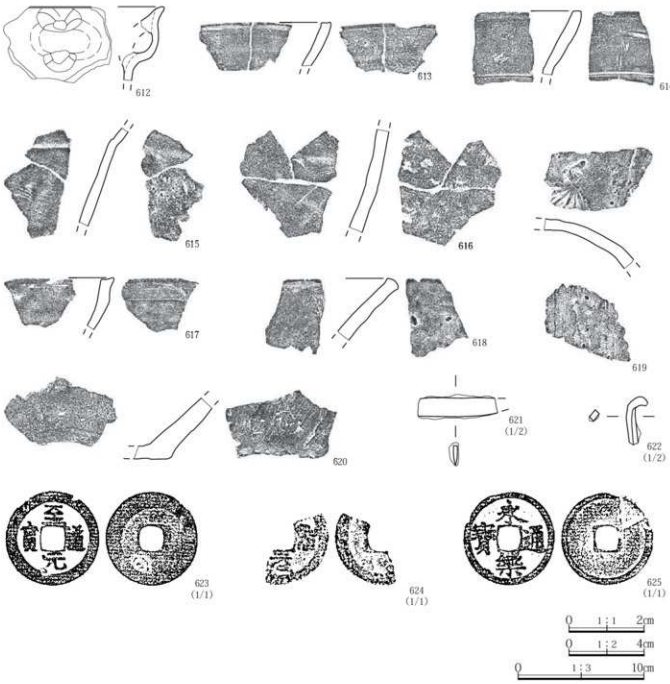
第61図　旧河道出土遺物(47)（縄文石器16）



第62図　旧河道出土遺物(48)（埴輪）



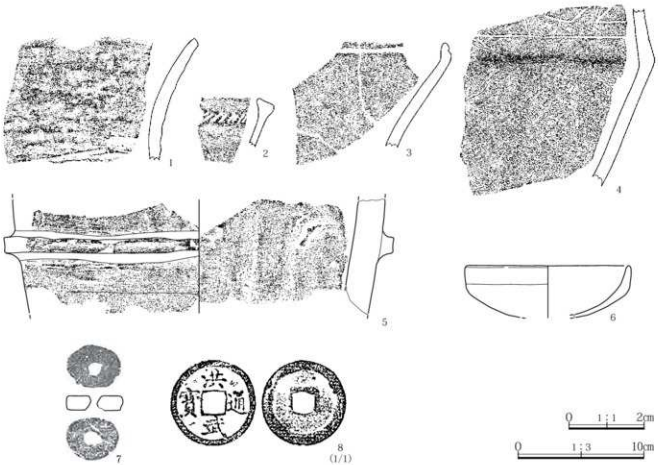
第63図　旧河道出土遺物(49)（古墳時代以降遺物１）



第64図　旧河道出土遺物(50)（古墳時代以降遺物２）

第２節　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、表土および攪乱中から出土したものである。遺物の多くは旧河道の包含層中から出土しているため、遺構外出土遺物はごくわずかである。



第65図　遺構外出土遺物

第３章　まとめ

今回、発掘調査を実施した下田島遺跡は、木崎台地と藪塚面Ｂに相当する微高地に挟まれた沖積地内での調査であり、旧河道に堆積した遺物包含層の調査が主体となった。調査では、遺物収納箱80箱に及ぶ遺物が出土し、埴輪を含めた古墳時代～近世遺物が１箱程度のほかは、すべて縄文土器・石器であった。古墳時代～近世遺物に対して、縄文土器・石器が多量であることは一目瞭然である。これらの遺物群は、どこからもたらされたのであろうか。

まず、１箱分の古墳時代～近世遺物であるが、出土数量も少ないうえ、第62～64図を見れば分かるとおり大部分が小破片である。こうした点から、別地点からの流れ込みと判断するのが適当であろう。おそらく、北西ないし北側の木崎台地上の遺跡にあったものが、さまざまな作用により流入したものと考えられる。埴輪については、本来の下田島遺跡である本発掘地点東側の微高地にも古墳群が存在し、ここからの流入も考えられなくはないが、地形的に可能性は低いであろう。中世遺物もわずかだが出土しており、北方にある長福寺遺跡（第９図38）からの流入も、一つの可能性として考えられるのではないだろうか。古墳時代～近世遺物については、少なくとも上流側の木崎台地の遺跡からもたらされたと考えるのが妥当であろう。

これに対して縄文土器は、遺物収納箱66箱という夥しい量が出土している。完形に復元できる個体は少ないものの半完形程度に復元できるものや、大形の破片も少なからずある。また、器面が磨滅しているものも多いが、破片の割れ口が磨滅していないものも多く見られる。石器についても遺物収納箱13箱の出土があり、100点を超える凹石・磨石や石皿・多孔石・石棒等の大形品も出土している。旧河道の埋没土は、概ね砂層とシルト層であるから強烈な流れがあったとは考えにくく、大量の土器・石器が別地点から洪水等の作用によって運ばれてきたとは考えにくい。第２章第１節で述べたとおり、遺物を包含する旧流路の状況は２号トレンチを挟んで北と南で異なっており、北側は幾筋もの細い溝状の落ち込みが確認され、その落ち込みの埋没土である黒褐色土・暗褐色土中から多くの遺物が出土している。黒褐色土・暗褐色土で埋まっていることから、旧流路は離水している状態であり、この時に北西側の台地上に居住していた縄文人が土器・石器を廃棄したものと考えるのが妥当であろう。黒褐色土・暗褐色土の上層には、さらに砂層が堆積することから（第13図断面Ａ）、廃棄後に再び流路となり、２号トレンチの南側へと運ばれたものと考えられる。つまり、本遺跡から出土した大量の縄文土器・石器は、廃棄行為によるものと結論付けたい。北西側の台地上には西田島遺跡があり、太田フレックス高校の前身である旧太田西女子高校の教室増築に伴う調査で、土坑14基が調査されている。報告書には調査区の場所が示されていないため、どこで検出されたのかが不明だが、教室増築であるから学校敷地内の北部であることは間違いないだろう。太田フレックス高校の敷地北部から台地東縁部にかけて、縄文時代中期後葉～後期前葉期の集落が存在し、ここに居住した縄文人が土器・石器を廃棄したのだろう。

以上、本書は遺跡名としては「下田島遺跡」であるが、遺跡の内容は「西田島遺跡」に存在するであろう縄文集落と密接に関わる可能性が高いことを指摘し、まとめとしたい。

付表

1　石器集計表

●出土点数

	剥片石器						石製品	礫石器								礫		総計
	石鏃	打斧	磨斧	石核	二次加工	剥片	垂飾	軽石製品	石棒	磨石	凹石	敲石	多孔石	石皿	台石	砥石	礫	礫片	
出土点数	11	29	3	3	16	178	1	1	2	44	60	13	14	13	4	4	7	5	408
掲載	11	10	3	2	0	0	1	1	2	8	48	3	10	6	0	1	0	0	106
未掲載	0	19	0	1	16	178	0	0	0	36	12	10	4	7	4	3	7	5	302

※未掲載とした石器のうち、打製石斧・磨石・凹石・敲石・多孔石・石皿等は破片である。

●器種別・出土位置別

	剥片石器						石製品	礫石器								礫		総計
	石鏃	打斧	磨斧	石核	二次加工	剥片	垂飾	軽石製品	石棒	磨石	凹石	敲石	多孔石	石皿	台石	砥石	礫	礫片	
1GA3		2		1	2	1				1	5		2	2					16
1GB2						2				1	1		1						5
1GB3				1	1				1		1								4
1GC2		3			3	3				4	9	2	1	3					28
1GC3						5					2		1	2					10
1GD1										1	1								2
1GD2		4	2		3	18			1	9	8	3		3				1	52
1GD3	3	1	1		2	27				4	7	1	2	2				1	51
1GE2	2	6		1	2	26	1			10	18	2	2	1	2	1	1		75
1GE3	3	1			1	34				5	1	2						1	48
1GF1						1												1	2
1GF2						2				2									4
1GF3		2				1				2	1		1				2	1	10
1GG1	2	3				8				2	3		1		1	1			21
1GG2						6					1		3		1		1		12
1GH1		2				12						1							15
1GH2	1					3													4
1GI1										1									1
2GH24		1															1		2
2GH25						2				1		1					1		5
2GI24						1													1
2GI25						2													2
2GJ25						1													1
3GX3											2								2
3GY3						1													1
2号トレンチ						1													1
埋土上層		3				14		1		1						1	1		21
表土		1			2	7						1							11
撹乱																1			1
総計	11	29	3	3	16	178	1	1	2	44	60	13	14	13	4	4	7	5	408

●器種別・石材別

	剥片石器						石製品	礫石器									礫		総計
	石鏃	打斧	磨斧	石核	二次加工	剥片	垂飾	軽石製品	石棒	磨石	凹石	敲石	多孔石	石皿	台石	砥石	礫	礫片	
黒曜石	1			2		1													4
チャート	7				1	49													57
黒色頁岩		3			4	50													57
珪質頁岩	1	2			4	22											1		30
黒色安山岩					2	5													7
灰色安山岩	2	1				3													6
メノウ						1													1
褐色碧玉						1													1
滑石							1												1
細粒輝石安山岩		2		1	1	11				1									16
粗粒輝石安山岩						1				27	57	3	13	13	2				116
変質安山岩		1																	1
ホルンフェルス		10			4	17				1									32
花崗岩										6	2	3			1				12
デイサイト		1								1		1							3
凝灰質珪質頁岩			2																2
蛇紋岩質準片岩									1										1
輝緑岩												2							2
変輝緑岩			1																1
変玄武岩						3													3
結晶片岩		5				5				1		1						4	16
緑色片岩		2																	2
軽石								1		1			1				5	1	9
砂岩		1				4			1	3		3			1	4			17
石英																	1		1
泥岩						5													5
溶結凝灰岩		1								3	1								5
総計	11	29	3	3	16	178	1	1	2	44	60	13	14	13	4	4	7	5	408

付表

●凹石の分析(長さ)
対象：完形 52 点

長さ(mm)	点数	%
61 ～ 70	1	2%
71 ～ 80	0	0%
81 ～ 90	7	13%
91 ～ 100	9	17%
101 ～ 110	16	31%
111 ～ 120	9	17%
121 ～ 130	3	6%
131 ～ 140	5	10%
141 ～ 150	2	4%
合　計	52	100%

●凹石の分析(幅)
対象：完形 52 点

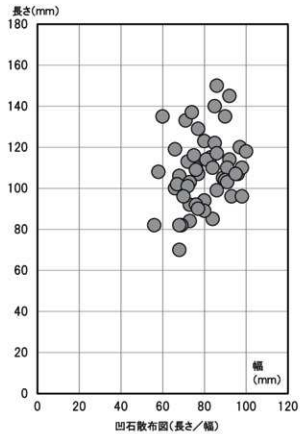
幅(mm)	点数	%
51 ～ 60	3	6%
61 ～ 70	8	15%
71 ～ 80	18	35%
81 ～ 90	12	23%
91 ～ 100	11	21%
合　計	52	100%

●凹石の分析(厚さ)
対象：完形 52 点

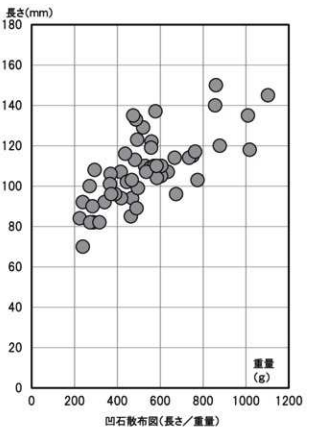
厚さ(mm)	点数	%
31 ～ 40	15	29%
41 ～ 50	18	35%
51 ～ 60	11	21%
61 ～ 70	7	13%
71 ～ 80	1	2%
合　計	52	100%

●凹石の分析(重量)
対象：完形 52 点

重量(g)	点数	%
201 ～ 400	14	27%
401 ～ 600	23	44%
601 ～ 800	9	17%
801 ～ 1000	3	6%
1001 ～ 1200	3	6%
合　計	52	100%



凹石散布図(長さ／幅)



凹石散布図(長さ／重量)

2　遺物観察表

II河道出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種器種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第15図 PL.4	1	縄文土器 深鉢	1GA3 口縁～胴下位 2/3	口	47.5			粗砂、チャート細礫/ふつう	隆帯による口縁部楕円状区画、２条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を充填施文、蛇行懸垂文を施す。口縁部区画は１条の隆帯により、端部の閉じない弓状と楕円状モチーフを１単位として横位に連続させるが、一部単なる楕円文となる部分もある。口縁部区画内はナデ調整のみで縄文を施文しない。胴部器面摩滅著しい。	加曽利E3式
第15図 PL.4	2	縄文土器 深鉢	1GA3、B2、C3、D3 口縁～胴中位破片	口	(45.0)			粗砂、赤色粒/ふつう	４単位波状口縁で、２単位上端に抉りを入れた左右非対称の突起を付す。隆帯による口縁部楕円状区画を施し、RL縄文を充填施文。胴部は低平な隆帯、沈線による渦巻文、楕円状モチーフなどを施して RL縄文を充填施文。胴上位の区画内、区画間にＳ字文を配す。	加曽利E3式
第15図 PL.4	3	縄文土器 深鉢	1GA3 口縁～底部3/4	口 底	18.5 5.2	高	25.9	粗砂、赤色粒/ふつう	口縁から底部に至る逆Ｕ字状文を横位に連続させ、RL縄文を充填施文、胴上位にワラビ手状懸垂文を施す。区画間にＳ字文、ワラビ手状懸垂文を上下２段に配す。	加曽利E3式
第16図 PL.4	4	縄文土器 深鉢	1GB2 口縁～胴上位破片	口	(32.0)			粗砂、輝石/ふつう	隆帯による口縁部楕円状区画を施し、LR縄文を充填施文。胴部は２条沈線による懸垂文を施し、LR縄文を充填施文、縦位懸垂文を施す。	加曽利E3式
第16図 PL.4	5	縄文土器 深鉢	1GE2 口縁～胴上位破片	口	(22.0)			粗砂、輝石/ふつう	沈線による楕円文を横位に連続させ、内部にRL縄文を充填施文、楕円文間を突出させる。胴部は２条沈線による懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第16図 PL.4	6	縄文土器 深鉢	1GE2 口縁～胴上位破片	口	(20.0)			粗砂、輝石/良好	緩やかな４単位波状口縁で、２単位上上端に抉りを入れた突起を付すようだ。隆帯による口縁部楕円状区画、２条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。波頂部下の楕円区画内には縄文は施されない。	加曽利E3式
第16図 PL.5	7	縄文土器 深鉢	1GD2、D3 口縁～胴中位 1/5	口	32.8			粗砂、赤色粒、輝石/ふつう	舌状の突起を付す波状口縁。口縁部文様帯を持たないが、突起下にワラビ手文を配し、楕円文、ワラビ手文による意匠を配す。区画内にRL縄文を充填施文。	加曽利E3式
第16図 PL.5	8	縄文土器 深鉢	1GE2、E3 口縁部破片	口	(30.0)			粗砂、輝石/ふつう	舌状の突起を付す波状口縁。沈線による楕円文を横位に連続させ、内部にRL縄文を充填施文、楕円文間を突出させて逆Ｓ字文を施す。胴部は隆帯による意匠が展開するようだ。	加曽利E3式
第16図 PL.5	9	縄文土器 深鉢	1GC2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	２条沈線による胴部懸垂文を施し、無節Lr縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第16図 PL.5	10	縄文土器 深鉢	1GD2、1GE2 胴部1/3					粗砂/ふつう	縦位条線を地文とし、胴中位に２条沈線をめぐらして文様帯を上下に分割、上位は２条沈線による波状文、下位は矩形の懸垂文を施す。２条沈線の沈線間、矩形懸垂文外を磨り消す。	加曽利E3式
第16図 PL.5	11	縄文土器 深鉢	1GD2、D3、E2 胴部破片					粗砂、輝石/良好	隆帯による蛇行懸垂文を施し、縦位条線を充填施文する。	中期後葉
第16図 PL.5	12	縄文土器 深鉢	1GD2、E2 胴中位～底部 1/2	底	6.8			粗砂、赤色粒/ふつう	３条と２条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文、蛇行懸垂文を施す。	加曽利E3式
第17図 PL.5	13	縄文土器 深鉢	1GA3、D2、D3、E2 口縁～胴中位 1/4	口	(28.5)			粗砂、輝石/ふつう	緩やかな波状口縁。隆線による渦巻文などのモチーフを施し、RL縄文を充填施文する。渡頂部下に貼付文を付す。	中期後葉
第17図 PL.5	14	縄文土器 深鉢	1GA3 口縁～胴上位破片	口	(20.0)			粗砂、輝石/ふつう	緩やかな４単位波状口縁で、２単位上上端を凹ます突起を付す。隆線による渦巻文状のモチーフを施し、RL縄文を充填施文する。	中期後葉
第17図 PL.5	15	縄文土器 深鉢	1GD2、D3 口縁～胴中位破片	口	(21.0)			細砂、赤色粒/ふつう	口縁に沿って沈線をめぐらし、以下、沈線による振幅の大きい波状文を施文、口縁下沈線との区画内に RL縄文を充填施文する。胴下半は逆U字状モチーフを施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第17図 PL.5	16	縄文土器 深鉢	1GB2、D2 口縁～胴中位破片	口	(19.0)			細砂、輝石/良好	口縁に沿って沈線をめぐらし、以下、沈線による振幅の大きい波状文を施文、口縁下沈線との区画内に RL縄文を充填施文する。胴下半はレンズ状文を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第17図 PL.5	17	縄文土器 深鉢	1GC2、D2 口縁～胴下位破片	口	(21.2)			粗砂/良好	器面摩滅により判然としないが、No.16と同様の文様構成となるようだ。口縁下の沈線は施されない。	加曽利E4式
第17図 PL.5	18	縄文土器 深鉢	1GB2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	胴上位に沈線によるU字状、胴下位にレンズ状モチーフを施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E4式
第17図 PL.6	19	縄文土器 深鉢	1GD2 口縁～胴上位破片	口	(18.0)			粗砂、赤色粒、輝石/ふつう	緩やかな４単位波状口縁で、２単位に橋状突起を付すようだ。口縁に沿って沈線をめぐらし、以下、２条沈線による上端が対角ワラビ手状になるＶ字状文を施文、文様外にRL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第17図 PL.6	20	縄文土器 深鉢	3GX3 口縁～胴中位破片	口	(18.5)			粗砂、赤色粒、輝石/ふつう	緩やかな４単位波状口縁で、２単位に橋状突起を付すようだ。波頂部下に玉抱き文状のモチーフを施し、RL縄文を充填施文。波底部下にI口縁部無文帯からつながる１字状文を配す。	加曽利E4式
第18図 PL.6	21	縄文土器 深鉢	1GD3、E3、G1 口縁～胴中位 1/2	口	21.0			粗砂/ふつう	口縁に２単位の橋状突起を付す。橋状隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、突起下と中間部に隆線による逆U字状懸垂文を施文、間にＶ字状文を配し、区画内にRL縄文を充填施文する。	後期加曽利E系

付表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第18図 PL.6	22	縄文土器 深鉢	1GB2 口縁～胴下位 1/3					粗砂、赤色粒、チャート、細礫、輝石/ふつう	緩やかな４単位波状口縁で、２単位に突起を付すようだ。隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、RL縄文を全面施文する。	後期加曽利E系
第18図 PL.6	23	縄文土器 深鉢	1GB3、E3 口縁～胴上位破片	口	(22.0)			粗砂、輝石/ふつう	橋状突起を付す波状口縁。突起下端から隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、RL縄文を全面施文する。	後期加曽利E系
第18図 PL.6	24	縄文土器 深鉢	1GB2 口縁部破片	口	(25.5)			粗砂、赤色粒、輝石/ふつう	橋状突起を付す波状口縁。隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、RL縄文を全面施文する。	後期加曽利E系
第18図 PL.6	25	縄文土器 深鉢	1GB3、C2、C3 口縁～胴上位破片	口	(16.0)			粗砂、輝石/良好	緩やかな４単位波状口縁で、２単位に橋状突起を付すようだ。口縁に沿って沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、無節Lr縄文を全面施文する。突起ではない波頂部下では沈線は途切れている。	後期加曽利E系
第18図 PL.6	26	縄文土器 鉢	1GB2 口縁～胴下位破片	口	(29.0)			粗砂/ふつう	横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、縦位条線を全面施文する。	加曽利E3式
第18図 PL.6	27	縄文土器 鉢	1GA3、B2、C3、D2、D3 口縁～胴下位 3/4	口	30.5			粗砂、チャート細礫、輝石/良好	横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、縦位条線を全面施文する。	加曽利E3式
第19図 PL.7	28	縄文土器 鉢	1GB2、B3、C2、D2、D3 口縁～底部破片	口 底	(24.5) 7.0	高	(20.2)	粗砂/ふつう	横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、縦位条線を全面施文する。	加曽利E3式
第19図 PL.6	29	縄文土器 鉢	1GA3、B3、C3 口縁部破片	口	(21.0)			粗砂、輝石/ふつう	横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、RL縄文を全面施文する。	中期後葉
第19図 PL.6	30	縄文土器 鉢	1GA3 口縁部破片	口	(28.0)			粗砂、輝石/ふつう	横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、RL縄文を全面施文する。	中期後葉
第19図 PL.7	31	縄文土器 鉢	1GA3 口縁部破片	口	(41.0)			粗砂、チャート細礫/良好	横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、LR縄文を全面施文する。	加曽利E3式
第19図 PL.7	32	縄文土器 内耳壺	1GC2、3GY3 口縁～胴下位破片	口	(29.5)			粗砂、赤色粒/ふつう	隆帯による楕円状区画を施し、内部に隆帯による渦巻文を配す。把手は十字状を呈し、上部を盛り上がらせ、逆三角形状に凹点を施文。口縁部無文帯を除き、無節Lr縄文を施す。	加曽利E2式
第19図 PL.7	33	縄文土器 内耳壺	1GA3、B2、C2 胴部破片					粗砂、赤色粒/ふつう	隆帯による楕円状区画を施し、RL縄文を充填施文、以下、縦位条線を全面施文する。把手上面に逆Ｓ字文を施す。	加曽利E3式
第20図 PL.7	34	縄文土器 内耳壺	1GD2 口縁～胴下位 2/3	口	29.0			粗砂/ふつう	隆帯による楕円状区画を施し、RL縄文を縦位充填施文、下位に隆帯を波状に沿わせる。隆帯下は縦位沈線を充填施文する。把手は上端を突出させ、上面内部を凹ます。	加曽利E3式
第20図 PL.7	35	縄文土器 内耳壺	1GA3、D3、3CY3 口縁～胴上位破片	口	(32.0)			粗砂、輝石/ふつう	隆帯による楕円状区画を施し、RL縄文を充填施文、以下、縦位条線を全面施文する。把手上面に楕円文を施す。	加曽利E3式
第20図 PL.7	36	縄文土器 内耳壺	1GB2 口縁～胴中位破片	口	(20.0)			細砂/ふつう	２条隆線によるワラビ手状文を施し、文様外にLR縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第20図 PL.7	37	縄文土器 内耳壺か	1GE2 胴中位～底部 1/2	底	6.2			粗砂/ふつう	横位隆帯をめぐらし、以下、無節Lr縄文を全面施文する。	加曽利E3式か
第20図 PL.8	38	縄文土器 内耳壺か鉢	3GY3 胴中位～底部 1/2					粗砂、輝石/ふつう	RL縄文を縦位全面施文する。	中期後葉
第21図 PL.8	39	縄文土器 深鉢	1GB2 胴中位～底部 1/2	底	7.6			粗砂/ふつう	RL縄文を縦位全面施文する。	加曽利E4式
第21図 PL.8	40	縄文土器 深鉢	1GA3 口縁部破片	口	(9.6)			粗砂、輝石/ふつう	口縁がすぼまる器形。横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、２条沈線による懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第21図 PL.8	41	縄文土器 深鉢	3GY3 口縁部破片	口	(13.6)			粗砂、輝石/ふつう	小型。くの字状に緩く内屈させて口縁部無文帯を区画、以下、無節Lr縄文を縦位全面施文する。	加曽利E4式
第21図 PL.8	42	縄文土器 深鉢	1GC2 口縁～底部4/5	底 現高	5.3 15.3			粗砂、細礫、輝石/ふつう	口縁が緩く外反する。１単位の波状口縁か。RL縄文を全面施文する。	後期初頭
第21図 PL.8	43	縄文土器 深鉢	1GG1 口縁部破片	口	(10.0)			粗砂、赤色粒/ふつう	小型。帯状沈線による丁字状などのモチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	称名寺Ⅰ式
第21図 PL.8	44	縄文土器 深鉢	1GA3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	小型。帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式
第21図 PL.8	45	縄文土器 深鉢	1GA3、C3 口縁～胴上位破片	口	(34.5)			粗砂、輝石/良好	波状口縁で、波頂部をワラビ手状に肥厚させる。帯状沈線によるモチーフを施す。	称名寺Ⅱ式
第21図 PL.8	46	縄文土器 深鉢	1GB3 口縁～胴下位破片	口	(33.0)			粗砂、輝石/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施す。	称名寺Ⅱ式
第22図 PL.8	47	縄文土器 深鉢	1GE3、F2、F3、G2 口縁～胴下位破片					粗砂、赤色粒/ふつう	胴部が膨らみ、頸部ですぼまって口縁が開く器形。口縁部を緩く内屈させ、屈曲部に円形刺突を伴う沈線をめぐらす。破損しているが小突起を付すと思われ、突起下に円形刺突、弧線文を施文、前位刻みを伴う隆帯を垂下させる。頸部に横位集合沈線をめぐらし、以下、縦位、対弧状の懸垂文を施す。地文に縄文を施文、口頸部にも施文する。口縁内面肥厚。	堀之内１式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第22図 PL.9	48	縄文土器 深鉢	1GH1 口縁～胴中位破片	口 (27.0)			粗砂/ふつう	バケツ形の器形。口縁下に2条沈線による半円状モチーフを施し、下端から集合沈線による懸垂文を施文。この単位文を横位に配し、2条沈線で連結させる。口頭部に地文LR縄文を施す。器面摩滅著しい。	堀之内1式か
第22図 PL.8	49	縄文土器 深鉢	1GF2 口縁～胴中位 1/4	口　17.6			粗砂、輝石/良好	口縁下に刻み隆線をめぐらし、8の字貼付文を付す。文様帯内は帯状沈線による菱形文を横位に連ね、LR縄文を充填施文、菱形区画内に相似形ではなく上部2辺のみを逆V字状に沈線を重複させる。	堀之内2式
第22図 PL.8	50	縄文土器 鉢	1GD2 ほぼ完形	口 16.6 底 9.0	高 9.7		粗砂、赤色粒/ふつう	帯状沈線による菱形文を横位に連ね、LR縄文を充填施文、菱形区画内に沈線を重複させるようだが、器面摩滅著しく判然としない。	堀之内2式
第23図 PL.9	51	縄文土器 浅鉢	1GG1 口縁～胴中位破片	口 (26.0)			粗砂/ふつう	口縁部が内湾する。屈曲部を張り出させて端部に刻みを付し、捻転状の橋状把手を貼付、沈線、円形刺突を施す。口縁内外面を肥厚させて、外面に横位沈線、内面把手部に円形刺突を施す。	称名寺式
第23図 PL.9	52	縄文土器 注口土器	1GC3 口縁～胴下位破片	口 (12.8) 胴 (22.0)			粗砂/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、LR縄文を充填施文するが、器面摩滅により縄文は一部しか見られない。注口上口縁部を橋状に2段つなぎ、上部にワラビ手状隆帯を貼付し、中央に円孔を穿つ。	称名寺1式
第23図 PL.9	53	縄文土器 注口土器	1GG1 口縁～胴上位破片	口 (9.0)			細砂/ふつう	緩やかな4単位波状口縁で、高い2単位に横位の橋状把手を付すようだ。低い波頂部には円形刺突、沈線を伴う貼付文を付し、下位の口頭部に円形の透かしを入れる。透かしの下端から2条の隆線を垂下させて双頭帯を画し分割、区画内に沈線によるモチーフを施す。高い波頂部の胴上位にも円形の透かしがあり、ここに注口が付くようだ。	堀之内1式
第23図 PL.9	54	縄文土器 注口土器	1GE3 口辺部破片	頸 (6.0)			細砂、輝石/ふつう	沈線による渦巻文を要所に配し、間に図形文様を施して渦巻文との間にできる区画内にLR縄文を充填施文する。	堀之内2式
第23図 PL.9	55	縄文土器 注口土器	1GE3 口縁～胴中位破片	口 (7.2)			細砂、輝石/良好	円形と三角形を組み合わせた橋状把手を2単位付し、円形部に渦巻文を施文、三角形部は沈線を沿わせる。口頭部は把手間の中央を肥厚させて渦巻文を施文、両脇から隆線と沈線による横長楕円文を交互に重ね、楕円文内に細密な円形刺突を施す。胴部も把手間の中央、最大径の位置に円形貼付文を付して渦巻文を施文、これを基点に帯状沈線による円形状のモチーフを施し、細密な円形刺突を施す。	堀之内2式
第23図 PL.9	56	縄文土器 蓋	1GD3 ほぼ完形	径 9.6 高 4.1			粗砂、輝石/ふつう	周縁部を緩く内傾させる。	後期前葉
第24図 PL.9	57	縄文土器 深鉢	1GG1 胴部破片				粗砂、繊維/ふつう	LR、末端環付RL縄文を羽状施文する。	間山式か
第24図 PL.9	58	縄文土器 深鉢	1GB2 口縁部破片				細砂、繊維/ふつう	口縁が緩く外反。附加条縄文を羽状施文する。	黒浜式
第24図 PL.9	59	縄文土器 深鉢	1GD2 胴部破片				細砂、繊維/ふつう	LR、RL縄文を羽状施文する。	黒浜式
第24図 PL.9	60	縄文土器 深鉢	1GE2 胴部破片				細砂/良好	横位集合沈線を施し、棒状、ボタン状貼付文を付す。	諸磯c式
第24図 PL.9	61	縄文土器 深鉢	1GB2 口縁部破片				粗砂、輝石/良好	口縁内面肥厚。角押文、三角押文による枠状文を施し、半裁竹管による連弧状刺突文を充填施文する。口縁部赤彩。	勝坂式
第24図 PL.9	62	縄文土器 深鉢	1GC2 口縁部破片				粗砂、輝石/良好	頸部でくの字状に屈曲し、口縁が開く器形。口縁部は無文で、口縁内面が肥厚する。頸部に交互刺突をめぐらす。	中期後葉
第24図 PL.9	63	縄文土器 深鉢	1GD2、1GE2 口縁部破片				粗砂、チャート、細礫、輝石/良好	突起を付す波状口縁で、突起基部に円形の透かし孔入ると思われる。隆帯による口縁部橋円状区画を施し、RL縄文を充填施文、透かし下に橋状把手を付す。頸部は無文帯。	加曽利E2式
第24図 PL.9	64	縄文土器 深鉢	1GD3 口縁部破片				粗砂、チャート細礫/ふつう	隆帯による口縁部区画を施し、ワラビ手状隆帯を配す。	加曽利E2式
第24図 PL.9	65	縄文土器 深鉢	1GC2 口縁部破片				粗砂/ふつう	隆帯による口縁部渦巻文、楕円状区画を施し、撚糸文LR縦位充填施文する。	加曽利E2式
第24図 PL.9	66	縄文土器 深鉢	1GD2 口縁部破片				粗砂、輝石/ふつう	隆帯による口縁部渦巻文、楕円状区画を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E2式
第24図 PL.9	67	縄文土器 深鉢	1GC2 口縁部破片				粗砂/ふつう	隆帯による口縁部渦巻文、楕円状区画を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E2式
第24図 PL.9	68	縄文土器 深鉢	1GB2 口縁部破片				粗砂/ふつう	隆帯による口縁部渦巻文、楕円状区画を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E2式
第24図 PL.9	69	縄文土器 深鉢	1GB2、1GC2 口縁部破片				粗砂、赤色粒、輝石/良好	隆帯による口縁部渦巻文、楕円状区画を施し、LR縄文を充填施文する。頸部は無文帯。	加曽利E2式
第24図 PL.10	70	縄文土器 深鉢	1GC2 口縁部破片					No69と同一個体。	加曽利E2式
第24図 PL.10	71	縄文土器 深鉢	1GB2 口縁部破片				粗砂、輝石/ふつう	隆帯による口縁部渦巻文、楕円状区画を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E2式
第24図 PL.10	72	縄文土器 深鉢	1GC2 口縁部破片				粗砂/ふつう	隆帯による口縁部区画を施し、ワラビ手状隆帯を配す。	加曽利E2式
第24図 PL.10	73	縄文土器 深鉢	1GE2 口縁部破片				粗砂/良好	隆帯による口縁部U字状、楕円状区画を施し、RL縄文を充填施文。胴部はRL縄文を地とし、2条沈線による懸垂文を施す。	加曽利E2式
第24図 PL.10	74	縄文土器 深鉢	1GD2 口縁部破片				粗砂、輝石/ふつう	隆帯による口縁部渦巻文、楕円状区画を施し、RL縄文を充填施文する。渦巻文の上位に短沈線列を施す。頸部は無文帯。	加曽利E2式

付表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第24図 PL.10	75	縄文土器 深鉢	1GC2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	隆帯による口縁部区画を施し、RL縄文を充填施文する。頸部は無文帯。	加曽利E2式
第24図 PL.10	76	縄文土器 深鉢	1GC2 口縁部破片					粗砂、輝石/良好	口縁内面肥厚。口縁下に扁平な隆帯を貼付し、1条の沈線をめぐらす。地文にRL縄文を施文。	加曽利E2式
第24図 PL.10	77	縄文土器 深鉢	1GC2 口縁部破片					粗砂、赤色粒/ふつう	沈線を伴う扁平隆帯による口縁部区画を施し、ワラビ手文を伴う斜位隆帯で区切る。区画内は縦位沈線を充填施文する。口縁に突起を付すが、破損しているため形状は不明。頸部は無文帯。	加曽利E2式
第24図 PL.10	78	縄文土器 深鉢	1GD3 口縁部破片					細砂/良好	口縁部に横位3条の沈線をめぐらし、竹管外皮による刺突を交互施文する。以下、LR縄文を施文。	加曽利E2式
第24図 PL.10	79	縄文土器 深鉢	1GC2 口縁部破片					粗砂/ふつう	LR縄文を地文とし、口縁部に横位3条の沈線をめぐらす。	加曽利E2式
第24図 PL.10	80	縄文土器 深鉢	3GY3 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	縦位条線を地文とし、口縁部に2条の横位沈線をめぐらす。	加曽利E2式
第25図 PL.10	81	縄文土器 深鉢	3GY3 口縁部破片					粗砂、チャート細礫、輝石/ふつう	縦位条線を地文とし、口縁部に3条の横位沈線をめぐらす。	加曽利E2式
第25図 PL.10	82	縄文土器 深鉢	1GD3 胴部破片					粗砂、赤色粒、輝石/ふつう	燃糸文Lを縦位施文し、3条の横位沈線をめぐらす。	加曽利E2式
第25図 PL.10	83	縄文土器 深鉢	1GA3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	RL縄文を地文とし、3条沈線による懸垂文を施す。	加曽利E2式
第25図 PL.10	84	縄文土器 深鉢	1GC2 胴部破片					粗砂、赤色粒、輝石/ふつう	無節R1縄文を地文とし、2条沈線による懸垂文、弧線文を施す。	加曽利E2式
第25図 PL.10	85	縄文土器 深鉢	1GC2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	LR縄文を地文とし、3条沈線による連弧状文を施す。	加曽利E2式
第25図 PL.10	86	縄文土器 深鉢	1GB2 胴部破片					粗砂、赤色粒、輝石/ふつう	横位沈線をめぐらして胴部文様帯を区画、LR縄文を地文とし、蛇行懸垂文、羽状沈線を施す。最上位の羽状沈線右末端をワラビ手状にする。	加曽利E2式
第25図 PL.10	87	縄文土器 深鉢	1GC3 胴部破片					粗砂/ふつう	中央を凹凸させた扁平隆帯による懸垂文を施し、縦位沈線を充填施文する。	加曽利E2式
第25図 PL.10	88	縄文土器 深鉢	1GC3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	RL縄文を縦位施文し、2条隆帯による懸垂文を施す。左上端に斜行する隆帯も見える。	加曽利E2式
第25図 PL.10	89	縄文土器 深鉢	1GB2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	LR縄文を縦位施文し、2条隆帯による懸垂文を施す。	加曽利E2式
第25図 PL.10	90	縄文土器 深鉢	1GC2 口辺部破片					粗砂、赤色粒、輝石/ふつう	横位2条隆帯、RL縄文を施す。隆帯は口縁部下位区画と思われる。	加曽利E2式
第25図 PL.10	91	縄文土器 深鉢	1GE2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	口縁下の沈線と隆帯による口縁部楕円状区画、渦巻文を施し、RL縄文を充填施文。胴部は沈線による懸垂文を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E3式
第25図 PL.10	92	縄文土器 深鉢	1GE2 口縁部破片					粗砂、赤色粒/ふつう	口縁下の沈線と隆帯による口縁部楕円状区画を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E3式
第25図 PL.10	93	縄文土器 深鉢	1GB2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	口縁下の沈線と隆帯による口縁部楕円状区画を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E3式
第25図 PL.10	94	縄文土器 深鉢	1GD3 口縁～胴上位破片					粗砂、輝石/ふつう	舌状の突起を付す波状口縁。隆帯による口縁部渦巻文、沈線による楕円状区画を施し、LR縄文を充填施文。胴部は2条沈線による懸垂文を施し、LR縄文を充填施文、蛇行懸垂文を施す。	加曽利E3式
第25図 PL.10	95	縄文土器 深鉢	1GD2 口縁部破片					粗砂/良好	舌状の突起を付す波状口縁。口縁下に沈線をめぐらし、突起下および中間に隆帯による楕円文を配して横位隆帯で連結、楕円文外にRL縄文を縦位充填施文する。胴部は2条沈線による懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第25図 PL.10	96	縄文土器 深鉢	1GB2 口縁～胴上位破片					粗砂/ふつう	舌状の突起を付す波状口縁。口縁下に沈線をめぐらし、突起下および中間に隆帯による楕円文を配して横位隆帯で連結、楕円文外にRL縄文を縦位充填施文する。横位隆帯の中間部から2条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第25図 PL.10	97	縄文土器 深鉢	1GA3、R2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	隆帯による口縁部楕円状区画を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E3式
第25図 PL.10	98	縄文土器 深鉢	1GD2 口縁部破片					粗砂、輝石/良好	隆帯による口縁部楕円状区画を施すが、区画内に縄文は施されない。	加曽利E3式
第25図 PL.10	99	縄文土器 深鉢	1GE2 口縁部破片					粗砂/良好	隆帯による口縁部楕円状区画、3本沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E3式
第26図 PL.10	100	縄文土器 深鉢	1GC3 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	隆帯による口縁部楕円状区画を施し、縦位沈線を充填施文、隆帯下にも縦位沈線を施す。	加曽利E3式
第26図 PL.11	101	縄文土器 深鉢	1GB2 口縁部破片					粗砂、輝石/良好	隆帯による口縁部楕円状区画、2条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E3式
第26図 PL.11	102	縄文土器 深鉢	1GE2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	隆帯による口縁部楕円状区画を施し、縦位条線を充填施文する。	加曽利E3式
第26図 PL.11	103	縄文土器 深鉢	1GD2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	左右非対称の突起を付す波状口縁。隆帯による口縁部楕円状区画を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E3式
第26図 PL.11	104	縄文土器 深鉢	1GB2 口縁部破片					粗砂、輝石/良好	隆帯による口縁部楕円状区画を施し、RL縄文を充填施文、楕円文間に逆S字文を施す。	加曽利E3式
第26図 PL.11	105	縄文土器 深鉢	1GB2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	隆帯による口縁部楕円状区画を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E3式
第26図 PL.11	106	縄文土器 深鉢	1GE2 口縁部破片					粗砂、輝石/良好	隆帯による口縁部楕円状区画を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E3式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第26図 PL.11	107	縄文土器 深鉢	1GC2 口縁～胴中位破片					粗砂、輝石/ふつう	隆帯による口縁部楕円状区画、2条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E3式
第26図 PL.11	108	縄文土器 深鉢	1GC2 口縁部破片					細砂/ふつう	爪状の突起を付す波状口縁。波頂部下に沈線による楕円文を配し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E3式
第26図 PL.11	109	縄文土器 深鉢	1GD2 口縁部破片					粗砂/ふつう	沈線による口縁部楕円状区画を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E3式
第26図 PL.11	110	縄文土器 深鉢	3GY3 口縁部破片					粗砂、赤色粒/ふつう	隆帯による口縁部楕円状区画を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E3式
第26図 PL.11	111	縄文土器 深鉢	1GE2 口縁部破片					粗砂/ふつう	沈線による口縁部楕円状区画、沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E3式
第26図 PL.11	112	縄文土器 深鉢	1GB2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	縦位条線を地文とし、横長の矩形文、下位に矩形の懸垂文を施し、文様外を磨り消す。	加曽利E3式
第26図 PL.11	113	縄文土器 深鉢	1GE2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	2条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第26図 PL.11	114	縄文土器 深鉢	1GE2 胴部破片					粗砂/ふつう	2条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第26図 PL.11	115	縄文土器 深鉢	1GE2 胴部破片					粗砂、輝石/良好	2条沈線による口縁部楕円状区画、胴部懸垂文を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E3式
第26図 PL.11	116	縄文土器 深鉢	1GA3 口辺部破片					細砂、輝石/ふつう	隆帯による口縁部楕円状区画、3本沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E3式
第26図 PL.11	117	縄文土器 深鉢	1GG1 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	2条沈線による胴部懸垂文を施し、LR縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第26図 PL.11	118	縄文土器 深鉢	1GB2 胴部破片					粗砂、輝石/良好	2条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第27図 PL.11	119	縄文土器 深鉢	1GB2 胴部破片					粗砂、赤色粒、輝石/ふつう	2条沈線による胴部懸垂文を施し、複節LRL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第27図 PL.11	120	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	燃糸文L を縦位施文し、2条沈線による胴部懸垂文を施文、沈線間を磨り消す。	加曽利E3式
第27図 PL.11	121	縄文土器 深鉢	1GC3 胴部破片					粗砂、輝石/良好	2条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第27図 PL.11	122	縄文土器 深鉢	1GB2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	2条沈線による胴部懸垂文を施し、LR縄文を充填施文する。	加曽利E3式
第27図 PL.11	123	縄文土器 深鉢	1GE2 胴部破片						№119と同一個体。	加曽利E3式
第27図 PL.11	124	縄文土器 深鉢	1GD2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	2条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第27図 PL.11	125	縄文土器 深鉢	1GC2 胴部破片					粗砂、輝石/良好	RL縄文を縦位全面施文し、2条沈線による懸垂文を施文、沈線間を磨り消す。	加曽利E3式
第27図 PL.12	126	縄文土器 深鉢	1GD2、D3 胴部破片					粗砂、赤色粒/ふつう	2条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。縄文帯と無文帯の幅がほぼ同じになる。	加曽利E3式
第27図 PL.11	127	縄文土器 深鉢	1GE2 胴部破片					細砂/ふつう	2条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第27図 PL.12	128	縄文土器 深鉢	1GE2 胴部破片					粗砂/ふつう	2条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第27図 PL.12	129	縄文土器 深鉢	1GE2 胴部破片					粗砂/良好	2条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第27図 PL.12	130	縄文土器 深鉢	1GB2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	2条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第27図 PL.12	131	縄文土器 深鉢	1GC3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	3条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第27図 PL.12	132	縄文土器 深鉢	1GE2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	3条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第27図 PL.12	133	縄文土器 深鉢	1GE2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	3条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第27図 PL.12	134	縄文土器 深鉢	1GD2 胴部破片					細砂/ふつう	3条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第27図 PL.12	135	縄文土器 深鉢	1GA3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	沈線による懸垂文、U字状、逆U字状モチーフを施し、無節Lr縄文を充填施文する。	加曽利E3式
第27図 PL.12	136	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂/良好	3条沈線による胴部懸垂文を施し、LR縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第27図 PL.12	137	縄文土器 深鉢	1GB3 胴部破片					粗砂、輝石/良好	2条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文、蛇行懸垂文を施す。	加曽利E3式
第27図 PL.12	138	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂、赤色粒、輝石/ふつう	2条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文、ワラビ手状懸垂文を施す。	加曽利E3式
第27図 PL.12	139	縄文土器 深鉢	1GG1 胴部破片					細砂、赤色粒、輝石/ふつう	2条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文、ワラビ手状懸垂文を施す。	加曽利E3式
第27図 PL.12	140	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂、赤色粒/良好	2条沈線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文、蛇行懸垂文を施す。	加曽利E3式
第28図 PL.12	141	縄文土器 深鉢	1GD2 口縁部破片					粗砂/ふつう	隆帯をめぐらして口縁部無文帯を区画。以下、2条隆帯による楕円状モチーフを施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E3式
第28図 PL.12	142	縄文土器 深鉢	1GD3、E3 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	波状口縁。隆帯による渦巻状モチーフを施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E3式
第28図 PL.12	143	縄文土器 深鉢	1GE2 胴部破片					細砂、輝石/ふつう	隆線による渦巻状モチーフを施し、文様内外にRL縄文を充填施文する。	加曽利E4式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第28図 PL.12	144	縄文土器 深鉢	1GB2、D2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	低平な隆帯による楕円状、逆U字状懸垂文を施し、RL縄文を充填施文する。無文帯はない。	加曽利E3式
第28図 PL.12	145	縄文土器 深鉢	1GD3 口縁部破片					粗砂、赤色粒、輝石/ふつう	波状口縁。隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、2条隆線による弧状モチーフを施し、文様内外にRL縄文を充填施文する。	中期後葉
第28図 PL.12	146	縄文土器 深鉢	1GB3 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	横位隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、隆線による逆U字状モチーフを施し、文様内外にLR縄文を充填施文する。	中期後葉
第28図 PL.12	147	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂/良好	隆帯による楕円状区画を横位に連ね、RL縄文を充填施文する。	加曽利E3式
第28図 PL.12	148	縄文土器 深鉢	1GC2 口縁部破片					粗砂/良好	橋状突起を付す波状口縁。口縁に沿って隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画､突起下端から弧状の隆線を垂下させ、文様内外にRL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第28図 PL.12	149	縄文土器 深鉢	1GA3、C2 口縁部破片						№147と同一個体。横位隆線下から逆U字状隆線を垂下させる。	加曽利E4式
第28図 PL.12	150	縄文土器 深鉢	1GD3 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	波状口縁。口縁に沿って隆線をめぐらして幅狭な口縁部無文帯を区画、以下、隆線による懸垂文を施し、RL縄文を充填施文する。無文帯はない。波頂部下を肥厚させる。	加曽利E4式
第28図 PL.12	151	縄文土器 深鉢	1GB3 口辺部破片					粗砂、輝石、石英/ふつう	横位隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、隆線による懸垂文を施し､LR縄文を充填施文する。無文帯はない。	加曽利E4式
第28図 PL.13	152	縄文土器 深鉢	1GD3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	隆線による懸垂文を施し、LR縄文を充填施文する。無文帯はない。	加曽利E4式
第28図 PL.12	153	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	波状口縁。隆帯をめぐらして幅狭な口縁部無文帯を区画、以下、2条沈線による逆U字状モチーフを施し、RL縄文を充填施文、モチーフ間にワラビ手状懸垂文を施す。	加曽利E4式
第28図 PL.12	154	縄文土器 深鉢	1GD2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	波状口縁。横位隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、沈線による逆U字状モチーフを施し、文様外にRL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第28図 PL.13	155	縄文土器 深鉢	1GE2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	波状口縁。横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、沈線による逆U字状モチーフを施し、文様外にRL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第28図 PL.13	156	縄文土器 深鉢	1GD2 口縁部破片					粗砂、輝石/良好	横位沈線をめぐらして幅狭な口縁部無文帯を区画、以下、沈線による逆U字状モチーフを施し、文様外にLR縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第28図 PL.13	157	縄文土器 深鉢	1GB2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、沈線による逆U字状モチーフを施し、文様外にLR縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第29図 PL.13	158	縄文土器 深鉢	1GB3 口縁部破片					粗砂/ふつう	波頂部がワラビ手状となる突起を付す。口縁に沿って1条の沈線、突起下に沈線によるレンズ状モチーフを施し、文様外にRL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第29図 PL.13	159	縄文土器 深鉢	1GD3 口縁部破片						№160と同一個体。波頂部がワラビ手状となる突起を付す。	加曽利E4式
第29図 PL.13	160	縄文土器 深鉢	1GD2、D3 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	波状口縁。口縁に沿って沈線をめぐらし、以下、振幅の大きい波状文を施文、口縁下沈線との区画内にRL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第29図 PL.13	161	縄文土器 深鉢	1GD3 口縁部破片					細砂、輝石/ふつう	波状口縁。口縁に沿って沈線、円形刺突列をめぐらし、以下、沈線による逆U字状モチーフを施文、文様外にRL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第29図 PL.13	162	縄文土器 深鉢	1GA3 口縁部破片					細砂/ふつう	口縁下に円形刺突列をめぐらして横位沈線で区画、以下、沈線による逆U字状モチーフを施し、文様外にRL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第29図 PL.13	163	縄文土器 深鉢	1GD2 口縁部破片					細砂、輝石/ふつう	波状口縁。口縁をくの字状に内屈させ、内屈部に2条の刺突列をめぐらす。屈曲部下は沈線による玉抱き文状のモチーフを施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第29図 PL.13	164	縄文土器 深鉢	1GD2 口縁部破片					粗砂、輝石、石英/良好	波状口縁。口縁部を肥厚させて2条の刺突列帯を区画、以下、RL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第29図 PL.13	165	縄文土器 深鉢	1GB3 口縁部破片					粗砂、赤色粒/ふつう	横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、沈線によるレンズ状文を施し、文様外に縄文を施文しているようだが、器面摩滅により判然としない。	加曽利E4式
第29図 PL.13	166	縄文土器 深鉢	1GD2 口縁部破片					細砂/ふつう	波状口縁。波頂部下を突出させ、右方向に沈線を入れることで､C字状の突起を作出｡2条沈線による逆U字状モチーフを施し、文様外にRL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第29図 PL.13	167	縄文土器 深鉢	1GB2 口縁部破片					粗砂/ふつう	緩やかな波状口縁。口縁に沿って沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、2条沈線による逆U字状モチーフを施し、文様外にLR縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第29図 PL.13	168	縄文土器 深鉢	1GB2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	緩やかな波状口縁。口縁に沿って沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、2条沈線による逆U字状モチーフを施し、文様外にLR縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第29図 PL.13	169	縄文土器 深鉢	1GD3、E3 口縁部破片					細砂/ふつう	波状口縁。口縁に沿って沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、沈線による玉抱き文状のモチーフを施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第29図 PL.13	170	縄文土器 深鉢	1GD3 口縁部破片					粗砂/ふつう	緩やかな波状口縁。口縁に沿って沈線をめぐらして幅狭な口縁部無文帯を区画、以下、細長い楕円状文を縦位、左右弧状に配し、文様外にRL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第29図 PL.13	171	縄文土器 深鉢	1GD2 口縁部破片					粗砂、赤色粒/ふつう	波状口縁。2条沈線による渦巻状モチーフを施し、文様外にRL縄文を充填施文する。	加曽利E4式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第29図 PL.13	172	縄文土器 深鉢	1GD2 口縁部破片					粗砂、輝石/良好	横位沈線をめぐらして幅狭な口縁部無文帯を区画、以下、沈線による懸垂文、レンズ状モチーフを施す。施文軸傾。	加曽利E4式
第29図 PL.13	173	縄文土器 深鉢	1GC2 口縁部破片					粗砂、輝石/良好	横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、沈線による斜行する懸垂文を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第29図 PL.13	174	縄文土器 深鉢	1GD3 口縁部破片					粗砂/ふつう	横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、沈線による懸垂文を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第29図 PL.13	175	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁～胴中位破片					粗砂、輝石/ふつう	横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、２条沈線による逆Ｕ字状モチーフを施し、文様外にRL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第29図 PL.13	176	縄文土器 深鉢	1GC2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、沈線によるハの字状の懸垂文を施し、０段多条LR縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第29図 PL.13	177	縄文土器 深鉢	1GD3 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、RL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第29図 PL.13	178	縄文土器 深鉢	1GD3 口縁部破片					細砂/ふつう	口縁部に１条の横位沈線をめぐらし、RL縄文を全面施文する。沈線上位を無文帯とせず、縄文帯とする。	中期後葉
第29図 PL.13	179	縄文土器 深鉢	1GD2 口縁部破片					粗砂、輝石/良好	口縁部に１条の横位沈線をめぐらし、０段多条LR縄文を全面施文する。沈線上位を無文帯とせず、縄文帯とする。	中期後葉
第29図 PL.13	180	縄文土器 深鉢	1GD2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	内耳帯様の口縁部形態を呈す。０段多条RL縄文を全面施文する。	中期後葉
第30図 PL.13	181	縄文土器 深鉢	1GD2 胴部破片					細砂、輝石/良好	沈線によるＵ字状、レンズ状モチーフを施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E4式
第30図 PL.13	182	縄文土器 深鉢	1GD3 胴部破片					粗砂/ふつう	沈線によるＵ字状、逆Ｕ字状モチーフを施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E4式
第30図 PL.13	183	縄文土器 深鉢	1GA3 胴部破片					細砂/ふつう	沈線による逆Ｕ字状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第30図 PL.13	184	縄文土器 深鉢	1GD2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	沈線によるＵ字状モチーフを施し、LR縄文を縦位充填施文する。	加曽利E4式
第30図 PL.13	185	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					細砂/良好	沈線によるＵ字状モチーフを施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E4式
第30図 PL.13	186	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					細砂/ふつう	沈線による逆Ｕ字状モチーフを施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E4式
第30図 PL.13	187	縄文土器 深鉢	1GD2 胴部破片					粗砂/良好	沈線による逆Ｕ字状モチーフを施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第30図 PL.13	188	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	沈線による弧状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第30図 PL.14	189	縄文土器 深鉢	1GD2 胴部破片					粗砂、赤色粒、輝石/ふつう	沈線による弧状モチーフを施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第30図 PL.14	190	縄文土器 深鉢	1GB3 胴部破片					細砂、輝石/ふつう	沈線によるＵ字状、逆Ｕ字状モチーフを施し、LR縄文を縦位充填施文する。	加曽利E4式
第30図 PL.14	191	縄文土器 深鉢	1GB2 胴部破片					粗砂、輝石/良好	沈線による懸垂文、Ｕ字状モチーフを施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E4式
第30図 PL.14	192	縄文土器 深鉢	1GC2 胴部破片					粗砂/ふつう	２条沈線によるＵ字状、単沈線による逆Ｕ字状モチーフを施し、文様外にRL縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第30図 PL.14	193	縄文土器 深鉢	1GC3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	２条沈線による懸垂文、レンズ状文を施し、文様外にLR縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第30図 PL.14	194	縄文土器 深鉢	1GA3、B3 胴部破片					粗砂/ふつう	帯状沈線による渦巻文を施し、LR縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第30図 PL.14	195	縄文土器 深鉢	1GA3 胴部破片					細砂/ふつう	沈線によるＵ字状、帯状沈線による弧状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	加曽利E4式
第30図 PL.14	196	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	２単位の橋状突起を付す波状口縁。口縁に沿って細沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、LR縄文を全面施文する。	加曽利E4式
第30図 PL.17	197	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片						No196と同一個体。突起ではない波頂部で双頭状を呈す。双頭の頂部から細沈線が垂する。	加曽利E4式
第30図 PL.14	198	縄文土器 深鉢	1GB3、C2、E2 口縁部破片					粗砂、チャート細礫/ふつう	波状口縁。口縁に沿って沈線をめぐらし、以下、LR縄文を全面施文する。波頂部下に橋状把手を付す。	加曽利E4式
第31図 PL.14	199	縄文土器 深鉢	1GC2 口縁部破片					粗砂/ふつう	円柱状の突起を付す波状口縁で、突起上端を凹ます。突起部から口縁に沿って隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、２条隆線による逆Ｕ字状モチーフを施し、文様外にRL縄文を充填施文する。	後期加曽利E系
第31図 PL.14	200	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片					粗砂、チャート細礫、輝石/ふつう	横位隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、２条隆線による逆Ｕ字状モチーフを施し、文様外にLR縄文を充填施文する。Ｕ字の上端部を突出させる。	後期加曽利E系
第31図 PL.14	201	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片					粗砂/ふつう	横位隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、２条隆線による逆Ｕ字状モチーフを施し、文様外にLR縄文を充填施文する。	後期加曽利E系
第31図 PL.14	202	縄文土器 深鉢	1GD2 口縁～胴中位破片					粗砂/ふつう	横位隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、２条隆線による斜行する懸垂文を施し、RL縄文を充填施文する。２条隆線は逆Ｕ字状になるか。	後期加曽利E系
第31図 PL.14	203	縄文土器 深鉢	1GB3 胴部破片					粗砂/ふつう	２条隆線による弧状モチーフを施し、文様外にRL縄文を充填施文する。	後期加曽利E系
第31図 PL.14	204	縄文土器 深鉢	1GB3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	２条隆線による弧状モチーフを施し、文様外にRL縄文を充填施文する。	後期加曽利E系

付表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第31図 PL.14	205	縄文土器 深鉢	3GY3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	2条と1条の隆線による楕円状モチーフを施し、RL縄文を充填施文する。	後期加曽利E系
第31図 PL.14	206	縄文土器 深鉢	1GB3 口縁部破片					粗砂、白色粒/ふつう	緩やかな波状口縁。横位隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画。以下、隆線による逆U字状モチーフを施し、文様外にLR縄文を充填施文する。横位隆線の波頂部下を突出させる。	後期加曽利E系
第31図 PL.14	207	縄文土器 深鉢	1GE2 口縁部破片					細砂/良好	口縁が短く外反する。横位隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、隆線、沈線によるモチーフを施し、RL縄文を充填施文する。	中期末葉～後期初頭
第31図 PL.14	208	縄文土器 深鉢	1GC2 口縁部破片					粗砂/ふつう	横位隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、隆線による逆U字状モチーフを施し、文様外にLR縄文を充填施文する。U字の上端部を突出させる。	後期加曽利E系
第31図 PL.14	209	縄文土器 深鉢	1GB3 口縁～胴中位破片					粗砂、チャート細礫、赤色粒/ふつう	橋状突起を付す波状口縁。隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、隆線による玉抱き文状のモチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	後期加曽利E系
第31図 PL.14	210	縄文土器 深鉢	1GA3 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	横位隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画。以下、隆線による逆U字状モチーフを施し、文様内にRL縄文を充填施文する。	後期加曽利E系
第31図 PL.15	211	縄文土器 深鉢	1GA3 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	横位隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画。以下、隆線による逆U字状モチーフを施し、文様内にLR縄文を充填施文する。	後期加曽利E系
第31図 PL.15	212	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片					粗砂/ふつう	横位隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画。以下、隆線による逆U字状モチーフを施し、文様外にLR縄文を充填施文する。	後期加曽利E系
第31図 PL.15	213	縄文土器 深鉢	1GF1 胴部破片					粗砂、赤色粒/ふつう	隆線によるU字状、逆U字状モチーフを施し、LR縄文を縦位充填施文する。	後期加曽利E系
第31図 PL.15	214	縄文土器 深鉢	1GB3 胴部破片					粗砂/ふつう	2条隆線による]字状モチーフを施し、文様外にRL縄文を充填施文する。	後期加曽利E系
第32図 PL.15	215	縄文土器 深鉢	1GD2 胴部破片					粗砂/ふつう	隆線によるU字状モチーフを施し、RL縄文を充填施文する。	後期加曽利E系
第32図 PL.15	216	縄文土器 深鉢	1GF1 胴部破片					粗砂、赤色粒、輝石/ふつう	隆線による懸垂文、U字状モチーフを施し、LR縄文を縦位充填施文する。	後期加曽利E系
第32図 PL.15	217	縄文土器 深鉢	1GB2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	隆線による弧状モチーフを施し、RL縄文を縦位充填施文する。	後期加曽利E系
第32図 PL.15	218	縄文土器 深鉢	1GE2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	隆線によるU字状、逆U字状モチーフを施し、RL縄文を縦位充填施文する。	後期加曽利E系
第32図 PL.15	219	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂/ふつう	隆線による弧状モチーフを施し、RL縄文を縦位充填施文する。	後期加曽利E系
第32図 PL.15	220	縄文土器 深鉢	1GD3 胴部破片					粗砂/良好	隆線による弧状モチーフを施し、RL縄文を縦位充填施文する。	後期加曽利E系
第32図 PL.15	221	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂/ふつう	2条隆線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	後期加曽利E系
第32図 PL.15	222	縄文土器 鉢	1GD3 口縁部破片					粗砂/ふつう	隆線による弧状モチーフを施し、横位の橋状把手を付す。口縁下の横位隆線部に上下に円孔を穿つ。	中期後葉
第32図 PL.15	223	縄文土器 深鉢	1GC3 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	橋状突起を付す波状口縁。突起下端から隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、RL縄文を全面施文する。	後期加曽利E系
第32図 PL.15	224	縄文土器 深鉢	1GB3、E2、E3 口縁～胴上位破片					粗砂、チャート細礫/ふつう	横位隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、隆線による懸垂文を施し、LR縄文を充填施文する。	中期末葉～後期初頭
第32図 PL.15	225	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片					粗砂、輝石、石英/ふつう	横位隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、LR縄文を施す。	中期末葉～後期初頭
第32図 PL.15	226	縄文土器 深鉢	1GD3 口縁部破片					粗砂/ふつう	横位隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、RL縄文を充填施文する。	中期末葉～後期初頭
第32図 PL.15	227	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片					細砂/ふつう	横位隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、隆線による懸垂文を施し、RL縄文を充填施文する。	中期末葉～後期初頭
第32図 PL.15	228	縄文土器 深鉢	1GE2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	口縁口縁のようだ。横位隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、隆線による懸垂文を施し、RL縄文を充填施文する。	中期末葉～後期初頭
第32図 PL.15	229	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片					粗砂/ふつう	横位隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、隆線による懸垂文を施し、RL縄文を充填施文する。	中期末葉～後期初頭
第32図 PL.15	230	縄文土器 深鉢	1GD2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	横位隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、LR縄文を施す。	中期末葉～後期初頭
第33図 PL.15	231	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂/ふつう	隆線による胴部懸垂文を施し、RL縄文を充填施文する。	中期末葉～後期初頭
第33図 PL.15	232	縄文土器 深鉢	1GB2 胴部破片					粗砂、チャート細礫、輝石/ふつう	隆線による胴部懸垂文を施し、LR縄文を充填施文する。	中期末葉～後期初頭
第33図 PL.15	233	縄文土器 深鉢	1GG1 胴部破片					粗砂/良好	隆線による胴部懸垂文を施し、LR縄文を充填施文する。	中期末葉～後期初頭
第33図 PL.16	234	縄文土器 深鉢	3GY3 胴部破片					粗砂/ふつう	隆線による胴部懸垂文を施す。内面に漆付着。	中期末葉～後期初頭
第33図 PL.16	235	縄文土器 鉢	1GE3 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	短小円柱状突起を付す波状口縁で、上端を凹ます。突起下に橋状把手を付し、上面にS字状文を施文。把手下に横位沈線をめぐらす。	加曽利E3式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第33図 PL.16	236	縄文土器 鉢	1GE2 口縁部破片					粗砂、赤色粒/ふつう	横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、弧状の縦位蛇行条線を充填施文する。	加曽利E3式
第33図 PL.16	237	縄文土器 鉢	1GE2 口縁部破片					粗砂/ふつう	横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、弧状の縦位短条線を充填施文する。	中期後葉
第33図 PL.16	238	縄文土器 鉢	1GD2 口縁部破片					粗砂/ふつう	横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、縦位条線を全面施文する。内面漆付着。	加曽利E3式
第33図 PL.16	239	縄文土器 鉢	1GB3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	縦位条線を充填施文する。内面漆塗彩。	中期後葉
第33図 PL.16	240	縄文土器 鉢	1GE2 口縁部破片					粗砂/ふつう	横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、縦位条線を全面施文する。	加曽利E3式
第33図 PL.16	241	縄文土器 鉢	1GD2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、縦位条線を全面施文する。	加曽利E3式
第33図 PL.16	242	縄文土器 鉢	1GB2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	口縁部に1条の横位沈線をめぐらす。	加曽利E3式
第33図 PL.16	243	縄文土器 深鉢	1GE2 口縁部破片					粗砂/ふつう	口縁部を若干肥厚させて無文帯を区画、以下、縦位条線を全面施文する。	中期後葉
第33図 PL.16	244	縄文土器 深鉢	1GD2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	口縁部を若干肥厚させて無文帯を区画、以下、縦位条線を全面施文する。	中期後葉
第33図 PL.16	245	縄文土器 深鉢	1GD2 口縁～胴上位破片					粗砂、赤色粒、輝石/良好	口縁がくの字状に外反する。区画文はない点口縁部を無文帯とし、以下、縦位蛇行条線を全面施文する。	中期後葉
第34図 PL.16	246	縄文土器 両耳壺	1GC2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	隆帯をめぐらして口縁部無文帯を区画、把手部に隆帯による楕円状区画を施す。把手上面にワラビ手状の沈線を施文。口縁部無文帯を除き、RL縄文を施す。	加曽利E3式
第34図 PL.16	247	縄文土器 両耳壺	1GD3 口縁～胴中位破片					粗砂、チャート、細礫、輝石/ふつう	隆帯による枠状区画を施し、RL縄文を縦位充填施文、以下、縦位条線を全面施文する。把手は上端をやや張り出させ、上面に楕円文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第34図 PL.16	248	縄文土器 両耳壺	1GC2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	幅狭な口縁部無文帯、隆帯をめぐらして幅狭な文様帯を区画、橋状把手を付し、文様帯下にRL縄文を施す。把手上面はやや凹む。	中期後葉
第34図 PL.16	249	縄文土器 両耳壺	1GB3 胴部破片					粗砂/ふつう	隆帯をめぐらして文様帯を区画、橋状把手を付し、左右の上下端を弧状に隆帯でつなぐ。把手は上端部をやや突出させ、上面をワラビ手状に凹ます。文様帯下に縦位条線を施す。	加曽利E3式
第34図 PL.16	250	縄文土器 両耳壺	1GB3 胴部破片					粗砂、赤色粒/ふつう	隆帯をめぐらして文様帯を区画、橋状把手を付し、左右の上下端を弧状に隆帯でつなぐ。把手は上端部を突出させ、中央を凹ます。文様帯内、文様帯下全面にLR縄文を施す。	加曽利E3式
第34図 PL.16	251	縄文土器 両耳壺	1GB3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	橋状把手を付し、左右の上下端を弧状に隆帯でつなぐ。口縁部無文帯、把手内側を除き、LR縄文を全面施文する。	中期後葉
第34図 PL.16	252	縄文土器 両耳壺	1GE2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	隆帯をめぐらして文様帯を区画、橋状把手を付し、左右の上下端を弧状に隆帯でつなぐ。把手は上端部を肥厚させる。口縁部無文帯、把手内側を除き、RL縄文を全面施文する。	中期後葉
第34図 PL.16	253	縄文土器 両耳壺	1GB3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	橋状把手を付し、左右の上下端を弧状に隆帯でつなぐ。弧状隆帯上部から横位に、把手下端からハの字状に隆帯をめぐらして文様帯を区画しているようだ。口縁部無文帯、把手内側を除き、RL縄文を全面施文する。	加曽利E4式か
第34図 PL.17	254	縄文土器 両耳壺	1GA3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	橋状把手を付し、左右の上下端を弧状に隆帯でつなぐ。把手上面に隆起線による楕円文を施し、部分的に太沈線でなぞる。口縁部無文帯、把手内側を除き、RL縄文を全面施文する。	中期後葉
第34図 PL.16	255	縄文土器 両耳壺	1GC2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	橋状把手を付し、左右の上下端を弧状に沈線でつなぐ。弧状沈線間を除き、LR縄文を全面施文する。	加曽利E4式か
第34図 PL.16	256	縄文土器 両耳壺	1GE2 口縁～胴上位破片					粗砂、輝石/ふつう	隆帯によるワラビ手文、楕円状区画を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E3式
第34図 PL.17	257	縄文土器 両耳壺	1GD3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	隆帯による楕円状区画を施し、RL縄文を充填施文、以下、縦位条線を全面施文する。	加曽利E3式
第35図 PL.17	258	縄文土器 浅鉢	1GC2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	くの字状に強く内屈。屈曲部上位に隆帯をめぐらして文様帯を区画し、区画内に隆帯によるモチーフ、RL縄文を施す。端部に縦位短沈線をめぐらす。	加曽利E2式
第35図 PL.17	259	縄文土器 浅鉢	1GC3、D2 胴部破片					粗砂、赤色粒/良好	くの字状に内屈。屈曲部上位に隆帯をめぐらして文様帯を区画し、区画内にワラビ手状沈線を伴う隆帯、沈線によるモチーフを施す。端部に刺突をめぐらす。	加曽利E2式
第35図 PL.17	260	縄文土器 浅鉢	1GC2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	くの字状に内屈。屈曲部上位に隆帯による渦巻文を施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E2式
第35図 PL.17	261	縄文土器 浅鉢	1GC2 胴部破片					粗砂、輝石/良好	くの字状に内屈。屈曲部上位に隆帯による渦巻文を施し、縦位沈線を充填施文する。	加曽利E2式
第35図 PL.17	262	縄文土器 浅鉢	1GE2 胴部破片					細砂/ふつう	くの字状に強く内屈。屈曲部上位に隆帯によるモチーフを施し、RL縄文を充填施文する。	加曽利E2式
第35図 PL.17	263	縄文土器 浅鉢	1GB2 胴部破片					粗砂/良好	くの字状に強く内屈。屈曲部上位に円状の沈線を施し、端部に斜位の短沈線をめぐらす。	中期後葉
第35図 PL.17	264	縄文土器 浅鉢	1GB2 胴部破片					細砂/ふつう	くの字状に強く内屈。屈曲部上位に隆帯をめぐらして文様帯を区画し、区画内にRL縄文を縦位充填施文する。	中期後葉
第35図 PL.17	265	縄文土器 浅鉢	1GC2 口縁部破片					粗砂、赤色粒、輝石/ふつう	口縁が内湾する。無文。	中期後葉

付表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第35図 PL.17	266	縄文土器 浅鉢	1GC2 口縁部破片					粗砂、赤色粒、輝石/良好	口縁が内湾する。無文。	中期後葉
第35図 PL.17	267	縄文土器 浅鉢	3GY3 口縁部破片					細砂/ふつう	口縁内外面を突出させて口唇部平坦面を作出、ワラビ手状沈線と2条の沈線をめぐらす。	中期後葉
第35図 PL.17	268	縄文土器 浅鉢	1GC2 口縁部破片					粗砂/ふつう	口縁外面を肥厚させ、くの字状に外屈させる。無文。内面に赤彩の痕跡。	中期後葉
第35図 PL.17	269	縄文土器 浅鉢	1GC2 口縁部破片					粗砂、赤色粒、輝石/ふつう	口縁部をくの字状に外屈させる。無文。	中期後葉
第35図 PL.17	270	縄文土器 浅鉢	1GC2 口縁部破片					粗砂、赤色粒、輝石/ふつう	口縁部に1条の沈線をめぐらす。	中期後葉
第35図 PL.17	271	縄文土器 浅鉢	1GC2 口縁部破片						№270と同一個体。	中期後葉
第35図 PL.17	272	縄文土器 深鉢	1GG1 口縁部破片					粗砂/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	称名寺Ⅰ式
第35図 PL.17	273	縄文土器 深鉢	1GB3 口縁部破片					粗砂/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	称名寺Ⅰ式
第35図 PL.17	274	縄文土器 深鉢	2GH23 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	称名寺Ⅰ式
第35図 PL.17	275	縄文土器 深鉢	1GF1 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	波状口縁。帯状沈線によるモチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	称名寺Ⅰ式
第35図 PL.17	276	縄文土器 深鉢	1GE2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	帯状沈線による丁字状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	称名寺Ⅰ式
第35図 PL.17	277	縄文土器 深鉢	埋土 胴部破片					粗砂/ふつう	帯状沈線による横位、丁字状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	称名寺Ⅰ式
第35図 PL.17	278	縄文土器 深鉢	1GE2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	帯状沈線による鉤先状などのモチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	称名寺Ⅰ式
第35図 PL.17	279	縄文土器 深鉢	1GR2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	縦位帯状沈線を施し、RL縄文を充填施文する。	称名寺Ⅰ式
第35図 PL.17	280	縄文土器 深鉢	1GD3 口縁部破片					細砂/良好	波頂部の突起。扁平な三日月状を呈す。	称名寺式
第35図 PL.17	281	縄文土器 深鉢	1GI3 口縁部破片					細砂/良好	波頂部の突起。	称名寺式
第35図 PL.17	282	縄文土器 深鉢	1GE2 口縁部破片					細砂、赤色粒/ふつう	波頂部の突起。波頂部内面に環状隆帯を付し、円形刺突、沈線を施文、側面に透かしを入れる。	称名寺式
第35図 PL.17	283	縄文土器 深鉢	1GA3 口縁部破片					粗砂/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式
第36図 PL.17	284	縄文土器 深鉢	1GA3 口縁部破片					細砂、輝石/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式
第36図 PL.17	285	縄文土器 深鉢	1GB3 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式
第36図 PL.17	286	縄文土器 深鉢	1GB3 口縁部破片						№285と同一個体。	称名寺Ⅱ式
第36図 PL.17	287	縄文土器 深鉢	2GH24 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式
第36図 PL.18	288	縄文土器 深鉢	1GE2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式
第36図 PL.18	289	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式
第36図 PL.18	290	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式
第36図 PL.18	291	縄文土器 深鉢	1GC3 胴部破片					粗砂/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式
第36図 PL.18	292	縄文土器 深鉢	1GB2 胴部破片					細砂/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式
第36図 PL.18	293	縄文土器 深鉢	1GG1 胴部破片					細砂、輝石/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式
第36図 PL.18	294	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式
第36図 PL.18	295	縄文土器 深鉢	埋土 胴部破片					粗砂、赤色粒/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式
第36図 PL.18	296	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。列点を施文しない箇所も見られる。	称名寺Ⅱ式
第36図 PL.18	297	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式
第36図 PL.18	298	縄文土器 深鉢	埋土 胴部破片					細砂/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式
第36図 PL.18	299	縄文土器 深鉢	1GC3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式
第36図 PL.18	300	縄文土器 深鉢	1GA3 胴部破片					粗砂/良好	帯状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式
第36図 PL.18	301	縄文土器 深鉢	1GE2 口縁部破片					細砂/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、櫛歯状刺突を充填施文する。	称名寺Ⅱ式
第36図 PL.18	302	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片					細砂/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、櫛歯状刺突を充填施文する。	称名寺Ⅱ式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第36図 PL.18	303	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					細砂、赤色粒/ふつう	撚状沈線によるモチーフを施し、櫛歯状刺突を充填施文する。	称名寺Ⅱ式
第36図 PL.18	304	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂/ふつう	撚状沈線によるモチーフを施し、文様外に縦位短条線を充填施文する。	後期初頭
第36図 PL.18	305	縄文土器 深鉢	1GB3 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	撚状沈線によるモチーフを施す。	称名寺Ⅱ式
第36図 PL.18	306	縄文土器 深鉢	1GF1 口縁部破片					粗砂/ふつう	沈線によるモチーフを施す。	称名寺Ⅱ式
第37図 PL.18	307	縄文土器 深鉢	1GE2 口縁部破片					粗砂/良好	波状口縁。撚状沈線によるモチーフを施す。	称名寺Ⅱ式
第37図 PL.18	308	縄文土器 深鉢	1GB3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	撚状沈線によるモチーフを施す。	称名寺Ⅱ式
第37図 PL.18	309	縄文土器 深鉢	1GC3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	撚状沈線によるモチーフを施す。	称名寺Ⅱ式
第37図 PL.18	310	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	撚状沈線によるモチーフを施す。	称名寺Ⅱ式
第37図 PL.18	311	縄文土器 深鉢	1GF1 胴部破片					細砂/ふつう	撚状沈線によるモチーフを施し、刺突を伴う円形貼付文を付す。	称名寺Ⅱ式～堀之内1式
第37図 PL.18	312	縄文土器 深鉢	1GF1 胴部破片					粗砂/ふつう	撚状沈線によるモチーフを施し、刺突を伴う円形貼付文を付す。	称名寺Ⅱ式～堀之内1式
第37図 PL.18	313	縄文土器 深鉢	2GH25 口縁部破片					粗砂/ふつう	口縁外面をくの字状に肥厚させて横位沈線を施文、以下、撚状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式～堀之内1式
第37図 PL.19	314	縄文土器 深鉢	2GH25 口縁部破片					粗砂/ふつう	口縁外面をくの字状に肥厚させて円形刺突、横位沈線を施文、以下、撚状沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式～堀之内1式
第37図 PL.19	315	縄文土器 深鉢	1GB3、D3 口縁部破片					粗砂/ふつう	口縁部をくの字状に短く内屈させ、撚状沈線をめぐらして列点を充填施文。撚状沈線は周回せず長楕円状に閉じ、間に上下2個の円形刺突を配す。以下、沈線によるモチーフ、列点を施す。	称名寺Ⅱ式～堀之内1式
第37図 PL.19	316	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片					粗砂、赤色粒/ふつう	口縁外面をくの字状に内屈させて円形刺突をめぐらし、以下、沈線によるモチーフを施す。	称名寺Ⅱ式～堀之内1式
第37図 PL.19	317	縄文土器 深鉢	1GF3 口縁部破片					粗砂、赤色粒、輝石/ふつう	口縁外面をくの字状に内屈させて円形刺突をめぐらし、以下、沈線によるモチーフ、列点を施す。	称名寺Ⅱ式～堀之内1式
第37図 PL.19	318	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片					細砂/ふつう	口縁部をくの字状に短く内屈させ、撚状沈線をめぐらして列点を充填施文、以下、沈線によるモチーフ、列点を施す。	称名寺Ⅱ式～堀之内1式
第37図 PL.19	319	縄文土器 深鉢	2GH25 口縁部破片					細砂/良好	口縁外面をくの字状に内屈させて円形刺突をめぐらす。	称名寺Ⅱ式～堀之内1式
第37図 PL.19	320	縄文土器 深鉢	2GH25 口縁部破片					粗砂、赤色粒、輝石、ふつう	口縁外面をくの字状に内屈させて円形刺突をめぐらす。	称名寺Ⅱ式～堀之内1式
第37図 PL.19	321	縄文土器 深鉢	2GH25 口縁部破片					粗砂/ふつう	口縁外面をくの字状に内屈させて円形刺突をめぐらす。	称名寺Ⅱ式～堀之内1式
第37図 PL.19	322	縄文土器 深鉢	1GE2 口縁部破片					粗砂/ふつう	口縁外面をくの字状に内屈させて円形刺突をめぐらし、以下、沈線によるモチーフを施す。	称名寺Ⅱ式～堀之内1式
第38図 PL.19	323	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部破片					粗砂/ふつう	口縁外面をくの字状に肥厚させ、円形刺突をめぐらす。口頭部は横位ナデ状の凹凸目立つ。	堀之内1式
第38図 PL.19	324	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片					粗砂/ふつう	口縁部をくの字状に内屈させ、円形刺突を中心に対弧文、沈線を施す。口頭部は斜位のナデ状の凹凸を顕著に残す。	堀之内1式
第38図 PL.19	325	縄文土器 深鉢	1GH1 口縁部破片					粗砂/良好	波状口縁。波頂部下に円形刺突を施して沈線を円く沿わせ、脇に沈線をめぐらす。	堀之内1式
第38図 PL.19	326	縄文土器 深鉢	1GG2 口縁部破片					粗砂/ふつう	口縁外面をくの字状に肥厚させ、円形刺突、横長楕円文を施す。	堀之内1式
第38図 PL.19	327	縄文土器 深鉢	1GG1 口縁部破片					粗砂、赤色粒/ふつう	口縁部をくの字状に短く内屈させ、撚状沈線をめぐらして列点を充填施文。撚状沈線は周回せず長楕円状に閉じる。	堀之内1式
第38図 PL.19	328	縄文土器 深鉢	1GF1 口縁部破片					細砂、赤色粒、輝石/ふつう	口縁部に環状突起を付し、内外面に円形刺突、沈線を施す。	堀之内1式
第38図 PL.19	329	縄文土器 深鉢	1GC3 口縁部破片					粗砂/ふつう	頸部でくの字状に外屈する器形。波状口縁で波頂部に環状突起を付す。口縁部を内屈させて波底部下に対弧状の隆帯を貼付し、円形刺突、2条沈線を施文。頸部上位に鋸み隆帯をめぐらし、波頂部下の位置に環状突起を付す。	堀之内1式
第38図 PL.19	330	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁～胴上位破片					粗砂、赤色粒/良好	小突起を付す波状口縁。胴部が膨らみ、頸部でくの字状に外屈する器形。口縁部を短く内屈させ、端部に円形刺突を伴う沈線をめぐらす。頸部の区画は施さず、頸部から集合沈線による弧状の懸垂文を施し、区画内にLR縄文を充填施文する。	堀之内1式
第38図 PL.19	331	縄文土器 深鉢	1GH1 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	口縁部をくの字状に内屈させて沈線をめぐらす。	堀之内1式
第38図 PL.19	332	縄文土器 深鉢	1GH1 口縁部破片					粗砂/ふつう	口縁外面をくの字状に内屈させ、波頂部下に円形刺突、弧線文を配し、脇に刺突を伴う沈線をめぐらす。口縁内面肥厚。	堀之内1式
第38図 PL.19	333	縄文土器 深鉢	1GC3 口縁部破片					細砂/ふつう	№329と同様の文様構成。頸部上下位に2条の刻み隆帯をめぐらす。	堀之内1式
第38図 PL.19	334	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁～胴上位破片					粗砂/ふつう	胴部が膨らみ、頸部でくの字状に外屈する器形。口縁部をくの字状に内屈させ、沈線をめぐらす。頸部下に3条の沈線を垂下させ、竹管外皮による刺突を充填施文する。	堀之内1式

付表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第38図 PL.19	335	縄文上器 深鉢	1G11 口縁部破片					細砂/ふつう	口縁外面をくの字状に肥厚させて横位沈線をめぐらす。	堀之内1式
第38図 PL.19	336	縄文上器 深鉢	1GE3 胴部破片						№334と同一個体。3条沈線による弧状モチーフを施し、刺突を充填施文する。	堀之内1式
第38図 PL.19	337	縄文上器 深鉢	1GD2 口縁部破片					粗砂/ふつう	胴部が膨らみ、頸部ですぼまって口縁が開く器形。頸部に1条の沈線をめぐらし、以下、RL縄文を充填施文する。	堀之内1式
第38図 PL.19	338	縄文上器 深鉢	1GE3 口辺部破片					粗砂/ふつう	頸部に刺突を伴う隆帯をめぐらし、口縁からも垂下、以下、集合沈線による弧状モチーフを施す。	堀之内1式
第38図 PL.19	339	縄文上器 深鉢	1GD2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	口縁部若干肥厚。口縁下に無文部を設けて横位集合沈線をめぐらし、棒状貼付文を付す。	堀之内1式
第38図 PL.20	340	縄文上器 深鉢	1GH1 口縁部破片					粗砂/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、口縁に弧状隆帯を貼付、内端に円形刺突を施す。	堀之内1式
第38図 PL.20	341	縄文上器 深鉢	1G11 胴部破片					粗砂、赤色粒/ふつう	頸部の外屈する部位。帯状沈線を施し、刺突を伴う貼付文をはす。	堀之内1式
第38図 PL.20	342	縄文上器 深鉢	1GH2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	頸部に横位集合沈線をめぐらし、以下、集合沈線による弧状の懸垂文を施す。地文にLR縄文を施文。	堀之内1式
第38図 PL.20	343	縄文上器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂/ふつう	頸部の外屈する部位。頸部に2条の沈線をめぐらし、以下、集合沈線による弧状の懸垂文を施す。地文にLR縄文を施文。	堀之内1式
第39図 PL.20	344	縄文上器 深鉢	1GF3、G2 口縁部破片					細砂/ふつう	口縁から頸部にかけて斜位刻みを伴う隆帯を垂下、上下端、中央に縦長の刺突を施す。頸部に横位集合沈線をめぐらす。地文にLR縄文を施文、口頸部にも施文する。	堀之内1式
第39図 PL.20	345	縄文上器 深鉢	1GF2、F3 口縁～胴上位破片					粗砂、赤色粒/ふつう	胴部が膨らみ、頸部ですぼまって口縁が開く器形。頸部に横位集合沈線をめぐらし、以下、集合沈線による懸垂文、三角形状モチーフを施す。口縁部に隆帯を垂下、下端と思われる頸部に8の字貼付文状に刺突を施す。地文にLR縄文を施文、口頸部にも施文する。	堀之内1式
第39図 PL.20	346	縄文上器 深鉢	1GE2 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	口縁外面を若干肥厚させ、円形刺突、弧線文、刺突を充填する横長楕円文を施す。以下、LR縄文を施文。	堀之内1式
第39図 PL.20	347	縄文上器 深鉢	1GE3、G1、G2、H1 口縁～胴上位破片					粗砂/ふつう	胴部が膨らみ、頸部ですぼまって口縁が開く器形。頸部に横位集合沈線をめぐらし、以下、集合沈線による懸垂文、V字状モチーフを施す。頸部に刺突を伴う扁平な円形貼付文を付す。8の字貼付文になるか。地文にLR縄文を施文、口頸部にも施文する。	堀之内1式
第39図 PL.20	348	縄文上器 深鉢	1GG1、2G125 口縁～胴上位破片					粗砂、チャート細礫、輝石、石英/ふつう	胴部が膨らみ、頸部ですぼまって口縁が開く器形。口縁部を短く内屈させ、端部に円形刺突を伴う沈線をめぐらす。頸部の区画は施さず、頸部から集合沈線による弧状や蛇行する懸垂文を施す。地文にLR縄文を施文、口頸部にも施文する。	堀之内1式
第39図 PL.20	349	縄文上器 深鉢	1GE3 口縁部破片					粗砂/ふつう	口縁部をくの字状に短く内屈させ、屈曲部下に横位1条の沈線をめぐらす。地文にLR縄文を施文。	堀之内1式
第39図 PL.20	350	縄文上器 深鉢	2GJ25 口縁部破片					粗砂/ふつう	口縁部をくの字状に内屈させて横位沈線をめぐらし、口頸部にLR縄文を施す。	堀之内1式
第39図 PL.20	351	縄文上器 深鉢	1GF2、F3、G1 胴部破片					粗砂/ふつう	頸部に横位集合沈線をめぐらし、以下、集合沈線による縦位、斜位、弧状の懸垂文を施す。地文にLR縄文を施文。	堀之内1式
第39図 PL.20	352	縄文上器 深鉢	1GG2 胴部破片					粗砂、赤色粒/ふつう	頸部に横位集合沈線をめぐらし、以下、集合沈線による弧状モチーフを施す。地文にLR縄文を施文。	堀之内1式
第39図 PL.20	353	縄文上器 深鉢	1GF2 胴部破片					粗砂、赤色粒/ふつう	頸部にかけて斜位刻みを伴う隆帯を垂下、下端に縦長の刺突を施す。頸部に横位集合沈線をめぐらし、以下、集合沈線による懸垂文を施す。地文に縄文を施すようだが判然としない。	堀之内1式
第39図 PL.20	354	縄文上器 深鉢	1GF2、F3 胴部破片					粗砂、赤色粒/良好	集合沈線による弧状、蛇行懸垂文を施す。地文にLR縄文を施文。	堀之内1式
第39図 PL.20	355	縄文上器 深鉢	1GG2 胴部破片					粗砂/ふつう	頸部に横位集合沈線をめぐらし、以下、集合沈線による三角形状モチーフを施す。地文にLR縄文を施文。	堀之内1式
第39図 PL.20	356	縄文上器 深鉢	1GH1 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	集合沈線による弧状の懸垂文を施す。地文にLR縄文を施文。	堀之内1式
第39図 PL.20	357	縄文上器 深鉢	1GG2 胴部破片					粗砂、赤色粒/ふつう	集合沈線による懸垂文を施す。地文にLR縄文を施文。	堀之内1式
第40図 PL.20	358	縄文上器 深鉢	1GH2 胴部破片					粗砂、赤色粒/良好	集合沈線による懸垂文を施す。地文にLR縄文を施文。	堀之内1式
第40図 PL.20	359	縄文上器 深鉢	1GH1 胴部破片					粗砂/ふつう	集合沈線による弧状の懸垂文を施す。地文にLR縄文を施文。	堀之内1式
第40図 PL.20	360	縄文上器 深鉢	埋上 胴部破片					細砂/ふつう	集合沈線による懸垂文を施す。	堀之内1式
第40図 PL.20	361	縄文上器 深鉢	1GH1 胴部破片					粗砂/ふつう	集合沈線による蛇行懸垂文を施す。地文にLR縄文を施文。	堀之内1式
第40図 PL.20	362	縄文上器 深鉢	1GH1 胴部破片					粗砂、チャート細礫/ふつう	集合沈線による弧状モチーフを施す。地文にLR縄文を施文。	堀之内1式
第40図 PL.21	363	縄文上器 深鉢	1GH1 胴部破片					細砂/ふつう	集合沈線による懸垂文、逆S字状沈線、円形刺突を施す。	堀之内1式
第40図 PL.21	364	縄文上器 深鉢	1GH1 胴部破片					細砂/ふつう	集合沈線による斜位、弧状のモチーフを施す。	堀之内1式
第40図 PL.21	365	縄文上器 深鉢	1GH1 胴部破片					粗砂/ふつう	集合沈線による懸垂文を施す。地文にLR縄文を施文。	堀之内1式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第40図 PL.21	366	縄文土器 深鉢	1GF1、G1 胴部破片					粗砂/ふつう	横位、逆U字状に２条沈線を施し、交点に刺突を伴う円形貼付文を付す。地文にLR縄文を施文。	堀之内１式
第40図 PL.21	367	縄文土器 深鉢	1GC3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	３条沈線によるワラビ手状モチーフを施す。	堀之内１式
第40図 PL.21	368	縄文土器 深鉢	1G11 胴部破片					粗砂/ふつう	集合沈線による懸垂文を施す。地文にLR縄文を施文。	堀之内１式
第40図 PL.21	369	縄文土器 深鉢	1GG1 胴部破片					粗砂/ふつう	横位２条沈線を施し、弧状の２条沈線を垂下、交点に刺突を伴う円形貼付文を付す。地文にLR縄文を施文。	堀之内１式
第40図 PL.21	370	縄文土器 深鉢	1GG2 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	２条沈線による弧状の懸垂文を施す。	堀之内１式
第40図 PL.21	371	縄文土器 深鉢	1GH2 胴部破片					粗砂/ふつう	沈線によるモチーフを施し、櫛歯状刺突を充填施文する。	堀之内１式
第40図 PL.21	372	縄文土器 深鉢	1GH1 口縁部破片					粗砂、白色粒、輝石/良好	口縁外面をくの字状に肥厚させて円形刺突、弧線文、横位沈線を施文、以下、縦位平行沈線を施す。	堀之内１式
第40図 PL.21	373	縄文土器 深鉢	2G125 胴部破片						№372と同一個体。平行沈線による上下に伸びるＳ字状モチーフを施す。	堀之内１式
第40図 PL.21	374	縄文土器 深鉢	1GH1 口縁部破片					粗砂、赤色粒/ふつう	口縁部をくの字状に内屈させて沈線をめぐらし、以下、３条の沈線を垂下させる。	堀之内１式
第40図 PL.21	375	縄文土器 深鉢	1GH1 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	口縁部をくの字状に内屈させて沈線をめぐらし、以下、３条の沈線を垂下させる。	堀之内１式
第40図 PL.21	376	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片					粗砂/ふつう	小波状口縁、口縁外面をくの字状に肥厚させ、円形刺突、沈線を施文。以下、縦位、弧状の集合沈線を施す。	堀之内１式
第40図 PL.21	377	縄文土器 深鉢	1GH1 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	小波状口縁。波頂部下に円形刺突を配し、脇に沈線をめぐらす。以下、２条の沈線を垂下させる。地文にLR縄文を施文。	堀之内１式
第40図 PL.21	378	縄文土器 深鉢	1GH2 口縁部破片					粗砂、チャート細礫/良好	口縁部をくの字状に内屈させて浅い沈線をめぐらし、以下、多截竹管状工具による縦位沈線を施す。地文にLR縄文を施文。	堀之内１式
第40図 PL.21	379	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部破片					粗砂、赤色粒/良好	口縁部をくの字状に内屈させて沈線をめぐらし、以下、沈線による縦位、逆U字状モチーフを施す。地文にLR縄文を施文。	
第40図 PL.21	380	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部破片					粗砂/良好	口縁外面をくの字状に若干内屈させて無文帯とし、以下、LR縄文を施す。	堀之内１式
第41図 PL.21	381	縄文土器 深鉢	1GH1 胴部破片					粗砂/ふつう	集合沈線による懸垂文を施す。右端は下状になる。地文にLR縄文を施文。	堀之内１式
第41図 PL.21	382	縄文土器 深鉢	1GH1 胴部破片					粗砂、輝石/良好	刻み隆帯を垂下させ、羽状の集合沈線を施す。	堀之内１式
第41図 PL.21	383	縄文土器 深鉢	1GH1 胴部破片						№382と同一個体。縦位、羽状の集合沈線を施す。	堀之内１式
第41図 PL.21	384	縄文土器 深鉢	1GH1 胴部破片					細砂/ふつう	集合沈線による弧状、入組状モチーフを施す。	堀之内１式
第41図 PL.21	385	縄文土器 深鉢	1GH1、2G125 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	集合沈線による渦巻文、重三角形状のモチーフを施す。	堀之内１式
第41図 PL.21	386	縄文土器 深鉢	1GG1 胴部破片					粗砂、赤色粒/良好	幅広の縦位帯状沈線を施し、内部に蛇行懸垂文を施す。	堀之内１式
第41図 PL.21	387	縄文土器 深鉢	2GH23 胴部破片					粗砂/ふつう	沈線によるモチーフを施し、Ｖ字状刺突を充填施文する。地文に縦位条痕状の条線を施文。	後期前葉
第41図 PL.21	388	縄文土器 深鉢	2G125 胴部破片					粗砂/良好	沈線による懸垂文を施す。	堀之内１式
第41図 PL.21	389	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片					粗砂、チャート細礫/ふつう	地文にLR縄文を施し、平行沈線による横長楕円状、三角形状などの幾何学モチーフを施す。最上位の横位沈線が区画文になるか。	堀之内２式か
第41図 PL.21	390	縄文土器 深鉢	1GF3 口縁部破片					粗砂、赤色粒/ふつう	帯状沈線による三角形状モチーフを施す。地文にLR縄文を施文。	堀之内２式
第41図 PL.21	391	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂/ふつう	帯状沈線による三角形状モチーフを施す。文様帯内地文にLR縄文を施文。	堀之内２式
第41図 PL.21	392	縄文土器 深鉢	2G125 口縁部破片					粗砂/ふつう	帯状沈線による三角形状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	堀之内２式
第41図 PL.21	393	縄文土器 深鉢	1GG1 口縁部破片					粗砂、チャート細礫/ふつう	帯状沈線による三角形状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	堀之内２式
第41図 PL.21	394	縄文土器 深鉢	1GG1 胴部破片						№393と同一個体。	堀之内２式
第41図 PL.22	395	縄文土器 深鉢	1GG2 胴部破片						№393と同一個体。	堀之内２式
第41図 PL.22	396	縄文土器 深鉢	1GF3 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	帯状沈線による三角形状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	堀之内２式
第41図 PL.22	397	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	帯状沈線による三角形状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	堀之内２式
第41図 PL.22	398	縄文土器 深鉢	1GF3 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	帯状沈線による三角形状モチーフ、レンズ状文を施す。	堀之内２式
第41図 PL.22	399	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	１条の沈線をめぐらして文様帯を区画、区画内に帯状沈線によるモチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	堀之内２式
第41図 PL.22	400	縄文土器 深鉢	1GH1 口縁部破片					粗砂/ふつう	横位帯状沈線を施し、LR縄文を充填施文する。	堀之内２式

付表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第41図 PL.22	401	縄文土器 深鉢	1GB3 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	口縁部を一部内湾させ、内湾部に8の字貼付文を付す。帯状沈線による三角形状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。口縁内面に2条の沈線をめぐらし、内湾部下に円形刺突を施す。	堀之内2式
第42図 PL.22	402	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片					粗砂/ふつう	口縁下に豆粒状の貼付文のみを付す。以下、帯状沈線によるモチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	堀之内2式
第42図 PL.22	403	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片					粗砂、輝石/良好	口縁下に8の字貼付文のみを付す。以下、帯状沈線によるモチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	堀之内2式
第42図 PL.22	404	縄文土器 深鉢	1GF3、G2、H2 口縁～胴中位破片					細砂、赤色粒/ふつう	口縁下に刻み隆線をめぐらし、8の字貼付文を付す。文様帯内は帯状沈線による三角形状モチーフを上下に配し、LR縄文を充填施文する。これによりできた菱形区画内に沈線を逆V字状に重複させる。	堀之内2式
第42図 PL.22	405	縄文土器 深鉢	1GH2 口縁部破片					細砂、赤色粒、輝石/ふつう	口縁下に刻み隆線をめぐらす。文様帯内は帯状沈線による三角形状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。三角形状モチーフは上下に配すと思われ、これによりできた菱形区画内に沈線を重複させる。	堀之内2式
第42図 PL.22	406	縄文土器 深鉢	1GB3 口縁部破片					粗砂、赤色粒、輝石/ふつう	口縁下に刻み隆線をめぐらす。文様帯内は帯状沈線による三角形状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	堀之内2式
第42図 PL.22	407	縄文土器 深鉢	1GF3 口縁部破片					粗砂、赤色粒、輝石/良好	口縁下に刻み隆線をめぐらし、8の字貼付文を付す。文様帯内は帯状沈線による菱形状文を施し、LR縄文を充填施文、菱形区画内に沈線を重複させる。	堀之内2式
第42図 PL.22	408	縄文土器 深鉢	1GF2 口縁部破片					粗砂、チャート細礫/良好	口縁下に刻み隆線をめぐらし、豆粒状の貼付文を付す。	堀之内2式
第42図 PL.22	409	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片					粗砂、輝石/ふつう	口縁下に刻み隆線をめぐらし、8の字貼付文を付す。帯状沈線によるモチーフを施し、LR縄文を充填施文する。8の字貼付文下は沈線を蛇行させる。	堀之内2式
第42図 PL.22	410	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片					細砂、輝石/良好	口縁から刻み隆線を垂下させる。	堀之内2式
第42図 PL.22	411	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁～胴中位破片					細砂、輝石/良好	口縁下に刻み隆線を2条めぐらして縦位隆線で連結、交点に円形刺突を施す。文様帯内は横長楕円文を横位に連ねることで工字文状のモチーフを作出、LR縄文を充填施文する。	堀之内2式
第42図 PL.22	412	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂、赤色粒/ふつう	帯状沈線による三角形状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	堀之内2式
第42図 PL.22	413	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	帯状沈線による菱形ないし三角形状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	堀之内2式
第42図 PL.22	414	縄文土器 深鉢	1GF3 胴部破片					細砂、輝石/良好	帯状沈線による三角形状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	堀之内2式
第42図 PL.22	415	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂/ふつう	帯状沈線による菱形状モチーフを施し、LR縄文を充填施文、菱形状区画内に沈線を重複させる。	堀之内2式
第42図 PL.22	416	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					細砂/ふつう	帯状沈線による菱形状モチーフを施し、LR縄文を充填施文、菱形状区画内に沈線をV字状に重複させる。	堀之内2式
第42図 PL.22	417	縄文土器 深鉢	1GF3、G2 胴部破片					細砂、赤色粒、輝石/ふつう	№405と同一個体。菱形区画内に逆V字状に沈線を重複させる。	堀之内2式
第42図 PL.22	418	縄文土器 深鉢	1GF1 胴部破片					粗砂、チャート細礫/ふつう	帯状沈線による三角形状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。文様帯下がくの字状に緩く内屈する。№392～394と同一個体かもしれない。	堀之内2式
第42図 PL.22	419	縄文土器 深鉢	1GI1 胴部破片					細砂/ふつう	帯状沈線によるモチーフを施し、LR縄文を充填施文する。文様帯下がくの字状に緩く内屈する。	堀之内2式
第42図 PL.22	420	縄文土器 深鉢	2GJ25 胴部破片					細砂/良好	帯状沈線による菱形状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。区画内に沈線を重複させるようだ。	堀之内2式
第42図 PL.22	421	縄文土器 深鉢	1GH2 胴部破片					細砂、輝石/ふつう	帯状沈線による三角形状モチーフを施す。	堀之内2式
第42図 PL.22	422	縄文土器 深鉢	2GJ25 胴部破片					細砂/良好	帯状沈線による縦位、斜位に重複するモチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	堀之内2式
第42図 PL.22	423	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂、チャート細礫/ふつう	帯状沈線による重三角形状モチーフを施す。	堀之内2式
第42図 PL.22	424	縄文土器 深鉢	1GE3 胴部破片					粗砂、赤色粒、輝石/ふつう	帯状沈線による菱形状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	堀之内2式
第42図 PL.23	425	縄文土器 深鉢	1GG2 胴部破片					細砂、輝石/良好	帯状沈線による三角形状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。文様帯下がくの字状に緩く内屈する。	堀之内2式
第42図 PL.23	426	縄文土器 深鉢	1GF3 胴部破片					粗砂、赤色粒、輝石/良好	帯状沈線による三角形状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	堀之内2式
第42図 PL.23	427	縄文土器 深鉢	1GH1 胴部破片					粗砂、輝石/ふつう	1条の沈線をめぐらして文様帯を区画、区画内に帯状沈線による弧状、菱形状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。	堀之内2式
第43図 PL.23	428	縄文土器 深鉢	1GE3 口縁部破片					細砂、輝石/ふつう	口縁部をくの字状に短く内屈させ、縦位短沈線、横長楕円文を施文。屈曲部下に刻み隆線をめぐらし、8の字貼付文を付す。以下は剥落により文様不明。	堀之内2式
第43図 PL.23	429	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部破片					細砂、輝石/ふつう	№428と同一個体。口縁に小突起を付し、内面に低平な隆線、沈線による楕円状などのモチーフを施す。突起上端部に刻みを付す。	堀之内2式
第43図 PL.23	430	縄文土器 浅鉢	1GF1 口縁部破片					細砂、赤色粒/ふつう	口縁部をくの字状に内屈させ、内屈部に帯状沈線をめぐらし、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第43図 PL.23	431	縄文土器 深鉢	1GD3 胴部破片					細砂/ふつう	橋状把手。中央に透かしを入れる。端部を肥厚させて刻みをけし、沈線を沿わせる。上部に一対の円形刺突を施す。	後期前葉
第43図 PL.23	432	縄文土器 浅鉢	1GE3 口縁部破片					細砂/ふつう	波状口縁で，波頂部に捻転状の突起を付す。口縁部をくの字状に短く内屈させて帯状沈線をめぐらし，刺突を伴う円形隆付文を付す。	称名寺Ⅱ式
第43図 PL.23	433	縄文土器 浅鉢	1GG1 口縁部破片					粗砂，赤色粒，輝石/ふつう	口縁部が内湾する。口縁外面を肥厚させて沈線をめぐらし，屈曲部をくの字状に張り出させて縦位隆帯でつなぐ。交点に円形刺突，間に縦位短沈線を施す。	後期前葉
第43図 PL.23	434	縄文土器 浅鉢	1GD2 口縁部破片					粗砂/ふつう	口縁部をくの字状に内屈させて文様帯とし，低平な隆帯によるワラビ手状モチーフ，沈線，円形刺突を施す。口縁に爪形状突起を付す。	堀之内１式
第43図 PL.23	435	縄文土器 浅鉢	1GF1 口縁～胴上位破片					粗砂，輝石/ふつう	口縁部をくの字状に内屈させて文様帯とし，低平な隆帯，２条沈線によるワラビ手状などのモチーフ，８の字貼付文や円形刺突を施す。	堀之内１式
第43図 PL.23	436	縄文土器 浅鉢	1GH2 口縁部破片					粗砂/ふつう	波状口縁。口縁部をくの字状に内屈させて円形刺突を伴う沈線をめぐらし，波頂部屈曲部下に円形刺突を施す。口縁内面肥厚。	堀之内１式
第43図 PL.23	437	縄文土器 浅鉢	1GG2 口縁部破片					粗砂，輝石/ふつう	波状口縁。波頂部下右側に円孔を穿ち，左に３条の弧線文をあす。縄に円形刺突を伴う沈線をめぐらす。波頂部左側を突出させて平坦面を作出，上端に刺突を施す。	堀之内１式
第43図 PL.23	438	縄文土器 浅鉢か	1GC2 口縁部破片					粗砂，輝石/ふつう	口縁外面肥厚，漆塗彩による横位レンズ状モチーフを施す。	中期後葉～後期前葉
第43図 PL.23	439	縄文土器 鉢	1GD2、D3 胴部破片					粗砂，赤色粒/ふつう	２条の隆帯をめぐらし，橋状把手を付す。隆帯下は沈線による弧状モチーフ，把手上面に S 字文を施す。	堀之内１式
第43図 PL.23	440	縄文土器 鉢	3G33 胴部破片					粗砂/ふつう	２条の隆帯をめぐらし，橋状把手を付す。把手下に沈線によるモチーフを施す。内外面に漆塗彩。	後期前葉
第43図 PL.23	441	縄文土器 注口土器	1GE3 胴部破片					細砂/良好	帯状沈線によるモチーフを施し，LR縄文を充填施文する。一部区画内に沈線を重複させる。	堀之内２式
第43図 PL.23	442	縄文土器 注口土器	1GE3 口縁～胴上位破片					細砂，輝石/ふつう	口縁部をくの字状に内屈させ、円形刺突、沈線を施す。注口と口縁部を橋状につなぎ，上端を突出させ、内側縁を盛り上げる。胴部は集合沈線によるモチーフを施す。地文に LR縄文を施文。	堀之内１式
第43図 PL.23	443	縄文土器 注口土器か	1GE3 胴部破片					粗砂/ふつう	低平な隆帯をめぐらして沈線を施文、LR縄文を充填施文し，８の字貼付文を付す。帯状沈線による横位，対弧状モチーフを施す。	堀之内２式
第43図 PL.23	444	縄文土器 注口土器	埋土 胴部破片					粗砂，輝石/ふつう	集合沈線による横位，弧状のモチーフを施す。	堀之内２式
第43図 PL.23	445	縄文土器 注口土器	1GE4、F3、2トレ 胴部破片					粗砂/ふつう	沈線による渦巻文を要所に配し，帯状沈線で連結、一部の帯状沈線内にLR縄文を充填施文する。	堀之内２式
第44図 PL.23	446	縄文土器 深鉢	1GC2 底部破片	底	11.5			粗砂，チャート細礫，輝石/ふつう	RL縄文を全面施文する。	加曽利E2式
第44図 PL.23	447	縄文土器 深鉢	1GE2 底部破片	底	7.2			粗砂，輝石/ふつう	２条沈線による懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第44図 PL.23	448	縄文土器 深鉢	3GY3 底部破片	底	5.0			粗砂，輝石/良好	２条沈線による懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第44図 PL.23	449	縄文土器 深鉢	1GD2 底部破片	底	(6.5)			粗砂/ふつう	上げ底。２条沈線による懸垂文を施し、RL縄文を縦位充填施文する。	加曽利E3式
第44図 PL.23	450	縄文土器 深鉢	1GC2 底部破片	底	(6.3)			粗砂，輝石/ふつう	沈線による懸垂文を施し、LR縄文を縦位充填施文する。	加曽利E4式
第44図 PL.23	451	縄文土器 深鉢	1GE2 底部破片	底	8.0			細砂，輝石/ふつう	２条隆線による懸垂文を施す。	加曽利E4式
第44図 PL.23	452	縄文土器 深鉢	1GD3 底部破片	底	7.3			粗砂/ふつう	２条隆線による懸垂文を施す。外面に漆付着。	加曽利E4式
第44図 PL.24	453	縄文土器 深鉢	1GF1 底部破片	底	(7.0)			粗砂，輝石/ふつう	高台を付す底部。弧状の隆線を垂下させる。	加曽利E4式
第44図 PL.23	454	縄文土器 深鉢	1GC2 底部破片	底	6.6			粗砂，チャート細礫，輝石/ふつう	縦位条線を全面施文する。	中期後葉
第44図 PL.24	455	縄文土器 深鉢	1GC2 底部破片	底	6.7			粗砂，輝石/ふつう	LR縄文を施文する。	中期後葉
第44図 PL.24	456	縄文土器 深鉢	1GA3 底部破片	底	7.0			粗砂，輝石/ふつう	RL縄文を施文する。	中期後葉～後期前葉
第44図 PL.24	457	縄文土器 深鉢	1GB2 底部破片	底	6.0			粗砂，輝石/ふつう	残存部は無文。	中期後葉
第44図 PL.24	458	縄文土器 深鉢	1GE3 底部破片	底	6.0			粗砂/ふつう	残存部は無文。	中期後葉
第44図 PL.24	459	縄文土器 深鉢	1GD2 底部破片	底	6.6			細砂/ふつう	残存部は無文。	中期後葉
第44図 PL.24	460	縄文土器 深鉢	1GD3 底部破片	底	7.5			細砂，赤色粒，輝石/ふつう	残存部は無文。	中期後葉
第44図 PL.24	461	縄文土器 深鉢	1GD2 底部破片	底	7.0			粗砂，輝石/ふつう	沈線による懸垂文を施す。	中期後葉～後期前葉
第45図 PL.24	462	縄文土器 深鉢	1GG2 底部破片	底	9.0			粗砂，チャート細礫/ふつう	残存部は無文。	後期前葉

付表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第45図 PL.24	463	縄文上器 深鉢	1GF2 底部破片	底	12.0			粗砂、輝石/ふつう	残存部は無文。	後期前葉
第45図 PL.24	464	縄文上器 深鉢	1GE3 底部破片	底	7.4			細砂、輝石/ふつう	残存部は無文。	堀之内2式
第45図 PL.24	465	縄文上器 深鉢	1GF3 底部破片	底	10.4			粗砂、輝石/ふつう	残存部は無文。底面に網代痕。	後期前葉
第45図 PL.24	466	縄文上器 深鉢	埋上 底部破片	底	14.0			細砂/良好	残存部は無文。底面に網代痕。	後期前葉
第45図 PL.24	467	縄文上器 深鉢	1GE3 底部破片	底	9.3			粗砂、輝石/ふつう	残存部は無文。底面に網代痕。	堀之内2式
第45図 PL.24	468	縄文上器 深鉢	1GE3 底部破片	底	13.0			粗砂、輝石/ふつう	残存部は無文。底面に網代痕。	堀之内2式
第45図 PL.24	469	縄文上器 深鉢	表層 底部破片					粗砂/良好	残存部は無文。底面に木葉痕。	後期前葉
第45図 PL.24	470	縄文上器 深鉢	表層 口縁部破片					細砂/良好	折り返し状の肥厚口縁。肥厚部に RL縄文、口唇部に刻みを施す。	後期後葉
第45図 PL.24	471	縄文上器 ミニチュア上器	1GD2 完形	口 高	6.0 5.2			粗砂、輝石/ふつう	鉢形。口縁は不規則に波打つ。2 条沈線による懸垂文を施し、無節 Lr縄文を縦位充填施文する。底部丸底。	加曽利E3式
第45図 PL.24	472	縄文上器 ミニチュア上器	1GD3 口縁～底部1/3	口 底	(5.4) 2.0	高	2.9	細砂/良好	鉢形。無文。	後期前葉か
第45図 PL.24	473	縄文上器 上製円盤	1GE3 完形	長 幅	3.4 3.8	厚	0.9	粗砂/ふつう	周縁部摩滅。	後期前葉
第46図 PL.25	474	縄文石器 石鏃	1GH2 完形	長 幅	1.7 1.3	厚 重	0.3 0.5	チャート	凹基無茎鏃、二等辺三角形状を呈する。	
第46図 PL.25	475	縄文石器 石鏃	1GE2 欠損	長 幅	2.7 1.7	厚 重	0.4 1.2	チャート	凹基無茎鏃、右脚部を欠損する。	
第46図 PL.25	476	縄文石器 石鏃	1GD3 欠損	長 幅	3.0 2.0	厚 重	0.3 1.3	チャート	凹基無茎鏃、左脚部欠損する。左右対称形の二等辺三角形状を呈する。	
第46図 PL.25	477	縄文石器 石鏃	1GG1 欠損	長 幅	1.9 1.2	厚 重	0.3 0.5	チャート	凹基無茎鏃、二等辺三角形状を呈する、右脚部を欠損する。	
第46図 PL.25	478	縄文石器 石鏃	1GG1 完形	長 幅	1.6 1.7	厚 重	0.3 0.4	珪質頁岩	凹基無茎鏃、正三角形状を呈し、左右の両脚部は細長い。	
第46図 PL.25	479	縄文石器 石鏃	1GE2 完形	長 幅	3.4 1.9	厚 重	0.5 1.8	チャート	凹基無茎鏃、細身の二等辺三角形状を呈する。	
第46図 PL.25	480	縄文石器 石鏃	1GE3 完形	長 幅	3.1 1.8	厚 重	0.3 1.5	チャート	凹基無茎鏃、二等辺三角形状を呈し、右脚部を欠損する。	
第46図 PL.25	481	縄文石器 石鏃	1GE3 欠損	長 幅	2.3 1.5	厚 重	0.3 0.9	チャート	凹基無茎鏃、二等辺三角形状を呈し、左脚部を欠損する。	
第46図 PL.25	482	縄文石器 石鏃	1GE3 完形	長 幅	1.7 1.8	厚 重	0.4 1.0	黒曜石	凹基無茎鏃、やや幅広の正三角形状を呈する。	
第46図 PL.25	483	縄文石器 石鏃	1GD3 完形	長 幅	2.2 2.1	厚 重	0.7 2.8	灰色安山岩	凹基無茎鏃、やや幅広で厚みがある。	
第46図 PL.25	484	縄文石器 石鏃	1GD3 完形	長 幅	2.7 1.9	厚 重	0.5 2.5	灰色安山岩	凹基無茎鏃、先端部と左右対称形の作出は弱い。	
第46図 PL.25	485	縄文石器 打製石斧	1GE3 完形	長 幅	8.8 5.7	厚 重	2.2 104.1	黒色頁岩	分銅形、刃部は逆三角形状を呈する。	
第46図 PL.25	486	縄文石器 打製石斧	1GC2 完形	長 幅	10.3 6.6	厚 重	2.2 179.3	ホルンフェルス	分銅形、先端刃部は鈍角で作出が粗い。	
第46図 PL.25	487	縄文石器 打製石斧	1GC2 完形	長 幅	13.5 6.9	厚 重	2.8 344.7	砂岩	分銅形、左右両側縁の抉入部に摩耗痕が認められる。	
第46図 PL.25	488	縄文石器 打製石斧	1GC2 完形	長 幅	12.2 7.1	厚 重	2.0 192.3	ホルンフェルス	分銅形、右側縁の抉入部の一部に摩耗痕が認められる。	
第47図 PL.25	489	縄文石器 打製石斧	1GE2 完形	長 幅	10.1 6.1	厚 重	2.3 191.3	珪質頁岩	薄手の礫を素材とし調整加工を施しているが左右対称形への整形は弱く、刃部もやや鈍角である。	
第47図 PL.25	490	縄文石器 打製石斧	1GD2 完形	長 幅	11.1 5.0	厚 重	1.9 127.6	ホルンフェルス	分銅形、左右両側縁の抉入部は摩耗している。	
第47図 PL.25	491	縄文石器 打製石斧	2GH24 完形	長 幅	16.8 5.2	厚 重	3.2 314.0	変質安山岩	縦長分銅形で背面に自然面を持つ大型礫長を素材、左右両側縁の抉入部と裏面は摩耗が顕著、先端は摩耗を切る刃部再生が施されている。	
第47図 PL.25	492	縄文石器 打製石斧	表層 完形	長 幅	12.2 5.7	厚 重	1.3 155.2	粘土片岩	短冊形、薄手の礫長剥片を素材とし左右両側縁に調整加工が施される。	
第47図 PL.25	493	縄文石器 打製石斧	1GE2 欠損	長 幅	10.8 6.4	厚 重	2.0 141.3	ホルンフェルス	短冊形、刃部は表面と裏面の一部に摩耗痕が認められる。	
第47図 PL.25	494	縄文石器 打製石斧	1GE2 完形	長 幅	12.7 6.0	厚 重	3.7 336.3	デイサイト	短冊形で厚みがある。刃部は鈍角で摩耗痕と潰れが著しく、磨石・敲石に転用された可能性がある。	
第47図 PL.26	495	縄文石器 磨製石斧	1GD3 欠損	長 幅	11.3 8.3	厚 重	5.0 532.3	凝灰質珪質頁岩	大型の定角式磨製石斧の刃部破片で刃部は円刃。全体を敲打で整形し研磨で仕上げているが、研磨は弱く敲打痕が残る範囲が多い。	
第47図 PL.26	496	縄文石器 磨製石斧	1GD2 完形	長 幅	10.0 5.8	厚 重	3.6 362.9	凝灰質珪質頁岩	定角式磨製石斧、表裏両面はよく研磨されているが側面は敲打痕が残る。刃部は作出が粗く鈍角である。	
第47図 PL.26	497	縄文石器 磨製石斧	1GD2 完形	長 幅	13.6 6.3	厚 重	3.0 423.6	変輝緑岩	撥型の定角式磨製石斧、全体をよく研磨して整形している。研磨前の敲打整形痕が上端部に残る。刃部は欠損し剥離痕が残る。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第48図 PL.26	498	縄文石器 石核	1GB3 完形	長 2.1 幅 2.2	厚 1.6 重 8.2		黒曜石	小型角礫(ズリ)を素材、小型剥片を剥離した痕跡が認められる。	
第48図 PL.26	499	縄文石器 石核	1GE2 完形	長 1.6 幅 3.0	厚 1.0 重 5.3		黒曜石	小型角礫(ズリ)を素材とし、小型剥片を剥離した痕跡が認められる。	
第48図 PL.26	500	縄文石器 凹石	1GE2 完形	長 7.0 幅 6.8	厚 4.0 重 239.1		粗粒輝石安山岩	偏平な円礫を素材、表裏両面に摩耗痕、表面は中央部に浅い凹み、裏面は中央部に凹みとまでいえない弱い敲打痕が認められる。	
第48図 PL.26	501	縄文石器 凹石	1GD2 完形	長 10.9 幅 7.6	厚 4.5 重 554.4		粗粒輝石安山岩	偏平な楕円礫を素材、表裏両面に摩耗痕と中央部に凹み、側面全体に敲打痕が認められる。	
第48図 PL.26	502	縄文石器 凹石	1GE2 完形	長 10.6 幅 6.8	厚 3.3 重 368.7		粗粒輝石安山岩	偏平は楕円礫を素材、表裏両面は中央部に凹み全体を覆う摩耗痕が認められる。	
第48図 PL.26	503	縄文石器 凹石	1GD2 完形	長 8.9 幅 8.0	厚 4.7 重 489.8		粗粒輝石安山岩	偏平な円礫を素材、表裏両面は中央部に浅い凹みと全体を覆う摩耗痕、側面全体に顕著な敲打痕が認められる。	
第48図 PL.26	504	縄文石器 凹石	1GE2 完形	長 11.0 幅 9.1	厚 4.3 重 572.5		粗粒輝石安山岩	偏平な円礫を素材、表裏両面の中央部に浅い凹み、表面には摩耗痕、右側面に敲打痕が認められる。	
第48図 PL.26	505	縄文石器 凹石	1GD2 完形	長 11.6 幅 7.5	厚 3.8 重 437.2		粗粒輝石安山岩	偏平な楕円礫を素材、表面に摩耗痕と中央部に凹みが認められる。	
第48図 PL.26	506	縄文石器 凹石	1GR2 完形	長 11.4 幅 9.2	厚 4.8 重 667.7		粗粒輝石安山岩	偏平な円礫を素材、表裏両面の中央部に浅い凹みと摩耗痕が認められる。	
第49図 PL.27	507	縄文石器 凹石	1GC2 完形	長 11.0 幅 8.4	厚 4.5 重 583.3		粗粒輝石安山岩	偏平な楕円礫を素材、表裏両面の中央部に上下2段のやや深い凹みと摩耗痕が認められる。	
第49図 PL.26	508	縄文石器 凹石	1GF3 完形	長 10.3 幅 7.3	厚 3.8 重 467.8		粗粒輝石安山岩	偏平な楕円礫を素材、表裏両面は摩耗痕が顕著で、中央部に凹みが認められる。	
第49図 PL.26	509	縄文石器 凹石	1GA3 完形	長 12.3 幅 8.0	厚 3.4 重 493.3		粗粒輝石安山岩	偏平な楕円礫を素材、表裏両面の中央部に凹み、側縁全体に敲打痕、裏面・右側面に摩耗痕が認められる。	
第49図 PL.26	510	縄文石器 凹石	1GD1 完形	長 11.5 幅 8.3	厚 5.0 重 751.7		粗粒輝石安山岩	やや厚みのある偏平な楕円礫を素材、表裏両面は中央部に浅い凹みと全体を覆う摩耗痕、側面全体に顕著な敲打痕が認められる。	
第49図 PL.27	511	縄文石器 凹石	1GC2 完形	長 14.5 幅 9.2	厚 5.4 重 1102.8		粗粒輝石安山岩	偏平な楕円礫を素材、表裏両面に摩耗痕、凹みは表面のみで長軸方向に並ぶ。	
第49図 PL.26	512	縄文石器 凹石	1GC2 完形	長 15.0 幅 8.6	厚 5.1 重 860.3		粗粒輝石安山岩	楕円礫を素材、表裏両面の中央部に凹みが長軸方向に並ぶ。表裏両面に摩耗痕、右側縁に敲打痕が認められる。	
第50図 PL.27	513	縄文石器 凹石	3GX3 完形	長 11.7 幅 8.6	厚 4.6 重 763.1		粗粒輝石安山岩	偏平な楕円礫を素材、表裏両面は摩耗が顕著で中央部に凹みが上下に連なる。右側縁に敲打痕が認められる	
第50図 PL.27	514	縄文石器 凹石	1GG1 完形	長 10.7 幅 9.5	厚 4.3 重 534.7		粗粒輝石安山岩	偏平な円礫を素材、表裏両面の中央部に凹み、表面はやや深い漏斗状の凹みである。	
第50図 PL.27	515	縄文石器 凹石	1GA3 完形	長 8.5 幅 8.4	厚 5.7 重 463.5		粗粒輝石安山岩	偏平な円礫を素材、表裏両面の中央部にやや深い凹みが認められる。	
第50図 PL.27	516	縄文石器 凹石	1GC2 完形	長 9.6 幅 9.3	厚 6.4 重 674.3		粗粒輝石安山岩	やや厚みのある偏平な円礫を素材、表裏両面の中央部に凹みが認められる。	
第50図 PL.27	517	縄文石器 凹石	1GG1 完形	長 10.3 幅 9.1	厚 6.7 重 774.7		粗粒輝石安山岩	やや厚みのある偏平な円礫を素材、表裏両面の中央部に浅い凹み、右側縁上側に敲打痕が認められる	
第50図 PL.27	518	縄文石器 凹石	1GD3 完形	長 9.2 幅 7.6	厚 3.9 重 340.6		粗粒輝石安山岩	偏平な円礫を素材、表裏両面の中央部に凹みが認められる。	
第50図 PL.27	519	縄文石器 凹石	1GE2 完形	長 9.0 幅 7.7	厚 3.5 重 284.8		粗粒輝石安山岩	偏平な円礫を素材、表裏両面の中央部に凹み、表面は漏斗状の深い凹み、裏面は浅い凹み、左右両側縁の中央部に弱い敲打痕が認められる。	
第50図 PL.27	520	縄文石器 凹石	1GE2 完形	長 9.9 幅 8.6	厚 4.7 重 496.0		粗粒輝石安山岩	偏平な円礫を素材、表裏両面の中央部に凹み、右側面に敲打痕が認められる。	
第51図 PL.27	521	縄文石器 凹石	1GD3 完形	長 9.2 幅 7.3	厚 3.1 重 239.2		粗粒輝石安山岩	偏平な円礫を素材、表裏両面の中央部に凹み、裏面は複数の凹みが連なる。右側面には敲打痕が認められる。	
第51図 PL.27	522	縄文石器 凹石	1GC2 完形	長 11.3 幅 7.2	厚 4.9 重 482.4		粗粒輝石安山岩	偏平な楕円礫を素材、表裏両面の中央部に凹み、右側縁に敲打痕が認められる。	
第51図 PL.27	523	縄文石器 凹石	1GA3 完形	長 12.9 幅 7.7	厚 4.0 重 520.4		粗粒輝石安山岩	偏平な楕円礫を素材、表裏両面の中央部に凹み、右側縁に敲打痕が認められる。	
第51図 PL.27	524	縄文石器 凹石	1GD2 完形	長 10.7 幅 7.7	厚 4.5 重 416.3		粗粒輝石安山岩	偏平な楕円礫を素材、表裏両面の中央部に深い漏斗状の凹み、左右両側縁に敲打痕が認められる。	
第51図 PL.27	525	縄文石器 凹石	1GC2 完形	長 10.0 幅 6.6	厚 3.3 重 271.3		粗粒輝石安山岩	偏平な楕円礫を素材、表裏両面の中央部に複数の浅い凹み、右側縁に敲打痕が認められる。	
第51図 PL.27	526	縄文石器 凹石	1GA3 完形	長 10.8 幅 5.8	厚 3.6 重 294.7		粗粒輝石安山岩	偏平な楕円礫を素材、表裏両面の中央部に凹み、右側縁に敲打痕が認められる。	
第51図 PL.27	527	縄文石器 凹石	1GE2 完形	長 13.5 幅 6.0	厚 4.5 重 474.7		粗粒輝石安山岩	厚みのある棒状礫を素材、表裏両面の下側に浅い凹み、左右両側縁と先端部に弱い敲打痕が認められる。	
第51図 PL.28	528	縄文石器 凹石	1GC2 完形	長 13.3 幅 7.1	厚 4.0 重 486.8		粗粒輝石安山岩	偏平な楕円礫を素材、表裏両面の中央部に凹み、右側縁に敲打痕が認められる。	
第52図 PL.27	529	縄文石器 凹石	1GD3 完形	長 9.4 幅 8.0	厚 5.2 重 468.8		粗粒輝石安山岩	厚みのある楕円礫を素材、表裏両面の中央部に凹みが認められる。	
第52図 PL.27	530	縄文石器 凹石	1GE2 完形	長 10.4 幅 9.0	厚 6.4 重 585.2		粗粒輝石安山岩	厚みのある偏平な円礫を素材、表裏両面の中央部に凹み、表面は深い漏斗状の凹み、裏面にはやや浅い凹みである。	
第52図 PL.28	531	縄文石器 凹石	1GD3 完形	長 12.0 幅 9.7	厚 6.4 重 878.1		粗粒輝石安山岩	偏平な円礫を素材、表裏両面の中央部に凹み、表面の凹みは深く漏斗状を呈する。	
第52図 PL.28	532	縄文石器 凹石	1GC2 完形	長 9.4 幅 8.0	厚 5.0 重 418.7		粗粒輝石安山岩	偏平な円礫を素材、表裏両面の中央部に凹みが認められる。	
第52図 PL.28	533	縄文石器 凹石	1GE2 完形	長 9.6 幅 9.8	厚 3.5 重 389.7		粗粒輝石安山岩	偏平な円礫を素材、表裏両面に凹み、両面とも浅く不定形な凹みが連なる。	

付表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第52図 PL.28	534	磨石類 凹石	1GC3 完形	長	10.7	厚	5.0	粗粒輝石安山岩	偏平な円礫を素材、表裏両面の中央部に凹みが認められる。	
				幅	9.6	重	635.5			
第52図 PL.28	535	磨石類 凹石	1GB2 完形	長	10.5	厚	5.6	粗粒輝石安山岩	やや厚さと角のある楕円礫を素材、表裏両面の中央部に凹みが認められる。	
				幅	8.9	重	604.1			
第52図 PL.28	536	磨石類 凹石	1GB3 完形	長	8.4	厚	3.1	粗粒輝石安山岩	偏平な円礫を素材、表裏両面の中央部に浅い凹みが認められる。	
				幅	7.3	重	224.6			
第53図 PL.28	537	磨石類 凹石	1GE2 完形	長	11.0	厚	4.1	花崗岩	偏平な円礫を素材、表裏両面の中央部に浅い凹みが認められる。	
				幅	9.8	重	606.1			
第53図 PL.28	538	磨石類 凹石	1GD2 完形	長	8.2	厚	5.1	粗粒輝石安山岩	厚みのある偏平な円礫を素材、表裏両面と右側面に凹み、表面の凹みは深い。	
				幅	6.8	重	273.8			
第53図 PL.28	539	磨石類 凹石	1GD2 完形	長	13.5	厚	6.9	粗粒輝石安山岩	厚みのある偏平な楕円礫を素材、表裏両面の中央部に凹みが認められる。	
				幅	9.0	重	1009.7			
第53図 PL.28	540	磨石類 凹石	1GA3 完形	長	11.0	厚	5.3	粗粒輝石安山岩	やや厚みのある楕円礫を素材、表裏両面の中央部に凹みが認められる。	
				幅	7.6	重	529.5			
第53図 PL.28	541	磨石類 凹石	1GE2 完形	長	10.2	厚	5.7	粗粒輝石安山岩	厚みのある楕円礫を素材、表裏両面の中央部に凹み、表面は扁平状の深い凹み、裏面は浅い凹みである。	
				幅	6.7	重	444.4			
第53図 PL.28	542	磨石類 凹石	1GE2 完形	長	12.2	厚	4.3	粗粒輝石安山岩	偏平な楕円礫を素材、表裏両面の中央部に上下に連なる浅い凹みが認められる。	
				幅	8.5	重	559.1			
第53図 PL.28	543	磨石類 凹石	1GD2 完形	長	8.2	厚	4.0	粗粒輝石安山岩	偏平な円礫を素材、表裏両面の中央部に凹みが認められる。	
				幅	6.9	重	288.7			
第53図 PL.28	544	磨石類 凹石	1GE2 完形	長	11.4	厚	6.9	粗粒輝石安山岩	厚みのある楕円礫を素材、表面は傾斜面にやや深い凹み、裏面は平坦面で浅い凹みである。	
				幅	8.1	重	735.1			
第54図 PL.28	545	磨石類 凹石	1GE2 完形	長	14.0	厚	6.4	粗粒輝石安山岩	厚みのある楕円礫を素材、表裏両面と右側面の中央部に凹み、表面と右側面はやや深い凹みで不定形な浅い凹みが連なり、裏面は浅い凹みである。	
				幅	8.5	重	856.4			
第54図 PL.28	546	磨石類 凹石	3GX3 完形	長	11.9	厚	5.1	粗粒輝石安山岩	やや厚みのある偏平な楕円礫を素材、表裏両面の中央部に浅い凹みが上下に連なる。	
				幅	6.6	重	558.0			
第54図 PL.28	547	磨石類 凹石	1GE2 完形	長	11.8	厚	7.6	粗粒輝石安山岩	厚みのある円礫を素材、表裏両面と右側面の凹み、表面はやや深い凹みと浅く小型の凹みが点在している。	
				幅	10.0	重	1017.8			
第54図 PL.28	548	磨石類 磨石	1GD3 完形	長	10.2	厚	4.1	粗粒輝石安山岩	偏平な楕円礫を素材、表裏両面には摩耗痕が認められ、中央部に小さな凹みが複数点在している。	
				幅	7.9	重	477.0			
第54図 PL.28	549	磨石類 磨石	1GC2 完形	長	5.2	厚	2.7	粗粒輝石安山岩	偏平な円礫を素材とした小型品で、表裏両面に摩耗痕と凹みの可能性がある小穴が認められる。	
				幅	4.4	重	72.0			
第54図 PL.29	550	磨石類 磨石	1GE2 完形	長	9.0	厚	2.9	粗粒輝石安山岩	偏平な楕円礫を素材、表面に摩耗痕と敲打痕、裏面に摩耗痕が部分的に認められる。	
				幅	4.9	重	157.9			
第54図 PL.29	551	磨石類 磨石	1GE2 完形	長	9.7	厚	5.7	粗粒輝石安山岩	やや厚みのある偏平な楕円礫を素材、上下両端部に敲打痕、裏面は平坦で摩耗痕が広範囲に認められる。	
				幅	7.2	重	552.2			
第54図 PL.29	552	磨石類 磨石	1GC2 完形	長	9.1	厚	3.6	粗粒輝石安山岩	偏平な円礫を素材、表裏両面の中央部付近に摩耗痕、右側縁に敲打痕が認められる。	
				幅	7.6	重	323.9			
第55図 PL.29	553	磨石類 磨石	1GB2 完形	長	11.5	厚	2.0	粗粒輝石安山岩	偏平で薄手の楕円礫を素材、表裏両面に摩耗痕が広範囲に認められる。	
				幅	7.0	重	255.5			
第55図 PL.29	554	磨石類 磨石	1GF2 完形	長	9.5	厚	5.4	軽石	軽石を素材とし敲打と研磨で整形、表面全体に敲打痕、裏面は摩耗痕が広範囲に認められる。	
				幅	7.5	重	286.3			
第55図 PL.29	555	磨石類 磨石	1GE3 完形	長	9.9	厚	7.5	粗粒輝石安山岩	厚みのある球状の円礫を素材、表裏両面に摩耗痕、上半縁辺部に敲打痕が認められる。	
				幅	9.1	重	921.3			
第55図 PL.29	556	磨石類 敲石	1GE2 欠損	長	10.0	厚	3.8	粗粒輝石安山岩	棒状礫を素材、上下部欠損、表面に摩耗痕、下端部に敲打痕が認められる。	
				幅	5.0	重	299.0			
第55図 PL.29	557	磨石類 敲石	1GE3 完形	長	11.6	厚	4.3	花崗岩	棒状礫を素材、下端部に敲打痕が認められる。	
				幅	5.5	重	424.5			
第55図 PL.29	558	磨石類 敲石	1GD2 完形	長	13.7	厚	2.5	結晶片岩	やや偏平な棒状の礫を素材、下端部と左右両側縁の敲打痕から敲石と判定したが、石棒の可能性もある。	
				幅	4.6	重	252.6			
第55図 PL.29	559	磨石類 石皿	1GC2 欠損	長	9.5	厚	9.7	粗粒輝石安山岩	厚みのある偏平な礫を素材とした石皿の破片で表面に摩耗痕、裏面に凹みが認められる。	
				幅	12.2	重	1348.9			
第55図 PL.29	560	磨石類 石皿	1GE2 欠損	長	11.3	厚	6.0	粗粒輝石安山岩	大型の石皿破片、表面は顕著な摩耗痕があり凹みが点在、裏面は自然面で多数の凹みが点在し摩耗痕が縁辺部に認められる。	
				幅	14.0	重	1366.8			
第55図 PL.29	561	磨石類 石皿	1GD2 欠損	長	14.9	厚	5.7	粗粒輝石安山岩	偏平な大型礫を素材とした石皿の破片、表面は摩耗が著しく中央部は擦り減りが著しい。表面縁辺部と裏面に複数の凹みが認められる。	
				幅	13.2	重	1258.6			
第55図 PL.30	562	磨石類 石皿	1GD3 欠損	長	13.0	厚	8.0	粗粒輝石安山岩	偏平な礫を素材とした石皿の破片、表面は中央部が摩耗に擦り減り縁辺部には凹みが複数認められ、裏面は摩耗痕と多数の凹みが認められる。	
				幅	16.0	重	1732.4			
第56図 PL.29	563	磨石類 石皿	1GA3 欠損	長	30.7	厚	10.6	粗粒輝石安山岩	欠損した有縁・有脚の石皿で、裏面には脚部を含めて全体に多数の凹みが認められる。	
				幅	18.7	重	3702.3			
第56図 PL.30	564	磨石類 石皿	1GC3 欠損	長	11.9	厚	7.3	粗粒輝石安山岩	有縁・有脚の石皿破片、裏面に凹みが3カ所認められる。	
				幅	9.7	重	516.4			
第56図 PL.30	565	磨石類 多孔石	1GA3 完形	長	13.4	厚	5.1	粗粒輝石安山岩	偏平な楕円礫を素材、表裏面の中央部に凹みが認められる。表面は浅い凹みが複数あり、裏面は浅い凹みである。	
				幅	9.8	重	680.9			
第57図 PL.30	566	磨石類 多孔石	1GC2 完形	長	13.5	厚	4.2	粗粒輝石安山岩	偏平な円礫を素材、表裏両面の中央部付近に多数の凹みが集中する。右側面に敲打痕が認められる。	
				幅	10.8	重	482.3			
第57図 PL.30	567	磨石類 多孔石	1GG2 欠損	長	16.3	厚	7.9	粗粒輝石安山岩	大型の偏平な円礫を素材とした多孔石の破片、表裏両面に凹みと右側縁に敲打痕。裏面は不定形に凹みが連なる。凹みは破片の中央部にあることからため、割れた後に施された可能性が高い。	
				幅	12.8	重	1456.9			

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第57図 PL.30	568	縄文石器 多孔石	1GB2 完形	長	14.0	厚	8.2	粗粒輝石安山岩	厚手の楕円礫を素材、表裏両面と左右両側面に多数の凹みと摩耗痕が認められる。表面の凹みは深く漏斗状を呈する。	
				幅	10.6	重	1148.0			
第58図 PL.30	569	縄文石器 多孔石	1GB3 欠損	長	20.1	厚	9.0	粗粒輝石安山岩	半割の楕円礫を素材、表面中央部と左右両側面に凹みが複数認められる。	
				幅	11.8	重	2483.8			
第58図 PL.30	570	縄文石器 多孔石	1GG2 完形	長	21.6	厚	10.6	軽石	大型の扁平な軽石を素材、表面には中央部に浅く凹んだ敲打痕、V字溝状の直線の擦り込みが認められる。	
				幅	18.0	重	1946.0			
第59図 PL.31	571	縄文石器 多孔石	1GG1 欠損	長	25.5	厚	11.1	粗粒輝石安山岩	厚みのある棱線の磨滅した亜角礫を素材、表裏両面に多数の凹みを持つ。表面は平坦面で全体に多数の凹みがあり、右側の凹みは上下直線状に並び規格性が読み取れる。	
				幅	13.3	重	2201.8			
第59図 PL.31	572	縄文石器 多孔石	1GF3 欠損	長	18.5	厚	8.7	粗粒輝石安山岩	厚みのある大型礫を素材とした多孔石の破片、表面は曲面を呈しそこに多数の凹みが認められる。	
				幅	11.5	重	1232.4			
第60図 PL.31	573	縄文石器 多孔石	1GA3 欠損	長	16.8	厚	9.8	粗粒輝石安山岩	大型の石皿破片を転用した多孔石で、表面・割れた右側面・裏面に多数の凹みが認められる。	
				幅	13.5	重	2237.6			
第60図 PL.31	574	縄文石器 多孔石	1GE2 完形	長	13.7	厚	8.9	粗粒輝石安山岩	厚みのある平球状の楕円礫を素材、表裏両面と右側面にやや深い凹み、表面は平坦面で多数の凹みが不定形に連なる。	
				幅	10.3	重	1390.7			
第60図 PL.31	575	縄文石器 砥石	1GE2 欠損	長	9.4	厚	1.8	砂岩	薄手の不定形な礫を素材、表裏両面に研磨痕を持つ。左右両側面は自然面である。	
				幅	8.0	重	135.0			
第60図 PL.31	576	縄文石器 軽石製品	表解 欠損	長	5.8	厚	2.2	軽石	軽石の全体を研磨により整形、表裏両面は研磨により平坦面を作出し、側面は台形状を呈する。	
				幅	5.4	重	43.4			
第61図 PL.32	577	縄文石器 石棒	1GB3 完形	長	63.2	厚	10.8	蛇紋岩質準片岩	角柱状の礫を円柱状に整形した石棒で敲打痕が凝結した希少な石棒を利用している。表裏両面はやや平坦面、左右両側面は丸みを持つ曲面で、表裏両面・右側面・下端面に凹みが多数認められる。	
				幅	14.2	重	7756.9			
第61図 PL.31	578	縄文石器 石棒	1GD2 欠損	長	7.3	厚	5.0	砂岩	石棒の中間部破片、表面は摩耗の痕跡、裏面には浅い凹みが認められる。	
				幅	6.0	重	343.6			
第61図 PL.31	579	縄文石器 石製垂飾	1GE2 完形	長	2.9	厚	0.8	滑石	棒線が丸みを持つ角柱状に整形して、器体やや上半部寄りに穿孔(孔径6mm)している。	
				幅	1.1	重	4.4			
第62図 PL.32	580	埴輪 形象	1GF3 部位不明					細砂粒・粗砂粒/酸化塩/明赤褐	残存部右端に透孔あ。外面は端部付近が横方向、その左は縦方向ハケメ、器面磨滅。内面はハケメ。	
第62図 PL.32	581	埴輪 形象	表解 部位不明					細砂粒/酸化塩/浅黄橙	内外面ともナデ。	
第62図 PL.32	582	埴輪 形象	表解 部位不明					細砂粒/酸化塩/にぶい橙	内外面ともハケメ(1cm当たり5本)。外面に赤色塗彩。	
第62図 PL.32	583	埴輪 形象	表解 部位不明					細砂粒/酸化塩/にぶい黄橙	外面は器面磨滅のため整形不明、内面はナデ。	
第62図 PL.32	584	埴輪 形象	表解 部位不明					細砂粒/酸化塩/橙	内外面ともナデ、下端に貼付痕が見られる。	
第62図 PL.32	585	埴輪 円筒	2GB2 底部～胴部片					細砂粒/酸化塩/にぶい橙	内面に輪積み痕が残る。外面は縦方向ハケメ(2cm当たり14本)、内面はナデ。	
第62図 PL.32	586	埴輪 円筒	1GG1 凸帯・胴部片					細砂粒・粗砂粒/酸化塩/橙	残存部片左上に円形の透孔。凸帯は貼付、凸帯の上位は面磨滅、下位は縦方向ハケメ後横方向ハケメ(2cm当たり12本)。内面はナデか。	
第62図 PL.32	587	埴輪 円筒	1GB2 凸帯片					細砂粒/酸化塩/にぶい橙	凸帯は貼付、外面は器面磨滅のため整形不明。内面はハケメ(2cm当たり7～8本)。	
第62図 PL.32	588	埴輪 円筒	1GC2 凸帯～胴部片					細砂粒・粗砂粒/酸化塩/橙	断面に輪積み痕が残る。残部片右下に透孔。凸帯は貼付、外面はハケメ(2cm当たり16本)。内面もハケメ。	
第62図 PL.32	589	埴輪 円筒	2GH25 凸帯～胴部片					細砂粒・粗砂粒/酸化塩/橙	外面は縦方向ハケメ(2cm当たり6本)後、凸帯を貼付。内面は斜め方向のハケメ。	
第62図 PL.32	590	埴輪 不明	1GF2 凸帯片					細砂粒/酸化塩/灰黄褐	凸帯は貼付、凸帯の上下はナデ、ナデの上位には横方向はハケメ(2cm当たり16本)。内面はナデ。	
第62図 PL.32	591	埴輪 朝顔	表解 凸帯・胴部片					細砂粒/酸化塩/橙	残存部上端に透孔の痕跡が残る。凸帯は貼付、断面は歪んだ台形状を呈す。外面はハケメ(2cm当たり13本)。内面はナデ。	
第62図 PL.32	592	埴輪 円筒	1GF3 凸帯片					細砂粒/酸化塩/橙	残存部右上に透孔。凸帯は貼付、断面は台形状を呈す。内面はナデ整形。	
第62図 PL.32	593	埴輪 円筒	表解 凸帯・胴部片					細砂粒/酸化塩/橙	凸帯は貼付、断面は台形状を呈す。外面はハケメ(2cm当たり7本)。内面はナデ。	
第62図 PL.32	594	埴輪 円筒	表解 凸帯・胴部片					細砂粒/酸化塩/橙	凸帯は貼付、端部欠損のため形状不明。胴部はハケメ(2cm当たり9本)。内面はナデ、磨滅のため不明。	
第62図 PL.33	595	埴輪 円筒	表解 凸帯・胴部片					細砂粒/酸化塩/にぶい黄橙	凸帯は貼付、断面は歪んだ台形状を呈す。外面はハケメ(2cm当たり7本)。内面はナデ。	
第63図 PL.33	596	手捏ね土器 椀形	1GD3 1/2	口	5.5	高	5.5	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部から体部と底部はヘラナデ。内面も同様。	5～6世紀
				底	4.4					
第63図 PL.33	597	手捏ね土器 椀形	1GE3 底部～体部	底	4.4			細砂粒/良好/にぶい黄橙	底部は手持ちヘラ削り、体部は器面磨滅のため整形不明。内面は底部から体部にヘラナデ。	6世紀か
第63図 PL.33	598	手捏ね土器 椀形	1GE3 底部～体部	底	2.8			細砂粒/良好/にぶい黄橙	底部と体部はヘラナデ。	6世紀か
第63図 PL.33	599	ミニチュア 椀形	1GA3 底部～体部片	底	4.6			細砂粒/良好/橙	高台は貼付。内外面ともヘラナデ。	5～6世紀
				台	4.4					
第63図 PL.33	600	須恵器 杯	1GF2 底部～体部片	底	5.0			細砂粒/酸化塩/橙	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。底部は器面磨滅のため一部糸切り が消滅。	10世紀後半
第63図 PL.33	601	灰釉陶器 長頸壺	2G125 底部～胴部片	底	16.0			微砂粒/還元塩/灰白	ロクロ整形、回転は右回り か。高台は貼付、胴部は回転ヘラ削り。	10世紀前半。大原2号窯式期か
				台	16.0					

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm.g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第63図 PL.33	602	須恵器 甕	1GH1、2GH25 胴部片					細砂粒/還元焔/灰	胴部は叩き締め成形。外面は平行叩き痕が残るが、内面はヘラナデでアテ具痕を消している。内面は酸化焔状態。	
第63図 PL.33	603	瓦 丸瓦	1GG1 右下端部片					細砂粒/酸化焔/にぶい赤褐	裏面には布目痕が残る。表面、下端、右側面はヘラナデ。	
第63図 PL.33	604	瓦 平瓦	1GG1 左下端部片					細砂粒/還元焔/灰	表面には布目痕が残る。裏面、下端、右側面はヘラナデ。	
第63図 PL.33	605	瓦 平瓦	1GH1 左側面片					細砂粒/還元焔/黄灰	表面は布目痕が残るが大部分は磨滅、裏面は縄叩き痕が残る。	
第63図 PL.33	606	土製品 土錘	表層 破片	長 径	(1.7) 1.1	孔 重	0.3 (3.1)	微砂粒/良好にぶい橙	外面はナデ。	
第63図 PL.33	607	瓦 軒平瓦	1GF3 端部片					細砂粒/還元焔/灰	瓦当面には連珠文、上面は格子状に凹線を刻み、平瓦との接合を密着させようとしている。	中世か
第63図	608	龍泉窯系青磁 碗	2GJ25 口縁部片					灰白	片彫りによる鎬蓮弁文碗。大宰府分類のⅡ－b類。	13世紀
第63図	609	古瀬戸陶器か 不明	1GF2 口縁部片					灰白	外面の轆轤目顕著。内外面に灰釉。細かい貫入入る。	中世か
第63図	610	古瀬戸陶器 小皿	表層 底部～体部片	底	6.0			還元焔/灰黄	ロクロ整形、高台は削り出し、底部と体部は回転ヘラ削り。釉薬を施釉か。	中世
第63図	611	古瀬戸陶器 深皿	1トレ 底部片					灰白	底部糸切後に体部外面から底部周縁をヘラ削り。体部内面に灰釉。底部内面は刷毛塗りか。	13世紀～15世紀
第64図	612	在地系土器 内耳鍋	表層 口縁部片					微細な片岩含む/にぶい橙	器表は灰色。内耳部片のため、口縁部形状は不詳。器壁は薄い。	15世紀後半～16世紀中葉
第64図	613	在地系土器 内耳鍋	表層 口縁部片					白色鉱物含む/灰	器壁やや薄く、口縁端部上面は平坦。端部内外面は稜をなす。	15世紀末～16世紀中葉
第64図	614	在地系土器 内耳鍋	表層 口縁部片					黒色鉱物含む/灰白	器壁やや厚く、口縁部やや内湾。内面口縁部下稜をなす。	15世紀前半か
第64図	615	在地系土器 内耳鍋	表層 体部上位片					白色鉱物含む/灰白	口縁部下内面の段差明瞭。	15世紀～16世紀
第64図	616	在地系土器 内耳鍋	表層 体部片					白色鉱物含む/にぶい橙	器表付近から内面器表褐灰色、外面器表黒色。器壁やや厚く体部緩く内湾。	中世
第64図	617	在地系土器 焙烙	表層 口縁部片					黒色鉱物含む/灰白	口縁端部上面窪む。口縁部外面に横撫による弱い稜線。	江戸時代
第64図	618	在地系土器 片口鉢	表層 口縁部片					微細な片岩含む/にぶい橙	断面外半はにぶい橙色、内半は灰白色。器表は黒色。 口縁部は直線的に延び、端部はやや肥厚。	14世紀～15世紀
第64図	619	常滑陶器 壺か甕	表層 肩部片					灰白	外面上位に自然釉。外面上位に押印文。	中世
第64図	620	常滑陶器 壺か甕	1GH1 体部下位片					灰白	内面薄く自然釉がかかる。外面小口状工具による斜位撫で。	中世
第64図 PL.33	621	鉄製品 刀子	1GG1 一部欠損	長 幅	(4.2) 1.3	厚 重	0.5 4.1		切っ先、茎が欠損する。反りは見られない。	
第64図 PL.33	622	鉄製品 釘か	1GF3 一部欠損	長 幅	(2.5) 0.6	厚 重	0.6 2.0		上端が折れ曲がり、やや捻れている。断面形は四角だが、両端が確認できない。	
第64図 PL.33	623	銭貨 至道元寳	表層 完形	外 内	2.49 1.81	厚 重	0.11 2.3		面の文字、輪、郭は彫が深く明瞭だが、背は彫が浅い。背の輪と郭が右下にずれている。	
第64図 PL.33	624	銭貨 天聖元寳か	表層 1/2	厚 重	0.15 1.2				面、背ともに彫は浅い。面側に膨らむ反りが見られる。	
第64図 PL.33	625	銭貨 永楽通寳	表層 完形	外 内	2.46 1.99	厚 重	0.16 2.7		面の彫は深いが、背の彫は浅い。面の一部に鋳詰まりが見られる。輪が一部欠けている。	

遺構外出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm.g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第65図 PL.33	1	縄文土器 深鉢	攪乱中 口縁部破片					粗砂/ふつう	頸部に沈線をめぐらす。口頸部は斜位のナデ状の凹凸を顕著に残す。	堀之内1式
第65図 PL.33	2	縄文土器 深鉢	攪乱中 口縁部破片					細砂、輝石/ふつう	口縁部がくの字状に内屈。屈曲部を肥厚させ、肥厚部に斜位刻みを付す。	堀之内1式
第65図 PL.33	3	縄文土器 深鉢	一括 口縁部破片					細砂/ふつう	口縁部をくの字状に内屈させて沈線をめぐらす。	堀之内1式
第65図 PL.33	4	縄文土器 深鉢	攪乱中 胴部破片					細砂、輝石/ふつう	帯状沈線による三角形状モチーフを施し、LR縄文を充填施文する。文様帯下がくの字状に緩く内屈する。	堀之内2式
第65図 PL.33	5	埴輪 円筒	一括 凸帯・胴部片	凸	32.8			細砂粒/酸化焔/橙	凸帯は貼付、凸帯の上下はナデ、ナデの下位は縦方向ハケメ（2㎝当たり8本）。内面はナデ。	
第65図 PL.33	6	土師器 杯	表土 口縁部～底部片	口	12.8			細砂粒/良好灰黄	口縁部はヨコナデ、体部から底部は手持ちヘラ削りか、器面磨滅のため整形不鮮明。	8世紀後半
第65図	7	在地系土器 二次加工円盤	表土 完形	長 短	4.4 3.6	厚	1.2	黒色鉱物含む	厚手の土器底部片の周囲を擦って楕円形に整形し、中央に穴を開ける。底部調整痕から江戸期の土器を二次加工したものと考えられる。	江戸時代か
第65図 PL.33	8	銭貨 洪武通寳	一括 完形	外 内	2.27 1.80	厚 重	0.15 2.5		面の彫が深く、文字、輪、郭が明瞭。背は一部薄くなり、郭の一部が不明瞭。	

写 真 図 版

1．調査区全景(北から)

2．調査区全景(北東から)

PL.2

1．旧河道全景(北東から)

2．旧河道北部(北西から)

3．旧河道北部(南から)

4．旧河道調査状況(北西から)

5．旧河道北端部確認状況(南から)

1．旧河道１ＧＦ３付近遺物出土状況(南から)

2．旧河道１ＧＥ３付近遺物出土状況(南から)

3．旧河道断面Ａ(南から)

4．旧河道断面Ｂ西端部(南から)

5．旧河道断面Ｃ(南東から)

6．旧河道断面Ｃ西半部(南から)

7．調査区西壁断面Ｄ(北東から)

PL.4

1

2

3

4

5

6

旧河道出土遺物(1)

7

8

9

10

11

12

13

14

15

17

16

18

19

旧河道出土遺物（2）

PL.6

20

21

22

23

24

25

27

26

29

30

旧河道出土遺物（3）

28

31

32

33

34

35

36

37

旧河道出土遗物（4）

PL.8

38

39

40

41

42

43

44

45

47

46

49

50

旧河道出土遺物（5）

旧河道出土遺物(6)

PL.10

旧河道出土遺物（7）

101
102
103
104
105
106
108
109
107
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
127

旧河道出土遺物(8)

PL.12

旧河道出土遺物(9)

152
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188

旧河道出土遺物(10)

189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210

旧河道出土遺物(11)

211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233

旧河道出土遺物(12)

PL.16

旧河道出土遺物(13)

254
256
257
258
259
260
261
263
262
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
283
280
281
282
284
285
286
287

旧河道出土遺物(14)

PL.18

288

289

290

291

292

293

294

295

296

297

298

299

300

301

302

304

305

303

312

306

307

308

309

310

311

313

旧河道出土遺物(15)

314
315
319
320
321
316
317
318
322
323
327
324
325
326
328
331
329
330
332
335
336
338
333
334
337
339

旧河道出土遺物(16)

PL.20

340

341

343

344

342

345

346

347

348

349

350

351

352

353

354

355

356

357

358

359

360

361

362

旧河道出土遺物(17)

363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
387
388
385
386
389
390
391
392
393
394

旧河道出土遺物(18)

PL.22

旧河道出土遺物(19)

425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
454

旧河道出土遺物(20)

PL.24

旧河道出土遺物(21)

474

475

476

477

478

482

479

480

481

483

484

485

486

487

488

489

490

491

492

493

494

旧河道出土遺物(22)

PL.26

495

496

497

498

499

500

501

502

503

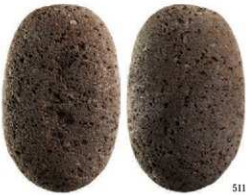
504

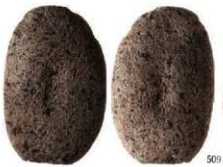
505

506

507

508


511


509

510

512

旧河道出土遺物(23)

513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531

旧河道出土遺物(24)

PL.28

旧河道出土遺物(25)

550

551

552

553

554

555

556

557

561

558

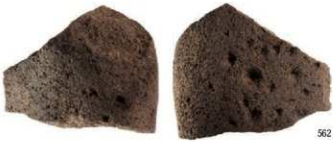
559

560

563

旧河道出土遺物(26)

PL.30


562

565

564

567

566

569

568

570

旧河道出土遺物(27)

571

572

573

576

575

574

578

579

旧河道出土遺物(28)

577

580

581

582

583

584

585

586

587

588

589

590

591

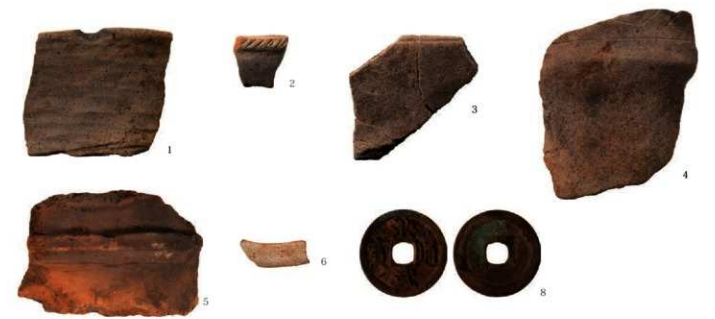
592

593

594

旧河道出土遺物(29)

旧河道出土遺物(30)



遺構外出土遺物

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	しもたじまいせき
書　名	下田島遺跡
副書名	（一）大川　社会資本総合整備（防災・安全）（５か年）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	731
編著者名	橋本淳
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20231027
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住　所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	しもたじまいせき
遺 跡 名	下田島遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたししもたじままち
遺跡所在地	群馬県太田市下田島町
市町村コード	10205
遺跡番号	T0249
北緯（世界測地系）	361554
東経（世界測地系）	1391904
調査期間	20170601-20170630
調査面積	1530.97
調査原因	河川改修
種　別	包蔵地
主な時代	縄文／古墳／古代／中近世
遺跡概要	縄文～近世－旧河道１
特記事項	旧河道内に堆積した遺物包含層
要　約	木崎台地南東端東側の沖積地に立地する遺跡。中期後葉～後期前葉期の縄文土器・石器を主体に、埴輪片や古墳時代～近世の遺物が旧河道内から多く出土した。古墳時代～近世遺物は周辺遺跡からの流れ込みと考えられるが、大量の縄文土器・石器は廃棄行為によるものと考えられ、本遺跡北西側の台地上にある西田島遺跡に該期の集落が存在し、ここに居住した縄文人が廃棄したものと推測される。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第731集

下田島遺跡

（一）大川　社会資本総合整備(防災・安全)（５か年）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和５(2023)年10月25日　印刷
令和５(2023)年10月27日　発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
電話(0279)52-2511(代表)
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／杉浦印刷株式会社